

学 位 論 文

特性的自己効力感が
課題固有の自己効力感の変容に及ぼす影響

広島大学教育学研究科

心理学専攻

三宅 幹子

目 次

第 1 章	研究の背景と目的	3
第 1 節	自己効力感研究の動向	3
1.	自己効力感とは	3
2.	これまでの自己効力感研究の概観	7
3.	これまでの自己効力感研究の問題点	12
第 2 節	自己効力感の変容操作の効果を規定する 個人要因	13
1.	個人要因の考慮の必要性	13
2.	課題固有の自己効力感と特性的自己効力感	15
3.	本研究の目的	19
第 2 章	特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容 に及ぼす影響	23
第 1 節	特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の 変容に及ぼす影響の検討(研究 1)	23
1.	目的	23
2.	方法	28
3.	結果	35
4.	考察	49

第2節	特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容を介して課題遂行に及ぼす影響の検討 (研究2)	53
1.	目的	53
2.	方法	53
3.	結果	57
4.	考察	74
第3節	特性的自己効力感とネガティブな結果に対する原因帰属の関連の検討(研究3)	75
1.	目的	75
2.	方法	78
3.	結果	82
4.	考察	95
第3章	総合考察	100
第1節	総合考察	100
第2節	今後の課題	109
引用文献	111
資料	124
謝辞	223

第1章 研究の背景と目的

第1節 自己効力感研究の動向

1. 自己効力感とは

なんらかの課題に直面したとき、課題遂行を前に、「自分にこれができるだろうか」、「うまくやり遂げることができるだろうか」と考えることは多いと思われる。時には、「これは自分の得意分野だからうまくやれるに違いない」と思い、また時には「この課題は苦手な分野だ、うまくやれるかどうか、あまり自信がないぞ」と感じるであろう。或いは、「以前にはやったことのない課題だけれど、今までたいがいのはうまくやってきたし、今回もきつとうまくやれるに違いない」と判断することもあるだろう。そして、「きつとうまくやれる」と強く感じる時には、実際に成功することを心に思い描いて積極的に課題に取り組むであろう。一方、「全くうまくいくはずがない」と絶望的に感じている時には、不安を感じ、逃げ腰になるのではないだろうか。当然、このような状態では十分に目の前の課題に対処できない。本来ならできるものも、できなくなってしまうかも知れない。

このような、課題遂行前に個人が感じる遂行可能感のことを Bandura (1977) は自己効力感 (self-efficacy) として概念化した。Bandura (1977) によれば、自己効力感とは、ある状況において、ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期である。つまり、ある行動を起こす前に個人が感じる遂行

可能感、自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する認知、あるいは、自分にはこのようなことがここまでできるのだという考えのことである(Bandura, 1982 / 1985).

これまでの研究で、自己効力感は、その後の行動を予測する機能を持つことが明らかにされてきた(坂野, 1989; 坂野・東條, 1986). すなわち、ある課題に対する自己効力感を自分がどの程度持っているか(perceived self-efficacy)が、その個人の行動の変容を予測し(Bandura, Reese, & Adams, 1982), その自己効力感の程度によって、情動反応や行動が異なってくるのである(坂野, 1989; 坂野・東條, 1986). このような自己効力感の行動予測機能は重視され、多岐にわたる分野において、実際の行動の先行要因として取り上げられ、数多くの研究がなされてきた(中澤・大野木・伊藤・坂野・鎌原, 1988).

自己効力感の3つの次元 ところで、自己効力感には、大きさ(magnitude), 強さ(strength), 一般性(generality)の3つの次元がある(Bandura, 1977). 大きさの次元とは、困難さのレベルの順に並べられている行動(例えば、困難さの順に並べられた課題)について、どのレベルまで遂行できると感じるかの程度である. 強さの次元とは、「遂行できる」と感じたレベルのそれぞれに対し、どの程度の確からしさをもって遂行できると感じているか、という確信の程度である. 一般性の次元とは、場面間における自己効力感の共変動関係の程度についての概念である. 例えば、Bandura & Adams (1977) は、ヘビ恐怖症者を対象に、特定の種類のヘビに対する対処について獲得された自己効力感が、別の種類のヘビへの対処についての自己効力感にどの程度影響を与えている

かを測定し、自己効力感の汎化を検討した。このような、ある特定の行動に対する自己効力感の変化にともない、類似した行動の自己効力感が共変動する程度を一般性の次元と呼ぶ。

自己効力感の情報源 さて、自己効力感の形成に影響する要因として、Bandura (1977) は、遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、情緒的喚起、の4つの情報源に言及している。1つめの遂行行動の達成は、自分で実際に行うことにより行為的な (enactive) 情報を得るというものであり、自己効力感に対して、4つのうちで最も強力な効果を持つ。2つめの代理的経験は、他者 (モデル) の行動の観察 (モデリング) によるものである。直接経験である遂行行動の達成に比べ、その影響は弱い場合が多い。しかし人間の学習において社会的モデルがもつ役割の重要性や、自己効力感を変容させるための介入を実施する際の相対的な容易さを考えると、重視すべき情報源である。3つめは、言語的説得、すなわち、自己強化や他者からの説得である。最も手軽な手段であり、日常的にも最も頻繁に用いられている。しかし、言語的説得のみによって高められた自己効力感は、実際場面での困難に直面した際、簡単に消失してしまうことがある。その効果は一時的、補助的なものであり、高められた自己効力感が実際の行動により十分検証される必要があるといえよう。4つめは、情緒的喚起、すなわち、生理的な反応の体験によるものである。緊張や震えなどの生理的反応が生じた場合、それらが生じず心理的に冷静であった場合に比べ、自己効力感は弱まると考えられる。

要するに、自己効力感は自然発生的に生じるのではなく、上述した4つの情報源を通して、個人が自らつくり出していくものなので

ある (Bandura, 1977; 中澤他, 1988).

期待概念の分類 Bandura (1977) は、従来の期待概念に対して、効力期待と結果期待の区別を導入し、両者の違いについて次のように述べている。“結果期待とは、所与の行動がある結果に至るであろうという、その人の査定である。効力期待とは、その結果に必要な行動を、自らがうまく実行できるという確信である。結果期待と効力期待は区別される。というのは、人が一連の行動がある結果を生むとわかっていたとしても、自らが必要とされる行動を遂行できるかどうかを疑っているならば、そのような情報は行動に影響しないであろうから”。また、効力期待と行動の関係について、“知覚された効力期待は、活動や場面の選択に影響するのみならず、努力にも影響する。知覚された効力期待は、どれくらい努力するか、困難に直面した際にどれくらい耐えるかを決定する。すなわち、知覚された効力期待が強ければ強いほど、より努力するのである (Pp. 193-194)” と述べ、知覚された効力期待のことを自己効力感と呼んだ。

効力期待と結果期待とを区別することの理論的な意義、研究上の意義は、動機づけプロセスについて、より綿密な検討および実態に即したアプローチを可能にした点である。例えば、“非随伴性経験が必ずしも動機づけを低下させるわけではない” (鎌原・山地・奈須・村上・鹿毛, 1987, p.130) など、学習性無力感研究では説明し切れなかった現象の説明が、効力期待と結果期待とを区別することにより、可能になった。学習性無力感 (Seligman, 1975) の考え方や locus of control の概念 (Rotter, 1966) は、行動と結果の随伴性の認知に着目したものであり、Bandura (1977) のいう結果期待に

あたるものしか対象としていないといえるのに対し、効力期待と結果期待を区別し、人間の行動を予測するためには効力期待も考慮する必要があることを指摘した点が、Banduraの発想の独特な点であり、意義深いところである（竹綱・鎌原・沢崎, 1988）。

また、実際の・実用的な意義としては、次のような点が挙げられる。自己効力感の操作により従来の治療技法による治療が促進される点、自己効力感の操作のみによる行動の変容が可能である点、解釈的な心理療法と行動論的な心理療法とをともに認知的反応を取り扱うものと捉えなおして、両者を統合した行動変容を説明する理論を構築できる可能性を持つ点などである（中澤他, 1988）。自己効力感研究は、臨床や教育の分野で特に盛んに行なわれているが、その背景にはこのような自己効力感概念の実用性の高さがある。

2. これまでの自己効力感研究の概観

自己効力感に関する実証的研究は、恐怖症の治療場面での研究（e.g., Bandura, Adams, & Beyer, 1977）から始まり、その後、数多行なわれてきた。理論的研究、基礎的研究、およびモデル構築に関する研究は、主にBandura他（e.g., Bandura, 1977; Bandura & Adams, 1977）や、Maddux他（e.g., Maddux, Norton, & Stoltenberg, 1986; Maddux, Sherer, & Rogers, 1982）によってなされた。一方で、実践への寄与をめざした実験室的研究や臨床場面での研究が、多岐の領域にわたり、多くの研究者によって手がけられている。ここでは、それらの実験室的研究や臨床的研究を、Bandura（1995）、竹綱他（1988）、中澤他（1988）、廣瀬（1998）のレビューを参考にして、以下の、臨床分野での治療や行動形成に関する研究、学

業課題の達成に関する研究，進路選択・職業に関する研究，日常生活の中での具体的課題に関する研究の4領域，および，尺度化についての研究の領域に大別し，各領域のおもな研究知見について概説する。

臨床分野での治療や行動形成に関する研究 この領域の研究は，恐怖症や不安に関する研究と，自己制御に関する研究に大別される。恐怖症や不安反応に関する研究としては，ヘビ恐怖症（e.g., Bandura & Adams, 1977），クモ恐怖症（e.g., Bandura, Reese, & Adams, 1982），対人恐怖症（e.g., Lane & Borkovec, 1984），広場恐怖症（e.g., Bandura, Taylor, Williams, Mefford, & Barchas, 1985），高所恐怖症（e.g., Williams, Turner, & Peer, 1985）などの諸種の恐怖症の治療において，自己効力感と行動（治療効果）との関連に焦点をあてた研究が行なわれている。自己制御に関する研究としては，禁煙（e.g., DiClemente, 1981），減量（e.g., Mitchell & Stuart, 1984），痛みコントロール（e.g., Manning & Wright, 1983），主張行動（e.g., Pentz & Kazdin, 1982）など，自己制御を必要とする行動の維持や形成についての自己効力感と実際の行動との関連に焦点を当てた研究が主に行なわれている。これら，実験的研究・臨床的研究の多くが，自己効力感の高さから後の行動変容を予測できるとの見解（Bandura, 1982 / 1985）を支持しており，自己効力感の高さが，個人の行動の変容を予測し，情動反応を抑制する要因となることを示している。

学業課題の達成に関する研究 この領域の研究の代表的なものとして，小学生児童の学習課題達成場面に着目した，Schunk 他の一連の研究（e.g., Bandura & Schunk, 1981; Schunk, 1982, 1983a,

1983b, 1983c, 1984) がある。Schunk は、数学の治療教育的処遇が数学の自己効力感や成績に与える影響を検討した。例えば、帰属フィードバックの効果に関する研究では (Schunk, 1982, 1983a, 1984; Schunk & Cox, 1986), 能力帰属フィードバック (当該課題の遂行成績を能力に帰属する) と努力帰属フィードバック (当該課題の遂行成績を努力に帰属する) が、その後の自己効力感にどのように影響するかを調べた。帰属フィードバックとは、当該課題の遂行結果と一緒に、なぜそのような結果になったのかをフィードバックする方法である。その結果、以下のような知見を得た。すなわち、(1)成功経験を努力に帰属することは、進歩の感覚、動機づけの維持、将来の学習への自己効力感の上昇をもたらす。(2)成功経験を能力に帰属する場合は、努力のみに帰属する場合、および、能力と努力の双方に帰属する場合に比べ、自己効力感とスキルの向上が大きい。(3)フィードバックを行うタイミングに関して、取り組みの初期での成功を努力に帰属し、その後スキルが向上してからの成功を能力に帰属すると、自己効力感の向上に、より効果的である。これらの結果は、成功または失敗という結果についての知識と一緒に、なぜそのような結果になったか (原因帰属) をフィードバックすることにより、その後の自己効力感の変容に効果的な介入が可能になることを示している (Schunk, 1989)。

進路選択・職業に関する研究 職業選択に対する自己効力感の研究 (e.g., Hackett & Betz, 1981; Betz & Hackett, 1981, 1983), 進路選択過程に対する自己効力感の研究 (e.g., Wheeler, 1983), 進路適応に対する自己効力感の研究 (e.g., Fretz, Kluge, Ossana, Jones, & Merikangas, 1989) に大別される (廣瀬, 1998)。進路選

択に関する自己効力感研究の領域では、どのような職業に自信を持っているかを調べる尺度の作成、各種職業についての自己効力感の高さと性別等の諸要因との関係の検討などが行なわれている。進路選択過程に対する自己効力感研究は、進路選択の過程において必要となる具体的行動に対する自己効力感について、これと他の諸変数（例えば、進路不決断、自尊感情、性役割観）との関連の検討が行なわれている。また、進路適応に対する自己効力感とは、進路を選択し、選んだ進路（職業）において満足と成功を得ることに対する自己効力感であり、職業における実績などとの関連が検討されている。これらの、進路選択・職業に関する研究は、職業選択における性差を問題として発展した領域であるため、性差の解明や特に女性の職業選択を扱った研究が多い。また、多くの要因との関連が広く検討されているが、要因間の関連性の解明や体系化はまだ不十分な状態にある（廣瀬, 1998）。

日常生活の中での具体的課題に関する研究 機械体操競技会の各種目についての自己効力感（e.g., Lee, 1982），テニスについての自己効力感（e.g., Barling & Abel, 1983），ピアノ演奏についての自己効力感（e.g., Craske & Craig, 1984）など、自己効力感と成績（パフォーマンス）の相関関係や因果関係に焦点をあてた研究が行なわれている。これらの諸研究で、当該課題に対する自己効力感が後の行動をある程度予測できることが実証されている。

尺度化についての研究 自己効力感の概念は、本来は特定の課題と密接に結びついた認知であり、一般的な人格特性として考えられる性質のものではなかった。しかし、Bandura (1977) が自己効力感の一般性の次元として捉えた、汎化（特定の場面での経験がその

場面を超えて、より一般的な統制感を形成するという性質) の概念にもとづき、個々の課題を超えて、ある領域において一般的な自己効力感の個人差を測定する尺度を作成する試みがなされるようになった。これらは、限定された実験室的状況における研究のみでなく、より広汎な統制されない状況での調査研究を行なうためには特に有用であり、また、必要とされる(竹綱他, 1988)。

領域ごとの自己効力感の尺度化を行なう研究では、禁煙行動(e.g., Conditte & Lichtenstein, 1981), 対人関係場面(e.g., Moe & Zeiss, 1982), 数学(e.g., Betz & Hackett, 1983), 職業(e.g., Norwich, 1986; Betz & Hackett, 1981) などについて、ある領域に含まれる課題や状況を数多く集め、そこでの自己効力感を評定させる項目により尺度を構成している。

また、人格特性としての一般的な自己効力感の尺度化を行なった研究もあり、具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感を測定するための尺度の作成が行なわれている。主なものとして、Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, & Rogers (1982) による、「行動の自発性」, 「行動を完遂するための努力の行使」, 「逆境での粘り強さ」に関する項目からなる、特性的自己効力感尺度(Self-Efficacy Scale), および、坂野・東條(1986)による、「行動の積極性」, 「失敗に対する不安」, 「能力の社会的位置づけ」の3因子からなる一般性セルフ・エフィカシー尺度などが挙げられる。

3. これまでの自己効力感研究の問題点

以上のように概観される先行研究での議論の中心は、どの領域においても、主に、行動変容の予測因としての自己効力感の機能の検討、自己効力感の向上操作を試みることにより実際に自己効力感や行動の向上を促すことが可能かどうかの検討、自己効力感の向上とその結果としての行動変容を効果的に生じさせる介入方法の探索、であった。このような方向性を持つこれまでの自己効力感研究には2つの問題点があるように思われる。

第1に、自己効力感の予測機能を前提に、低い自己効力感をいかにして上昇させ、遂行成績を上げるかに主眼をおくこれらの研究では、どのような介入方法が自己効力感や遂行成績の上昇により有効かというように、介入方法の側に論点が集約されている。それらの介入方法が、個人の内的要因（性格特性や認知傾向）とどのように相互作用し、自己効力感が変容していくのかという個人内でのメカニズムについてまで検討している研究は少ない。この点に対し、“訓練前の態度や予期は訓練効果を規定する重要な問題であるにも関わらず、それらについての実証的研究はほとんどなされていない”

(Tannenbaum, Mathieu, Salas, & Cannon-Bowers, 1991, p.417)との指摘がある。また、“自己効力感を操作する介入方策の臨床的意義と効用についても今後さらに詳しく検討する余地が残されている”（中澤他, 1988, p.241）という指摘もある。これらの指摘は、多くの研究が自己効力感に関して行なわれてきたものの、実践場面に応用可能な系統的な知見が十分には得られていないことを示している。研究での知見を実際の訓練場面に適用可能なものにしていくためには、実践的な場面で自己効力感の変容に関わると考えられる

要因を取り上げ、詳細に検討する必要がある。自己効力感の変容に関わると考えられる個人の内的要因に関しては、原因帰属やlocus of controlなどの統制感や一部の認知傾向についての研究は行なわれているものの、今後、さらに研究を進めていかなければならない部分であるといえよう。

第2の問題点として、自己効力感研究は、“その概念が臨床的に有意義であるがゆえに、提唱されてから十分な基礎研究が行なわれないままに臨床的応用研究へと移行した感がある。しかしながら、単なる構成概念としてではなく、いかに実証可能な概念としてまとめていくか、操作としておさえることが可能であるか、いかに測定できるかなどについての基礎的なデータがもっと必要とされているのではないか”（中澤他, 1988, p.241）等、基礎的データの不足が指摘されている。臨床的な研究からの知見を得ることはもちろん重要だが、臨床的研究と基礎的・実験室的研究とが相補的に知見を広めていかなければならない。自己効力感に関する系統的な理解を導くためには、基礎的研究からのデータも必要不可欠である。

第2節 自己効力感の変容操作の効果を規定する個人要因

1. 個人要因の考慮の必要性

上述の、第1の問題点に関して、近年、外的処遇と個人の内的要因との交互作用に着目する必要性を示唆するいくつかの研究がでてきている。すなわち、これまで、自己効力感への介入方法の1つである、課題の遂行成績のフィードバック情報（自己効力感の4つの

情報源のうち、最も強力な影響力を持つ「遂行行動の達成」に分類される)が自己効力感に与える影響に関して、多くの研究が行われてきた。そのような研究の中に、近年になって、フィードバック情報、自己効力感、および、課題遂行の間の影響過程を仲介する個人要因に着目した研究がいくつか存在するようになった。例えば、課題遂行前の自己効力感の高さ(高・低)によって、フィードバック情報の有無の効果が異なることを示した、Karl, O'leary-kelly, & Martocchio (1993) やTuckman & Saxon (1992) , 課題遂行前の自己効力感の高さによって、フィードバックの性質(ラーニング志向, パフォーマンス志向)が、課題遂行に異なって影響することを示したJohnson, Perlow, & Pieper (1993) がある。これらの研究は、フィードバック情報と個人要因との間の交互作用の存在を報告しており、フィードバック情報が自己効力感にもたらす影響は、介入操作を受ける以前に存在している個人要因によって、ある程度規定される可能性を示している。

つまりこれらの研究は、自己効力感の変容をより詳細に理解するためには、個人要因を考慮する必要があることを示唆しており、自己効力感の向上により効果的な介入方法を開発するための基礎的データといえる。技能訓練に関する研究分野では、訓練プログラムの効果は、訓練デザインの特徴と個人変数との相互作用に焦点を当てることによって改善されることが示されてきたが(Baldwin & Ford, 1988; Wexley, 1984) , 自己効力感を向上させるための介入の効果に関しても、介入方法と個人要因との交互作用を考慮することで、より効果的な方法を見つけ出すことが可能になろう。

2. 課題固有の自己効力感と特性的自己効力感

ところで、自己効力感には2つの水準があることが知られている(坂野・東條, 1993)。1つは課題や場面に特異的に影響を及ぼす自己効力感(課題固有の自己効力感: task specific self-efficacy)であり、もう1つは、具体的な個々の課題や状況に依存せず、より長期的に、一般化した日常場面における行動に影響する、人格特性的な認知傾向としての自己効力感(特性的自己効力感¹⁾: generalized self-efficacy)である(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)。

もともと自己効力感の概念は、Bandura (1977)により、個々の課題に固有のものとして提唱されてきたが、自己効力感が汎化することに着目して、より一般的な自己効力感について扱う研究が出現してきた。その中で、比較的早い時期に特性的自己効力感に注目していたのは、Sherer et al. (1982)である。彼らは、特性的自己効力感を“日常生活における障害の克服と目標の達成のための個人の能力についての信念”(Shelton, 1990, p.990)として捉え、それは過去の成功と失敗の経験から形成され、個人差を持つことを指摘した。また同時に、特定の状況だけでなく、未経験の新しい状況も適応的に処理できるという期待(課題固有の自己効力感など)に影響を与えることを示唆している。つまり、課題固有の自己効力感を高く認知したり低く認知したりする傾向は、個人により異なり、この高・低が個人の行動全般に渡って影響すると考えられているのである。

¹⁾ 特性的自己効力感とは、generalized self-efficacyの訳語であるが、これに対する定訳はなく、一般化効力感、あるいは一般性効力感と呼ばれることもある。ここでは、一般化(一般性)という言葉の意味が多義的になる恐れがあるという指摘(成田他, 1995)にもとづき、特性的自己効力感と記述する。

先述した、自己効力感研究の問題点に対して、この特性的自己効力感の概念は重要な意味を持つ。すなわち、個人の側から自己効力感の変容を理解しようとするならば、介入処遇の影響だけではなく、その個人の特性的自己効力感も考慮に入れて、当該行動についての自己効力感の変容を理解する必要がある。この点について、坂野・東條（1986）は、臨床場面において、問題とされている行動に対する自己効力感（課題固有の自己効力感）だけではなく、認知的特性としての自己効力感（特性的自己効力感）も考慮して、クライアントの行動を査定し理解する必要性を指摘している。すなわち、坂野・東條（1986）によれば、課題固有の自己効力感と特性的自己効力感の2つの観点からの査定を総合することによって、行動変容のより適切な予測が可能となるという。このことは、臨床の治療場面に限らず、より一般的なスキル訓練や教育場面にも当てはまる。特性的自己効力感のような個人的背景を考慮することによって、より効果的な訓練プログラム、教育処方を考案できるであろう。

さて、課題固有の自己効力感と特性的自己効力感との関連については、以下に述べるような理論的考察が行なわれている。

特性的自己効力感の概念は、“課題固有の自己効力感は汎化する”（Shelton, 1989, p.5, 1990, p.990; Sherer et al., 1982, p.664; Tipton & Worthington, 1984, p.545）という前提を基礎としており、課題固有の自己効力感の集積によって特性的自己効力感が形成されると考えられている（Sherer et al., 1982）。そして、いったん特性的自己効力感が形成されると、それが特定の課題についての自己効力感判断のための1つの情報源として働く、という両者間の関連が想定されている（Sherer et al., 1982; Watt & Martin, 1994）。ま

た、状況が明確に規定されており、よく見知っているものである場合には、当該課題状況についての課題固有の自己効力感が、遂行行動により強く影響し、状況がより曖昧で新奇なものである場合には、特性的効力感が、遂行行動を比較的強く規定すると考えられている (Tipton & Worthington, 1984) . 坂野・東條 (1986) も、特性的自己効力感を“個人が、様々な場面において自己の行動の遂行可能性について、どのような見通しをもって行動を生起させているかの目安となる変数” (p.80)として捉えており、両者の間の関連については、ある特定の行動遂行場面では、当該の行動に対する課題固有な自己効力感の高さが重要な要因となっているが、それにはその個人のより一般的な自己効力感のレベルである、特性的自己効力感が大きな影響をもたらしている、と述べている。そしてこの両者の関係を、いわば“状態不安 (state anxiety) と特性不安 (trait anxiety) の関係に相当するもの” (p.80)と説明している。課題固有の自己効力感と特性的自己効力感との関連についての上記の見解は、いずれも特性的自己効力感を課題固有の自己効力感の形成・変容に影響を与える情報源として捉えている点で一致している。

課題固有の自己効力感と特性的自己効力感の関連についての実証的研究も、幾つか行なわれてはいるが、そのほとんどは質問紙を用いた両者間の相関関係の検討にとどまっている (たとえば, Ferrari & Parker (1992) は、両者間の関係について、問題とする課題の課題特殊性が大きい場合には相関が小さくなる、との知見を得ている) . その中で、実験的データをもとに両者の影響過程に言及しているのは、Watt & Martin (1994) である。Watt & Martinは、大学生を対象として、特性的自己効力感と、反応潜時課題

(response-latency task) に対する自己効力感（課題固有の自己効力感）との関連を検討した。すなわち、特性的自己効力感の指標としてSherer et al. (1982) の特性的自己効力感尺度の得点を用い、これと、反応潜時課題に対する自己効力感を問う項目の得点との間の相関係数を算出した。その結果、課題遂行前の課題固有の自己効力感と特性的自己効力感との間に、 $r = .52$ の相関係数を得た。また、課題の遂行成績と特性的自己効力感の間には、 $r = .23$ の偏相関係数を得た（偏相関係数は、課題遂行前の課題固有の自己効力感を統制変数として用いて算出した）。これらはともに統計的に有意であった。これらは、課題遂行前に測定した、特性的自己効力感と課題固有の自己効力感における結果であるが、実際の課題遂行と、実験参加者への課題遂行結果のフィードバックの後にも（課題遂行結果のフィードバックとして操作を加えた情報が使用された。具体的には、ポジティブ・フィードバック条件では、「10試行中8試行において平均以上の成績であった」と通知され、ネガティブ・フィードバック条件では、「10試行中8試行で平均以下の成績であった」と通知された）、課題遂行前の測定に使用したのと同じの質問項目を用いて、課題遂行後の自己効力感の測定が行われた。その結果、課題遂行後の課題固有の自己効力感と特性的自己効力感との間には有意な相関はみられなかった。

この結果から、Watt & Martin (1994) は、特性的自己効力感と課題固有の自己効力感との間の関連について、以下のように考察している。(1)特性的自己効力感と課題遂行前の課題固有の自己効力感の間の相関係数から、両者の関連について、両者は同義ではないが、基底的な関連をもっていると考えられる。この結果は、特性的自己

効力感が課題固有の自己効力感の情報源となる (Shelton, 1990) という考え方と整合するものである。ただし、この相関係数の高さには実験課題の性質が影響していると考えられる。すなわち、Watt & Martinが使用した実験課題が、実験参加者にとって新奇性の高い課題であったため、課題についての知識が少ない課題遂行前に、特性的自己効力感の高さが課題固有の自己効力感に比較的強く影響し、両者間に高い相関が見られたと考えられる。また、(2)特性的自己効力感、課題遂行前の課題固有の自己効力感、および、課題の遂行成績の3者間の相関係数と偏相関係数の値から、これらの間には、特性的自己効力感が課題遂行前の課題固有の自己効力感の情報源となり、課題固有の自己効力感を通じて、課題成績にも影響を及ぼしている、という影響過程が考えられる。さらに、(3)特性的自己効力感と課題遂行後の課題固有の自己効力感との間には統計的に有意な相関係数は見出されなかったことについては、実際に課題を遂行した後には、課題についての知識や経験が得られ、特性的な自己効力感とは独立した課題固有の自己効力感が形成されたため、両者間に有意な相関はみられなくなったと解釈される。

このように、Watt & Martin (1994) も、実験的に課題固有の自己効力感の変容過程を扱ってはいるものの、両者の影響関係については相関の分析に基づく推測にとどまっている。

3. 本研究の目的

先述のように、課題固有の自己効力感の変容において、外的処遇の影響と個人の内的要因との交互作用の存在を示す研究 (Karl et al., 1993; Tuckman & Sexon, 1992; Johnson, Perlow, & Pieper,

1993) が報告されていることから、課題固有の自己効力感の変容を予測する上で、個人要因を考慮することの必要性が示唆される。また、課題固有の自己効力感の形成、および変容には特性的自己効力感の影響が考えられるとの考察 (Sherer et al., 1982; Tipton & Worthington, 1984; 坂野・東條, 1986; Watt & Martin, 1994) からは、課題固有の自己効力感の変容を規定する個人要因として、特性的自己効力感を取り上げることの意義がうかがわれる。そこで本研究においては、課題固有の自己効力感の変容に影響を及ぼす個人要因として、特性的自己効力感の高さを取り上げ、課題固有の自己効力感への影響、および、課題固有の自己効力感を介しての課題遂行への影響について実証的に検討することを目的とする。これまでの研究から、特性的自己効力感は、課題固有の自己効力感の情報源としてその形成と変容に影響を与え、課題固有の自己効力感を介して課題遂行にも影響する、という一連の流れが想定される。しかし、特性的自己効力感と課題固有の自己効力感との間の関連についての実証的な研究は、少数である上に両者の相関関係の検討にとどまっておき、影響過程を実証的に検討したといえるものはみあたらない。上記のWatt & Martin (1994) も特性的自己効力感と課題固有の自己効力感との間の相関関係に基づいた検討を行っているのみであり、自己効力感の変容過程における両者の関連は捉えられていない。前節で述べたような問題意識に立って検討するためには、課題固有の自己効力感の変容していく過程をとらえ、その中で、特性的自己効力感がどのように影響を及ぼすかを扱う必要がある。例えば、フィードバックのような課題固有の自己効力感に対する介入操作の影響が、個人の特性的自己効力感のレベルによって変わるか否かといっ

た点の検討が必要であろう。そこで、本研究では、Watt & Martin (1994) の研究を参考に、自己効力感を操作するための介入の影響が、個人の特性的自己効力感のレベルによって異なるか否か、との観点から、特性的自己効力感が、課題固有の自己効力感の変容にいかに関与を及ぼすかを検討する（研究1，研究2）。

また、フィードバック情報が課題固有の自己効力感の変容に及ぼす影響は、ある程度、原因帰属によって規定されることが示されている（e.g., Bandura, 1986; Silver, Mitchell, & Gist, 1995）。すなわち、課題遂行成績についてのフィードバック情報は、それがどのように原因帰属されるかによって、次回の課題固有の自己効力感の変容に及ぼす影響は異なる。例えば、フィードバック情報が、能力のように安定的で自分には統制不可能な要因に帰属された場合には、不安定な要因に帰属された場合よりも、次回の課題固有の自己効力感へのフィードバック情報の影響力は強くなると考えられる。このように、フィードバック情報が課題固有の自己効力感の変容に及ぼす影響は原因帰属に仲介されていることから、特性的自己効力感の高さによってフィードバック情報の影響が異なる場合、特性的自己効力感の高さと、原因帰属傾向との間に何らかの対応関係が存在している可能性が考えられる。特性的自己効力感と原因帰属との関連については、特性的自己効力感と locus of control の間の相関関係の検討から、特性的自己効力感が高いほど内的統制（internal locus of control）傾向を示すことが知られている（藤田・笹川, 1991 ; Sherer et al., 1982）。これより、特性的自己効力感の高さは自己内の要因（例えば、能力や努力）への帰属傾向の強さと関連すると考えられる。しかし、課題遂行の成功・失敗を実験的に操作して、結果に対

する原因帰属と特性的自己効力感との関連を調べた研究において、特性的自己効力感の高・低によって原因帰属に有意な差は生じなかった (Watt & Martin, 1994) という結果もある。特性的自己効力感と原因帰属との関連について示唆を与える研究は少数であり、両者の関連についてはまだ十分に明らかになっていない。そこで本研究では、特性的自己効力感と原因帰属との関連についても検討を加える (研究3)。原因帰属訓練は、課題固有の自己効力感への介入法として有効であることが知られており (e.g., Schunk, 1989), 特性的自己効力感の高さと原因帰属傾向との間に、系統的な対応関係が存在しているならば、特性的自己効力感の高さに応じて効果的な原因帰属による介入方法が示唆されることになる。

具体的な研究方法については、研究1および研究2では、Watt & Martin (1994), Mueller (1992), Karl et al., 1993, 深田 (1986, 1987) を参考に、実験操作を加えたフィードバック情報により課題固有の自己効力感に人為的に変容を生じさせ、その変容過程において特性的自己効力感がどのように影響を与えるかを検討する、という方法をとる。また研究3では、場面想定法によって、フィードバック情報を与えられる場面を想定させ、それに対する原因帰属を調査するという方法をとる。

第2章 特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に及ぼす影響

第1節 特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に及ぼす影響の検討（研究1）

1. 目的

研究1では、Watt & Martin (1994) を参考に、課題固有の自己効力感の変容過程における特性的自己効力感の影響を検討することを目的とする。すなわち、まず、課題遂行場面において実験操作を加えた課題遂行成績のフィードバック情報を用いて、課題固有の自己効力感を人為的に変容させる。そしてその変容の仕方に特性的自己効力感の高さによる違いが生じるか否かを検討する。特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容傾向を規定しているのであれば、特性的自己効力感の高さによって、課題固有の自己効力感の変容傾向に違いが出てくると考えられる。

また、特性的自己効力感により、課題固有の自己効力感の変容傾向に違いがみられた場合、課題固有の自己効力感の高さは課題遂行に影響すると考えられるので、課題遂行量にも、課題固有の自己効力感の変容傾向の違いが反映されると予測される。この点についても併せて検討する。

以下、研究1と研究2において共通する、フィードバック情報、課題固有の自己効力感の指標、実験課題、および、参加者の選定方法について述べる。

社会的比較情報を含むフィードバック情報の使用 本研究では、Watt & Martin (1994) の研究を参考に、フィードバック情報が課題固有の自己効力感の変容に与える影響における、特性的自己効力感の影響を検討する。フィードバックは、さまざまなトレーニングや日常生活において頻繁に用いられる基本的な介入方法であり、また、実験事態での操作のしやすさや研究結果の一般化の可能性から考えても、問題の検討に用いるのに妥当な方法であると考えられる。フィードバック情報には多様な種類があるが、課題固有の自己効力感を変容させることが確かめられているフィードバック情報の1つに、課題遂行場面における課題遂行成績の自我関与的 (ego-involvement) なフィードバック情報がある。この種のフィードバック情報によって (すなわち、たとえば、課題成績のフィードバック情報として、偏差値のような、他者との比較において自己の能力を推定する社会的比較情報を用いる方法によって)、課題固有の自己効力感の変容がみられることは、深田 (1986, 1987)、Bandura & Jourden (1991)、Watt & Martin (1994) などで確かめられている。

そこで、本研究ではこのような社会的比較情報を含むフィードバック情報を用いて、課題固有の自己効力感の変容を生じさせることとする。すなわち、課題固有の自己効力感に変容を生じさせるため、社会的比較情報を人為的に操作して、“平均よりも課題成績が高かった”というフィードバック情報を与えるポジティブフィードバック条件、および、“平均よりも課題成績が低かった”というフィードバック情報を与えるネガティブフィードバック条件を設定する。また、変容傾向を考察する際のベースラインとして、一切フィード

バックを与えないフィードバックなし条件も加え、全部で3条件を設ける。複数の実験条件を設けたのは、どのようなフィードバック条件下におかれるかにより、特性的自己効力感の影響が異なることが予想されるためである。すなわち、当該課題に対する自己効力感の高さは、どれくらい努力するか、困難に直面した際にどれくらい耐えるかを決定し、自己効力感が高ければ高いほど、より耐性を発揮し努力するとされている (Bandura, 1977) 。このことから考えて、ネガティブなフィードバックを受ける脅威的な場面において、当該課題に対する自己効力感の高さの影響が特に顕著になると考えられる。それと同様に、特性的に自己効力感を高く認知する傾向の強さの違いも、ネガティブなフィードバックを受ける事態において顕著になるのではないか。おそらく、特性的自己効力感が高いほど、ネガティブなフィードバックによって課題固有の自己効力感にもたらされるダメージは小さくなると予想される。

課題固有の自己効力感の指標 さて、課題固有の自己効力感については、本研究で使用する自我関与的フィードバックのような、社会的比較情報が用いられる状況下では、*personal self-efficacy* と *competitive self-efficacy* の2つが存在するという指摘がある (Taylor, 1989)。*personal self-efficacy* とは、内的なパフォーマンスの基準に基づくものであり (たとえば、マラソンのタイム)、*competitive self-efficacy* とは、競争などの外的なパフォーマンスの基準に基づくものである (たとえば、ライバルに勝つかどうか)。同様に、Johnson, Turban, Pieper, & Ng (1996) も、上記の *personal self-efficacy* と *competitive self-efficacy* にあたるものを、それぞれ、*performance-based feedback* と *normative-based feedback* と呼び、

両者を区別している。

また、これまで、社会的比較情報を用いて、自我関与的なフィードバックを行なっている研究では (e.g., Watt & Martin, 1994), たとえば、「どの程度できると思うかを偏差値で評定してください」などの相対的な評定を求める測定方法が用いられている。それに対し、行動療法的アプローチ (e.g., Bandura, Reese, & Adams, 1982) や治療教育研究など、課題関与的状况を扱った研究では、たとえば、「いくつできると思いますか」といった絶対的な評定を求める測定方法が用いられている。これらの評定方法は、どのようなパフォーマンスの基準に照らして評定を求めるかが異なっており、実質的には、上記の *competitive self-efficacy* と *personal self-efficacy* にそれぞれほぼ対応するものを対象にしていると考えられる。また、それ以外にも「どのくらいできると思いますか」といった、総合的な評定を求める測定方法を用いている研究もある (e.g., 深田, 1986)。

ところで、本研究では社会的比較情報を操作することによって、フィードバック条件の操作を行なう。そのため、パフォーマンスのどの側面に焦点を当てて課題固有の自己効力感を評定するか (どの基準に照らして課題固有の自己効力感の評定を求めるのか) により、フィードバック情報や特性的自己効力感の影響が異なってくる可能性を考慮する必要があるだろう。すなわち、深田 (1987) は、社会的比較情報を用いた自我関与的なフィードバック情報が (具体的には、実験操作を加えた偏差値を使用)、自我関与的な自己効力感 (質問項目は、「次の問題での成績は、他の人よりいいと思いますか」と、課題関与的な自己効力感 (質問項目は、「次の問題での成績は前よりもいいと思いますか」) をどのように変容させるかを検討している。

深田のいう、自我関与的な自己効力感とは、相対的な評定による自己効力感のことであり、課題関与的な自己効力感は、絶対的な評定による自己効力感に比較的近いと考えられる。その結果、自我関与的なフィードバック情報を与えることにより、自我関与的な自己効力感の評定値は変容したが、課題関与的な自己効力感の評定値には変化はみられなかった。これより、自我関与的なフィードバック情報の効果は、自己効力感が自我関与的なものであるか課題関与的なものであるかによって異なると考えられる。そこで、本研究においては、評定基準の違いに基づいた複数の自己効力感の存在を想定する必要性を示唆する、Taylor (1989) や Johnson, et al. (1996) の考えに従い、相対的な評定、絶対的な評定、総合的な評定の3種の評定方法を用いて課題固有の自己効力感の測定を行い、3者間でフィードバック情報と特性的自己効力感の影響が異なるかどうかについても検討することとする。

ある程度、努力量が課題遂行量に反映される課題 仮説の検討のためには、実験場面で用いる課題は、少なくとも努力量を通じて遂行成績が変化するような性質の課題である必要がある。というのは、課題固有の自己効力感の高さは、努力量などの課題に対する自己投入の高さを通じて、実際の課題成績に影響を及ぼすと考えられるからである。すなわち、課題固有の自己効力感の高さが課題成績に反映されるためには、課題成績が努力量によって実際に変化し、また、実験参加者にも「課題成績に努力量が反映される」という認知をもたらす課題を使用する必要がある。自己効力感、努力量、課題成績間のサイクルはこのような課題事態においてのみ意味をなすものであり、また、そのような課題事態において初めて、課題固有の自己

効力感のレベルと努力量と実際の課題成績との間の、理論的に想定された影響過程を検討することができると考えられる。

このような条件を満たす課題の1つとして、誤表記検出課題が挙げられる。この課題は、文章を読み、その中に含まれる誤表記を見つけ出す課題である。誤表記部分には、間違いであることが明らかなものを用い、注意して読みさえすれば見つけ出すことができるようにした。すなわち、特殊能力が必要な課題ではなく、遂行成績は努力量によって変化する部分が大いといえる。本研究では、この課題を使用することとする。

実験参加者の選定 実験への参加者の、課題に対する態度（たとえば、課題の重要性の認知）も、課題固有の自己効力感や課題への取り組み方に影響を与えることが予想される。そこで、ある程度、課題に対する興味・関心が高く、課題の重要性を認識している参加者を得るため、将来、教員や研究者になる可能性の高い、教職必修科目の受講生、及び、教育学部の心理学講義を受講する学生を対象に実験参加者を募った。

2. 方法

参加者 地方小都市の国立大学である、広島大学の教職科目および心理学講義の受講学生約500名（4クラス）を対象に、特性的自己効力感尺度（成田他，1995；尺度項目を表2.1.1に示す）を集団で実施し、尺度実施後に実験の参加者を募った（使用した質問紙を巻末に資料A.として添付している）。特性的自己効力感尺度には、「そう思う(5)」から「そうは思わない(1)」までの5段階で評定を求め、評定値が大きいほど特性的自己効力感が高くなるように集計して、

表 2.1.1 特性的自己効力感尺度の尺度項目

尺度項目
・自分が立てた計画は、うまくできる自信がある
・しなければならぬことがあっても、なかなか取りかからない(R)
・初めはうまくいかない仕事でもできるまでやり続ける
・新しい友達を作るのが苦手だ (R)
・重要な目標を決めても、めったに成功しない (R)
・何かを終える前にあきらめてしまう (R)
・会いたい人を見かけたら、むこうから来るのを待たないでその人の所へ行く
・困難に出会うのを避ける (R)
・非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない(R)
・友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう (R)
・面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる
・何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる
・新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくときすぐにあきらめてしまう (R)
・最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろうとする (R)
・思いがけない問題が起こったとき、それをうまく処理できない (R)
・難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない
・失敗すると一生懸命やろうと思う
・人の集まりの中では、うまく振る舞えない (R)
・何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる (R)
・人に頼らない方だ
・私は自分から友達を作るのがうまい
・すぐにあきらめてしまう (R)
・人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない (R)

注. 成田他 (1995) より引用.

各項目に、「5. そう思う」から「1. そうは思わない」までの5段階で評定を求め、項目得点の和を尺度得点とした (23項目, 1 因子構造, 得点可能な範囲は 23-115). (R) を付した項目は、逆転項目である.

特性的自己効力感尺度得点とした。

実験への参加の了承が得られた102名を、回答に不備の無かった全調査参加者（476名）の尺度得点の平均値（70.30）に基づき、特性的自己効力感高群（52名）と低群（50名）とに分け、さらに各群をそれぞれ約3分の1ずつ、ポジティブフィードバック条件、ネガティブフィードバック条件、フィードバックなし条件の3つのフィードバック条件にわりあてた。その際、なるべく性別が偏らないように配慮した。この102名を対象に後述の手続きによって実験を行なったが、このうち、実験目的や実験操作（フィードバックの操作）に気づいた参加者（計12名）は除き、最終的に分析可能なデータが得られたのは90名（男性30名、女性60名、年齢は18-26歳、平均年齢は20.3歳）であった。

手続き 個別に実験を行った。実験手順は以下の通りである（図2.1.1参照）。まず、課題説明などの教示と練習試行を行った。課題のサンプルを見せながら、具体的な記入の仕方を説明し、次に、練習試行を1試行行なった。遂行時間は本試行と同じ1分30秒間であり、用いた課題も本試行と同様のものであった。練習試行の後、課題遂行前の課題固有の自己効力感（以下、課題遂行前の課題固有の自己効力感をプレSSEと呼び、また、課題固有の自己効力感をSSEと呼ぶ）の測定を行った。その後、(1)課題遂行（1分30秒間）、(2)課題遂行成績のフィードバック、(3)自己評価の測定、(4)次の試行についてのSSEの測定、を1セットとし、これを4回繰り返した。課題と自己評価の測定項目、SSEの測定項目は、すべてまとめて1つの冊子状に綴じて参加者に提示し、実験者（筆者）の指示にしたがって参加者自身が順にめくって記入していくようにした。

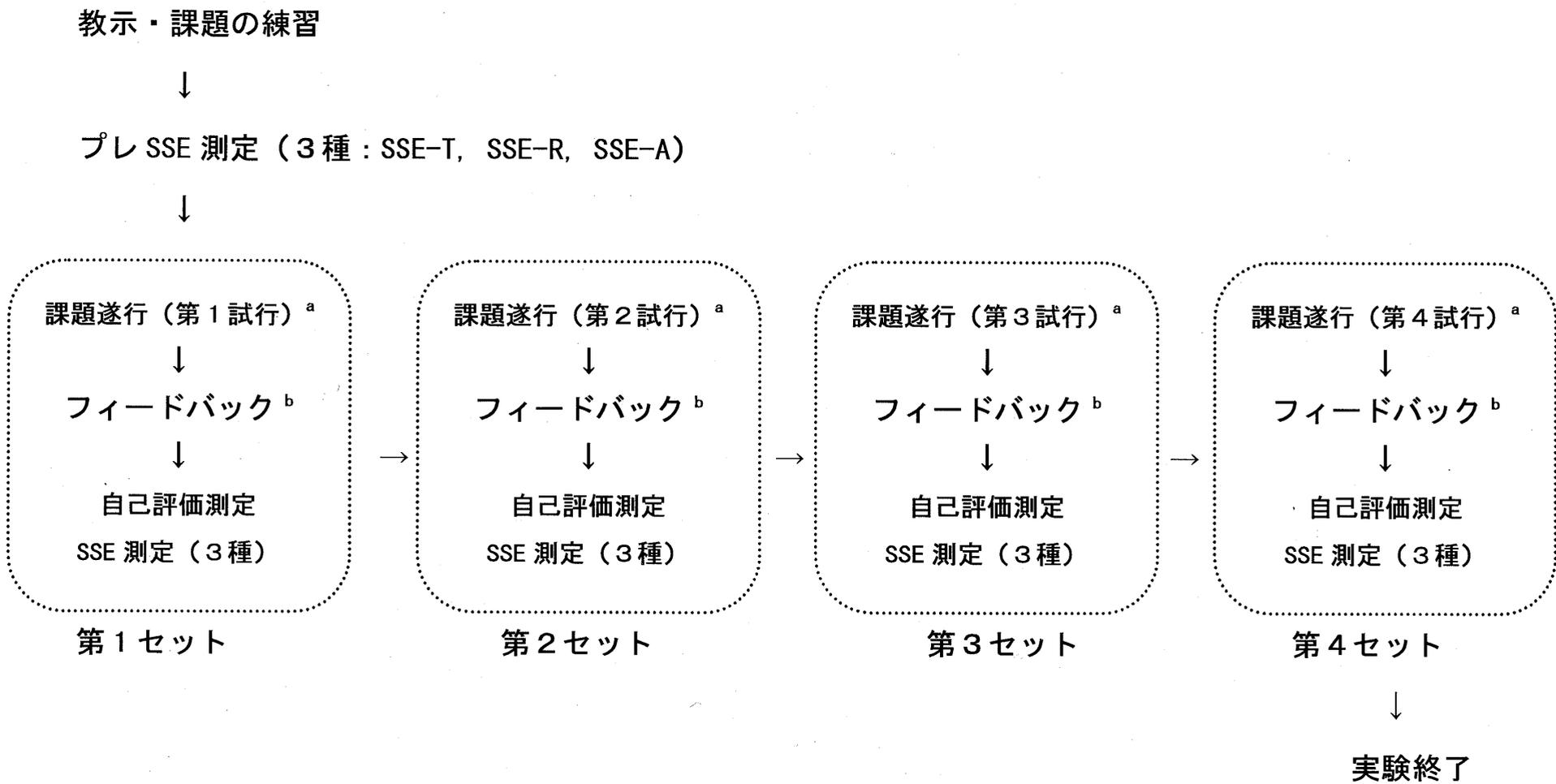


図 2.1.1 研究1の実験手順

^a課題遂行時間は、1分30秒間であった。

^bポジティブフィードバック条件、ネガティブフィードバック条件、フィードバックなし条件の3条件を設けた。

実験終了後、記入済みの冊子を回収した後、参加者に真の実験目的について説明を行なった。また、ポジティブフィードバック条件とネガティブフィードバック条件に割り当てられた参加者に対しては、フィードバック情報の操作について説明を行ない、了承を求めた。すなわち、フィードバック情報として与えられた情報の中の社会的比較情報は、参加者の実際の課題成績とは関連を持たないことを説明して理解を求めた。また、その他の点も含めて、実験全般に関して疑問な点がないかどうかを尋ね、疑問点のあった場合にはそれに答えて、実験全般についての了承を得た。

さらに、実験目的やフィードバックの操作に気づいていたかどうかを尋ねた（先述のように、気づいていた参加者12名は分析対象から除外した）。参加者1人当たりの所用時間は15分～20分であった。

課題 誤表記検出課題を用いた。課題例を図2.1.2に示す。これは、漢字仮名混じりの文章を読み、その中に含まれる漢字の誤表記を見つけだす課題である。制限時間（1分30秒間）内にできるだけたくさんの誤表記を検出するように教示した。

課題材料は、Carson (1955 / 1987) の「海辺—生命のふるさと—」から抽出した説明的文章をもとに、実験者（筆者）が漢字部分の表記を、一部、誤表記に書き換えて作成したものである。誤表記に書き換えた部分について、実験者を含まない大学院生3名に、誤表記といえるかどうかを評定させ、全員一致して誤表記と判断されたもののみを用いた。その結果採用された誤表記は、参加者にとって、注意して読めば誤表記と判断できるものであったと考えられる。すなわち、この課題は特殊能力を必要とするものではなく、遂行量は努力次第で変化し、努力量を反映するといえよう。このようにし

はてしなく続く拾い砂浜にたたずむと、そこにはニューイングラン

ドのような若い岩礁海岸では管じられない太鼓の息づかいがある。

その感覚は、無幻の時間を費やしてゆっくりと歩む地球の歴史そのも

のともいえるだろう。そこでは海と陸が何百万年もかけて気付きあ

はてしなく続く拾い砂浜にたたずむと、そこにはニューイングラン

ドのような若い岩礁海岸では管じられない太鼓の息づかいがある。

その感覚は、無幻の時間を費やしてゆっくりと歩む地球の歴史そのも

のともいえるだろう。そこでは海と陸が何百万年もかけて気付きあ

図 2.1.2 誤表記検出課題の課題例（上）と課題遂行例（下）

て1試行あたり6パラグラフ、計24パラグラフの課題を作成した。
1試行あたりの量は、1分30秒間の制限時間内に読み切ってしまうことのできない量であった。課題は1パラグラフずつA4の用紙に印刷したものを冊子状に綴じて参加者に提示した。その際、終末努力のようなバイアスをさけるため、計4回の各試行の終わり部分と、冊子の終わり部分にフィラーページを挿入した。使用した課題を、巻末に資料B.として添付している。

遂行成績のフィードバックの操作 ポジティブフィードバック条件、ネガティブフィードバック条件、フィードバックなし条件の3条件を設定した。ポジティブフィードバック条件とネガティブフィードバック条件では、各試行の課題遂行終了後に次のような手順でフィードバック情報を与えた。まず、課題遂行後に「課題の遂行成績をお知らせします」と告げて、課題遂行量（正しく検出できた誤表記の数）を集計した。次いで、その場で課題遂行量をコンピュータに入力し、以下の①～③のフィードバック情報をモニタ画面上に提示した。①参加者の課題遂行量、②参加者の課題遂行量の偏差値（「前年度の実験のデータに照らし合わせて算出した」との名目で、ポジティブフィードバック条件では65から55までの中から1つの数値を、また、ネガティブフィードバック条件では45から35までの中から1つの数値を、それぞれランダムに提示した）、③前年度の実験での広島大学の学生の平均遂行量。この平均遂行量（③）は、①と②を以下の式に代入して算出した：平均遂行量（③）＝実際の正答数（①）× {1 - (偏差値（②） - 50) / 25}。③の値は、偏差値（②）の数値に応じて、ポジティブフィードバック条件では参加者の実際の正答数（①）よりも低くなり、ネガティブフィードバック

条件では参加者の実際の正答数 (①) よりも高くなる。このように、①は参加者の実際の課題遂行量であるが、②と③は、実験操作を加えた偽りのフィードバック情報である。これらは、「この課題でのあなたの成績は、(①) でした。広島大学生を参加者とした実験結果におけるあなたの成績の偏差値は (②) です。全体の平均正答数は (③) でした。」という文章の形で提示し、第1回目のフィードバックの際に、画面の見方を説明し、フィードバック情報を理解していることを確認した。フィードバックなし条件では、いずれのフィードバック情報も与えず、課題遂行後、すぐに自己評価の測定を行った。

自己評価の測定 「さっきの問題についておたずねします。さっきの問題は、どの程度うまくできたと思いますか。」との質問項目により、課題遂行についての自己評価をさせた。評価は「10.非常にうまくできた」から「0.全然うまくできなかった」までの11段階評定であった。これはフィードバックの操作の有効性のチェックのための項目である。使用した質問紙を巻末に資料C.として添付している。

課題固有の自己効力感の測定 課題固有の自己効力感(以下, SSE と呼ぶ) の測定には、総合的な (total) 評定を求めるSSE-T項目、相対的な (relative) 評定を求めるSSE-R項目、絶対的な (absolute) 評定を求めるSSE-A項目、の3項目を使用した。測定項目と評定方法を表2.1.2に示す。また、使用した質問紙を巻末に資料D.として添付している。

3. 結果

以下では、特性的自己効力感尺度の尺度得点、および、SSEと自己評価の評定値を便宜的に間隔尺度上の得点とみなして処理する。

表 2.1.2 課題固有の自己効力感測定項目と評定方法（研究1）

SSE-T：「次の問題は、どの程度うまくできると思いますか。」

評定方法：「10.非常にうまくできる」から「0.全然うまくできない」のうち最も当てはまる数字に○をつける。

SSE-R：「広島大学の学生を対象とした、前回の実験の成績と比較したとき、次の課題における、あなたの相対的な位置はどのあたりだと思いますか。偏差値で評定してください。」

評定方法：「70以上」から「30以下」のうち最も当てはまる数字に○をつける。

70.....65.....60.....55.....50.....45.....40.....35.....30

以上 程度 程度 程度 程度 程度 程度 程度 以下

SSE-A：「次の問題では、前回と同じ時間内に、いくつの誤表記を見つけることができると思いますか。」

評定方法：「1.5個以下」, 「2.6個～8個」, 「3.9個～11個」, 以下, 同じ間隔で, 「10.30個以上」までの10段階の選択肢を提示し, その中から1つを選択する。

SSE評定値については、SSE-Tは0から10の11段階の評定値、SSE-Aは1から10の10段階の評定値を分析に使用した。また、SSE-Rは偏差値の「30以下」を1、「35程度」を2、「40程度」を3、というように、「30以下」から「70以上」までのそれぞれの選択肢に、1から9までの点数を順に与え、これを評定値として分析に使用した。なお、SSE-A、SSE-Rのいずれの尺度においても、両極端の選択肢が選択されることは皆無に近く、従って、「以上」、「以下」という表記を含むことが、間隔尺度とみなしたとき、著しく不都合をもたらすことはないと考えられる。

(1) 特性的自己効力感尺度の尺度得点の記述統計量と得点の分布

特性的自己効力感尺度の尺度得点は、評定値が大きいほど特性的自己効力感が高くなるようにして、23項目の評定値を加算し、算出した。5段階で評定を求め、評定値を1から5としたので、可能な得点範囲の下限は23点で、上限は115点である。得点分布を図2.1.3に示す。また、特性的自己効力感尺度の記述統計量、Shapiro-Wilkの W 統計量（正規性の検定）、歪度、尖度を、表2.1.3の上段に示す。表2.1.3の下段には、成田他（1995）における各値を示す。成田（1995）の結果は、首都圏のコミュニティサンプル、1542名が対象であり、この1542名は各年齢層からほぼ同数の対象者を抽出して構成してあった（平均年齢は46.30歳）。そのため大学生のみを対象としている本研究と厳密な比較はできないが、参考程度に数値を見比べると、平均値にやや違いがみられるものの、得点範囲や分布の形状には大きな違いはみられない。これより、本研究のサンプルを用いて特性的自己効力感の高さを検討することに問題はないと考えられる。

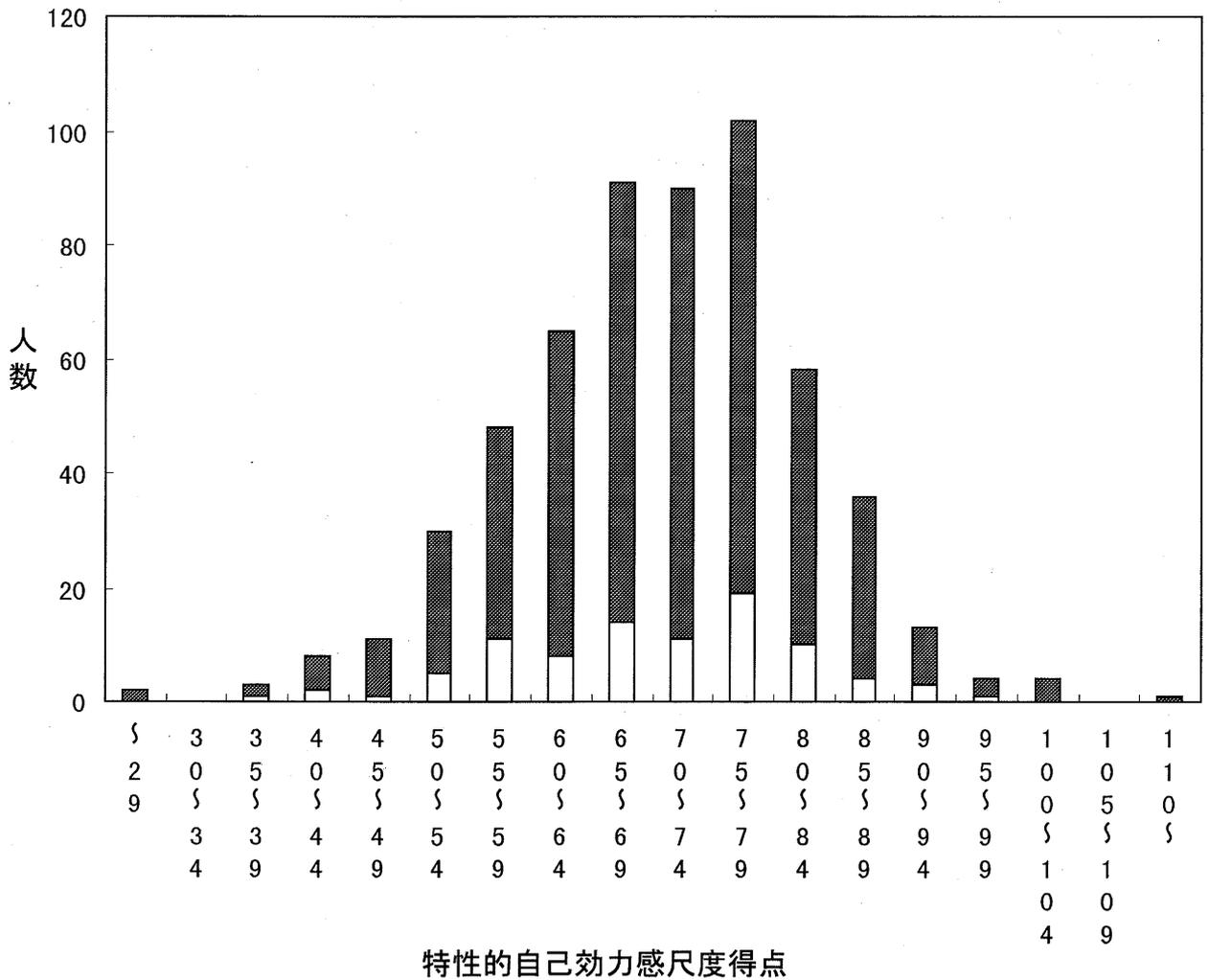
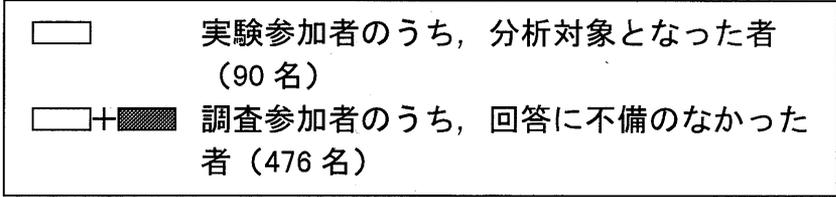


図 2.1.3 調査参加者および実験参加者の
 特性的自己効力感尺度の尺度得点の分布
 (得点可能な範囲は、23-115 である.)

表 2.1.3 特性的自己効力感尺度の尺度得点の基礎統計量と得点の分布

	サンプル数 (名) ^a	平均値	標準偏差	最小値 ^b	最大値 ^b	<i>W</i> ^c	歪度	尖度
本研究	376	70.3	12.0	23	114	.99	-.22	.80
成田他 (1995)	1542	76.5	13.7	27	115	.98	-.06	.31

^a 本研究では 18-26 歳（平均年齢は 20.3 歳）の地方小都市の大学生であり，成田他（1995）では，首都圏の各年齢層にわたるコミュニティサンプル 1524 名（平均年齢は 46.3 歳）であった。

^b 可能な得点範囲の下限は 23 点で，上限は 115 点であった。

^c Shapiro-Wilk の *W* 統計量（正規性の検定）。本研究では正規性は棄却されなかった（*W* = .99, *ns*）。成田他（1995）では正規性は棄却されたが（*W* = .98, $p < .01$ ），尖度と歪度ともに 1 には達しておらず，ほぼ正規に近い分布といえる（成田他，1995）。

(2) 特性的自己効力感とSSEとの関連, プレSSEと課題遂行量との関連

特性的自己効力感尺度得点と3種のプレSSE評定値との間, 3種のプレSSE評定値と第1試行の課題遂行量との間のピアソンの積率相関係数を算出した ($N=90$). 特性的自己効力感尺度得点とプレSSE-T, プレSSE-R, プレSSE-Aの各々との間の相関係数は, それぞれ $r=.21$ ($p<.10$), $r=.18$ ($p<.10$), $r=.09$ (ns) で, 強い相関はみられなかった. また, プレSSE-T, プレSSE-R, プレSSE-Aの各々と第1試行の課題遂行量との間には正の相関がみられ, 理論どおり, SSEが高いほど課題遂行量が多い傾向が示された (それぞれ, $r=.28$, $p<.01$; $r=.28$, $p<.01$; $r=.32$, $p<.01$).

(3) フィードバックの操作がSSEの変容に与える影響における特性的自己効力感の効果

群構成 90名の分析可能なデータから, 特性的自己効力感尺度得点の平均値付近の参加者を除外するため, 各フィードバック条件群より, 特性的自己効力感尺度得点の両極の者から12名ずつを抽出し, 特性的自己効力感群 (2) × フィードバック条件 (3) の6群を構成した (1群12名). 特性的自己効力感高群の特性的自己効力感尺度得点の平均値 (標準偏差) は, ポジティブフィードバック条件, ネガティブフィードバック条件, フィードバックなし群の順に, 81.4 (6.0), 82.6 (6.3), 80.4 (4.4) であり, 特性的自己効力感低群では同様に60.5 (6.2), 55.4 (8.7), 58.8 (5.2) であった. 特性的自己効力感尺度得点についての, 特性的自己効力感群 (2) × フィードバック条件 (3) の2要因の分散分析の結果, 特性的自己効力感の主効果のみが有意で ($F(1, 66) = 226.69$, $p<.001$), フィードバ

ック条件の主効果と、交互作用は有意ではなかったことから（順に、 $F(2, 66) = 0.57, ns$; $F(2, 66) = 1.63, ns$ ），群構成は適切であったと考えられる。

フィードバックの操作の有効性の確認 フィードバックの操作の有効性を確認するために、自己評価の評定値について、フィードバック条件（3）× 測定回（4）の2要因の分散分析を行なった。その結果、フィードバックの主効果のみが有意で（ $F(2, 207) = 4.66, p < .05$ ），各群の平均値は、ポジティブフィードバック条件（ $M = 5.8, SD = 1.7$ ），フィードバックなし条件（ $M = 4.8, SD = 2.1$ ），ネガティブフィードバック条件（ $M = 4.3, SD = 1.9$ ）の順に下がり、Ryan法を用いた多重比較の結果、ポジティブフィードバック条件とネガティブフィードバック条件の間には有意差が見られた。これよりフィードバックの操作は有効であったと考えられる。

フィードバックの操作がSSEの変容に与える影響における特性的自己効力感の効果 SSE-T, SSE-R, SSE-Aのそれぞれのプレ測定値と1回目から4回目の測定値について、各群の平均値と標準偏差を求めた（表2.1.4）。

SSE-T, SSE-R, SSE-Aそれぞれについて、フィードバックの影響を受けていないプレSSE測定値を共変量とする、特性的自己効力感群（2）× フィードバック条件（3）× 測定回（4）の3要因共分散分析を行なった。SSE-T, SSE-R, SSE-Aの1回目から4回目の測定値について、共変量による調整済み平均値の変化を図示すると、順に、図2.1.4, 図2.1.6, 図2.1.8のようになる。なお、特性的自己効力感群間でプレSSE測定値の平均値の差を検定（ t 検定）したところ、プレSSE-R にのみ特性的自己効力感高群（ $M = 5.0, SD$

表 2.1.4 条件群別, 測定回別にみた SSE-T, SSE-R, SSE-A の平均値(()内は標準偏差, 各群12名)(研究1)

	特性的自己効力感 高群			特性的自己効力感 低群			
	フィードバックなし	ポジティブ フィードバック	ネガティブ フィードバック	フィードバックなし	ポジティブ フィードバック	ネガティブ フィードバック	
SSE-T	プレ測定	5.3 (1.9)	4.9 (1.8)	5.7 (1.9)	4.5 (1.4)	5.3 (1.4)	4.4 (2.0)
	第1回測定	5.5 (1.8)	5.7 (1.8)	4.8 (1.1)	4.6 (1.8)	5.7 (1.4)	4.3 (2.3)
	第2回測定	5.4 (2.2)	5.9 (2.0)	4.8 (0.8)	4.6 (1.8)	5.8 (1.7)	4.2 (2.4)
	第3回測定	5.7 (1.8)	6.3 (1.6)	4.3 (1.0)	4.6 (1.9)	5.9 (1.6)	4.0 (2.2)
	第4回測定	5.3 (1.9)	6.1 (1.7)	4.3 (1.0)	4.3 (1.8)	6.0 (1.5)	4.0 (2.3)
	第1～第4回の平均	5.5	6.0	4.6	4.5	5.8	4.1
SSE-R	プレ測定	5.0 (1.3)	4.9 (1.2)	5.0 (1.4)	4.2 (1.3)	4.9 (1.2)	4.3 (1.4)
	第1回測定	5.1 (1.0)	5.9 (1.0)	3.8 (0.6)	4.1 (1.3)	5.8 (1.3)	3.4 (1.2)
	第2回測定	5.1 (1.2)	6.4 (1.0)	3.7 (0.9)	4.3 (1.3)	6.0 (1.4)	3.3 (1.2)
	第3回測定	5.3 (1.0)	6.7 (0.9)	3.4 (0.5)	4.3 (1.5)	6.2 (1.3)	3.2 (1.2)
	第4回測定	5.1 (1.6)	6.4 (0.9)	3.3 (0.6)	4.3 (1.5)	6.2 (1.3)	3.2 (1.2)
	第1～第4回の平均	5.1	6.4	3.5	4.2	6.0	3.3
SSE-A	プレ測定	4.1 (1.3)	3.6 (1.4)	3.8 (0.8)	3.8 (1.7)	3.7 (1.3)	3.3 (1.1)
	第1回測定	4.1 (1.3)	5.3 (2.0)	4.8 (1.6)	3.8 (1.3)	4.3 (1.6)	3.6 (0.9)
	第2回測定	4.3 (1.2)	5.2 (1.8)	5.1 (1.2)	3.9 (1.0)	4.8 (1.7)	3.7 (0.9)
	第3回測定	4.0 (1.2)	5.5 (1.8)	5.9 (1.1)	3.8 (1.1)	5.3 (1.7)	3.8 (0.9)
	第4回測定	4.3 (1.0)	5.6 (1.7)	5.8 (1.3)	4.1 (1.4)	5.2 (1.6)	4.1 (1.1)
	第1～第4回の平均	4.2	5.4	5.4	3.9	4.9	3.8

注. SSE-Tの得点範囲: 0点から10点, SSE-Rの得点範囲: 1点から9点, SSE-Aの得点範囲: 1点から10点.

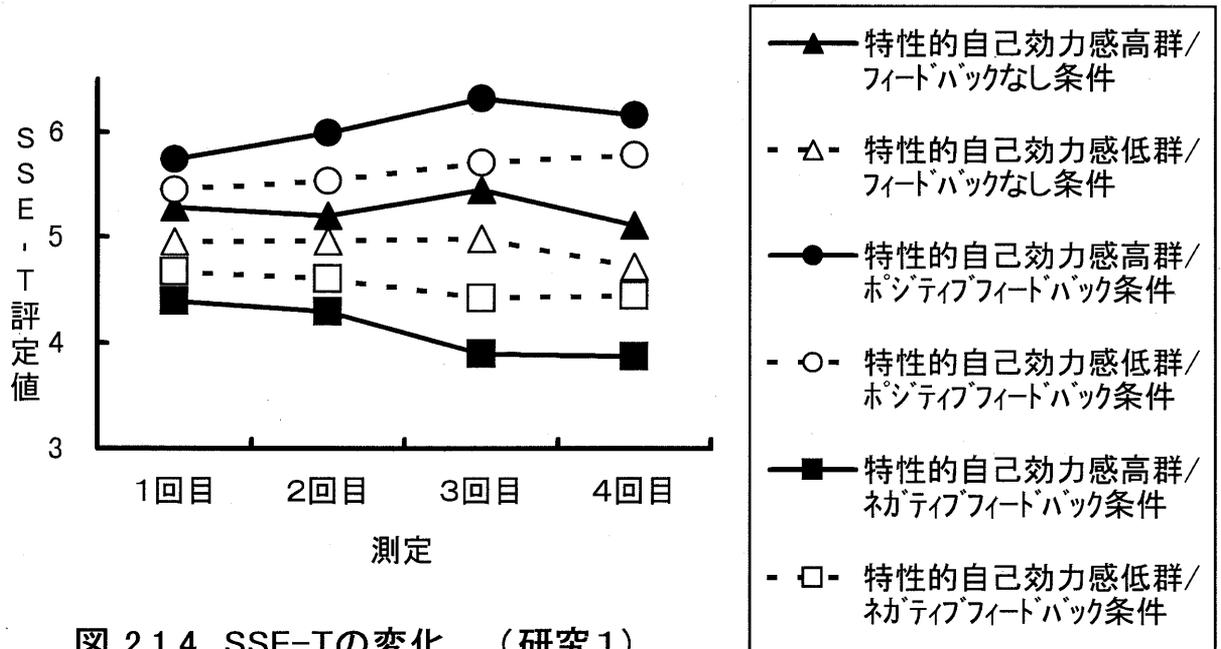


図 2.1.4 SSE-Tの変化 (研究1)
 (プレSSE-Tによる調整済み値. なお,
 プレSSE-Tの平均値は5.0である.)

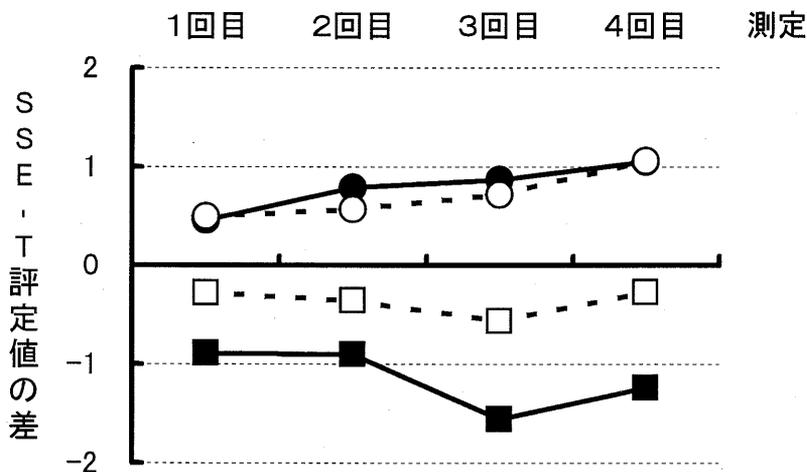
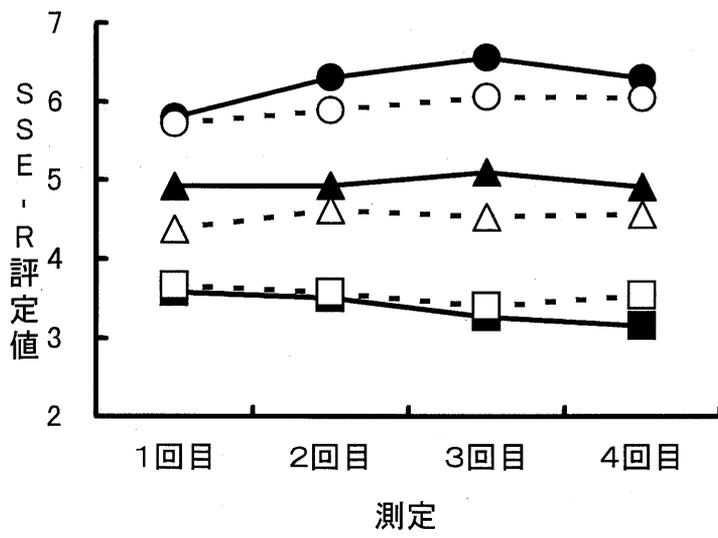


図 2.1.5 フィードバックなし条件との
 差の変化(SSE-T)



- ▲— 特性的自己効力感高群/
フィードバックなし条件
- △- 特性的自己効力感低群/
フィードバックなし条件
- 特性的自己効力感高群/
ポジティブフィードバック条件
- ○- 特性的自己効力感低群/
ポジティブフィードバック条件
- 特性的自己効力感高群/
ネガティブフィードバック条件
- □- 特性的自己効力感低群/
ネガティブフィードバック条件

図 2.1.6 SSE-Rの変化 (研究1)
(プレSSE-Rによる調整済み値. なお
プレSSE-Rの平均値は4.7である.)

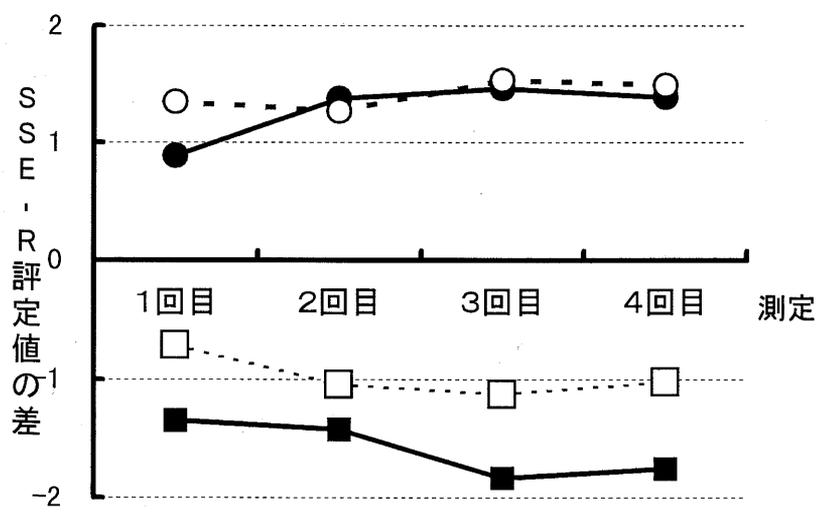


図 2.1.7 フィードバックなし条件との
差の変化(SSE-R)

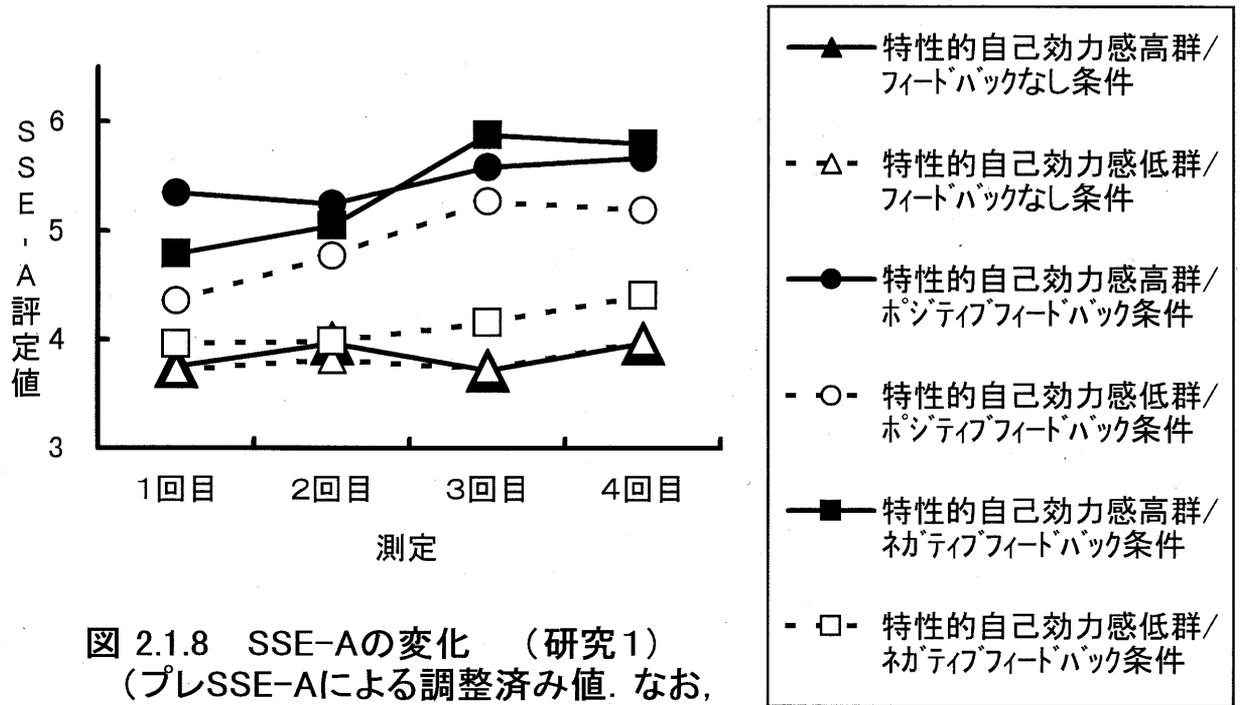


図 2.1.8 SSE-Aの変化 (研究1)
 (プレSSE-Aによる調整済み値. なお,
 プレSSE-Aの平均値は3.7である.)

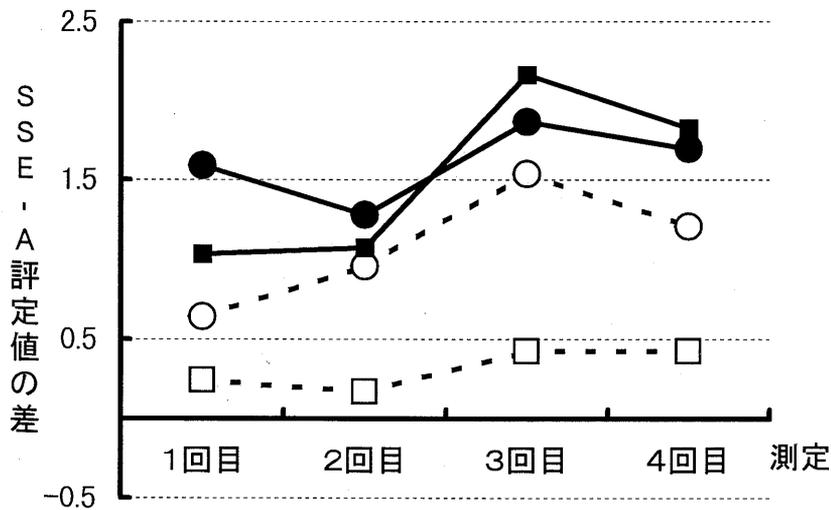


図 2.1.9 フィードバックなし条件との
 差の変化(SSE-A)

= 1.3)の方が低群 ($M=4.4$, $SD=1.3$)より高い傾向がみられたが ($t=1.7$, $df=70$, $p<.10$), SSE-T, SSE-Aのプレ測定値には差は見られなかった。

SSE-TとSSE-Rについての共分散分析では、いずれもフィードバック条件の主効果 (SSE-T: $F(2, 65) = 8.95$, $p<.001$; SSE-R: $F(2, 65) = 54.45$, $p<.001$)とフィードバック条件×測定回の交互作用のみが有意であり (SSE-T: $F(6, 195) = 3.26$, $p<.01$; SSE-R: $F(6, 195) = 3.83$, $p<.01$), 特性的自己効力感により変容の仕方に違いはみられなかった。すなわち、まず、SSEの変容を解釈する際のベースラインとなる、フィードバックなし条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向については、両群とも測定回による変容はほとんどなく、群間差もみられなかった。次に、ポジティブフィードバック条件とネガティブフィードバック条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向をみると、特性的自己効力感の高低にかかわらず、ポジティブフィードバック条件では上昇、ネガティブフィードバック条件では下降していた。これは、先行研究 (e.g., 深田, 1986) に示されているフィードバックの操作の効果と整合する結果である。上記の結果を、より視覚的に明らかにするため、特性的自己効力感群別に、ポジティブフィードバック条件およびネガティブフィードバック条件の各々と、フィードバックなし条件との間の差を算出したものを、図2.1.5と図2.1.7に示す。

次に、SSE-Aについての共分散分析の結果、特性的自己効力感群の主効果 ($F(1, 65) = 7.68$, $p<.01$), フィードバック条件の主効果 ($F(2, 65) = 12.75$, $p<.001$), 測定回的主効果 ($F(3, 195) = 13.47$, $p<.001$), フィードバック条件×測定回の交互作用 ($F(6, 195) =$

2.79, $p < .05$), 特性的自己効力感群×フィードバック条件×測定回の二次の交互作用 ($F(6, 195) = 2.79, p < .05$) が有意であった。

二次の交互作用について、フィードバック条件別に特性的自己効力感群×測定回の単純交互作用を検定したところ、ネガティブフィードバック条件でのみ有意であった ($F(3, 198) = 3.16, p < .05$)。すなわち、まず、SSEの変容を解釈する際のベースラインとなる、フィードバックなし条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向については、両群とも測定回による変容はほとんどなく、群間差もみられなかった。次に、ポジティブフィードバック条件とネガティブフィードバック条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向をみると、ネガティブフィードバック条件では、特性的自己効力感高群では測定につれ上昇するのに対し、低群では低いままで、測定につれ群間差が広がっていた(ただし群間差は1回目の測定から有意である)。一方、ポジティブフィードバック条件では特性的自己効力感群間に変容の仕方の違いはみられなかった。特性的自己効力感群別の、ポジティブフィードバック条件およびネガティブフィードバック条件の各々と、フィードバックなし条件との差を、図2.1.9に示す。

また、特性的自己効力感群別に、フィードバック条件×測定の単純交互作用を検定したところ、特性的自己効力感高群においてのみ有意であった ($F(6, 198) = 3.60, p < .01$)。すなわち、特性的自己効力感高群ではフィードバック条件間で、変容傾向が異なっており、ポジティブフィードバック条件とネガティブフィードバック条件では、1回目から4回目まで、一貫してフィードバックなし条件よりSSE-Aが高かった。また、ネガティブフィードバック条件では測定

につれて上昇がみられた。一方、特性的自己効力感低群では、このようなフィードバック条件間の変容傾向の有意な差はみられなかった。これより、特性的自己効力感の高低の影響はネガティブフィードバック条件で顕著であり、また、フィードバック条件の影響は特性的自己効力感高群で顕著であるといえよう。

ただし、特性的自己効力感低群におけるフィードバック条件の効果については、各測定ごとの、特性的自己効力感×フィードバック条件の単純交互作用の検定の結果、3回目の測定において特性的自己効力感×フィードバック条件の単純交互作用が有意で ($F(2, 264) = 4.71, p < .01$)、下位検定と多重比較の結果、ポジティブフィードバック条件では、ネガティブフィードバック条件やフィードバックなし条件よりも有意にSSE-Aが高かった。また、各フィードバック条件群の評定値自体をみると、全体的に、ネガティブフィードバック条件とフィードバックなし条件とがほぼ同程度であり、ポジティブフィードバック条件がそれらよりもやや高くなる傾向がみられた。有意な差があったのは3回目の測定のみであるが、ポジティブフィードバック条件で他の2条件よりもSSE-Aが高くなる傾向があるといえる。

(4)課題遂行量への影響

最後に、SSEの変容が課題遂行量に及ぼす影響について検討する。SSE変容が課題遂行量に影響を及ぼしていれば、SSE変容における群間差と対応した群間差が課題遂行量においてもみられるであろう。そこで、SSEの分析と同様に、第2から第4試行の課題遂行量(表2.1.5に示す)について、フィードバックの影響を受けていない第1

試行の課題遂行量を共変量とする，特性的自己効力感（2）× フィードバック条件（3）× 試行回（3）の3要因共分散分析を行った．第2試行から第4試行の課題遂行量について，共変量による調整済み平均値の変化を図2.1.10のようになる．また，特性的自己効力感群別に，ポジティブフィードバック条件およびネガティブフィードバック条件の各々と，フィードバックなし条件との差をとると，図2.1.11のようになる．分析の結果，試行回の主効果（ $F(2, 130) = 42.26, p < .001$ ）のみが有意であった．後の試行の方が遂行量が多いことと群間差が有意でないことから，この試行回の主効果は練習効果を示すと考えられる．

4. 考察

SSE-T, SSE-Rには，フィードバックの影響がみられたのみであったのに対し，SSE-Aには，ネガティブフィードバック条件で，特性的自己効力感の影響が示された．SSE-Aにのみ特性的自己効力感の影響がみられたのは，SSE評定の際に主に何を参照するかの違いによると考えられる．項目内容からして，評定の際に主に偏差値情報が参照されたと考えられるSSE-Rと，結果的にそれに連動していたSSE-Tでは，偏差値情報がその情報源として比較的大きなウェイトを占めており，特性的自己効力感のような個人的特性が影響する余地は少なかったと思われる．一方，課題遂行量についてのフィードバック情報に加えて，課題をやったの印象や手ごたえなど，主観的なものがSSE評定の際に主に参照されると考えられるSSE-Aには，特性的自己効力感の影響がより顕著にみられたものと考えられる．また，ネガティブフィードバック条件でのみ特性的自己効力感

表 2.1.5 条件群別, 測定回別にみた 課題遂行量の平均値()内は標準偏差, 各群12名)(研究1)

	特性的自己効力感 高群			特性的自己効力感 低群					
	フィードバックなし	ポジティブ フィードバック	ネガティブ フィードバック	フィードバックなし	ポジティブ フィードバック	ネガティブ フィードバック	フィードバックなし	ポジティブ フィードバック	ネガティブ フィードバック
課題遂行量	第1試行	13.4 (4.0)	17.6 (3.7)	15.2 (3.5)	14.8 (4.0)	14.8 (3.7)	12.8 (4.4)		
	第2試行	13.8 (4.5)	16.1 (2.6)	16.9 (3.0)	15.8 (3.8)	17.4 (4.1)	14.2 (4.1)		
	第3試行	16.0 (4.3)	20.5 (3.9)	20.0 (2.9)	17.8 (4.4)	19.4 (4.0)	16.3 (5.0)		
	第4試行	16.7 (3.1)	20.1 (4.3)	18.3 (4.7)	18.6 (3.9)	19.1 (4.1)	16.5 (4.7)		
	第2～第4試行の平均	15.5	18.9	18.4	17.4	18.6	15.6		

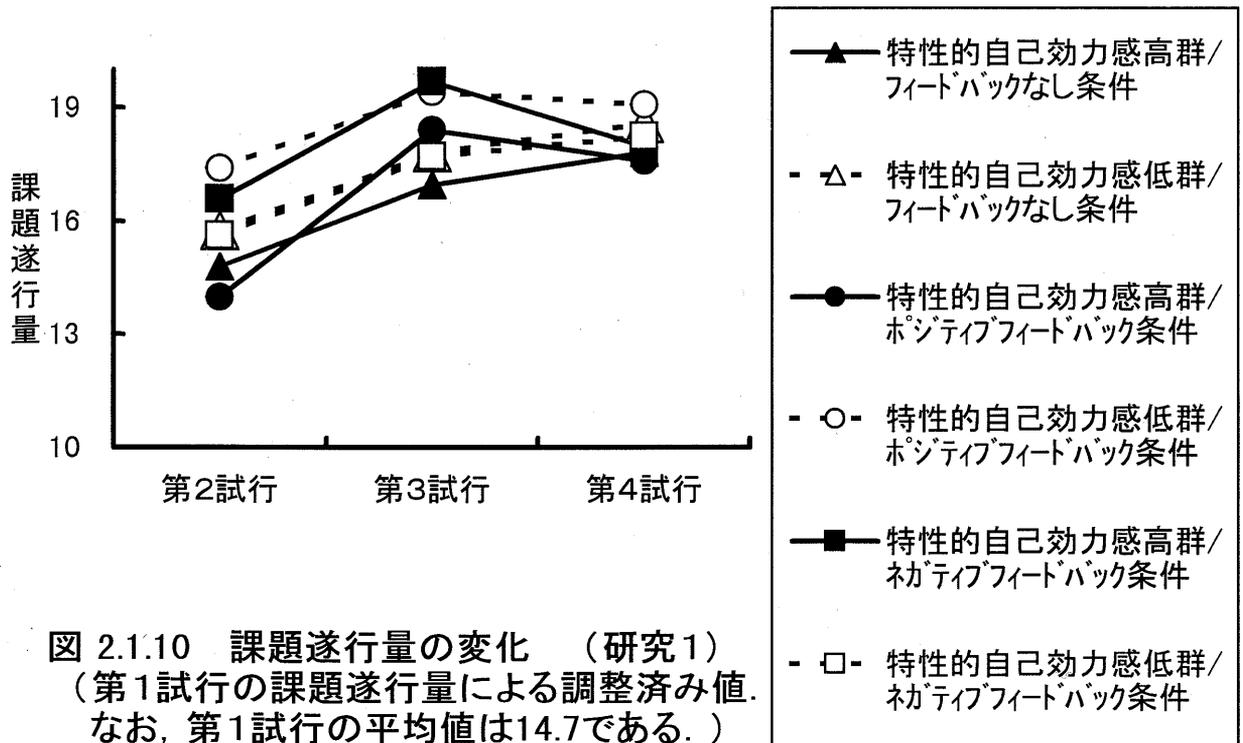


図 2.1.10 課題遂行量の変化 (研究1)
 (第1試行の課題遂行量による調整済み値。
 なお、第1試行の平均値は14.7である。)

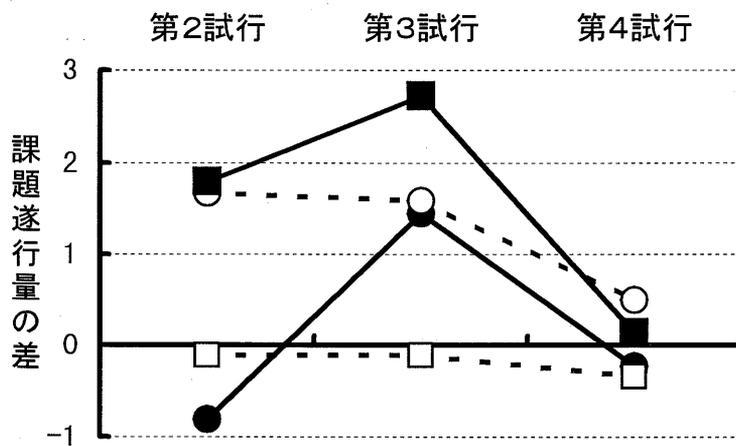


図 2.1.11 フィードバックなし条件との
 差の変化(課題遂行量)

の影響がみられたのであるが、ネガティブフィードバック条件では、偏差値情報は一貫してネガティブな情報であるのに対して、課題遂行量についてのフィードバック情報は、試行を重ねるにつれて課題遂行量が上昇しているため、結果的にポジティブなものとなっている。このことが、課題遂行量の予測に基づく測度であるSSE-Aと、その他の測度との間の変容傾向の違いをもたらした可能性がある。さらに、自己効力感の高さは、特に困難場面への反応を決定するにあたり、クリティカルな役割を果たすことが知られているが (e.g., Podsakoff & Farh, 1989), 特性的自己効力感の影響もそれと同様に、本実験でのネガティブフィードバック条件のような、「かなり偏差値が低い」という脅威的なフィードバックを受ける一種の困難場面で、顕著に表れたと考えられる。

課題遂行量には、有意な群間差はみられなかった。これについては、人為的なフィードバック操作によって生じたSSEの変容は、認知レベルにとどまるものであり、行動にまで影響しなかったという解釈も考えられる。しかし、“課題をする時間が短く、あっという間に終わってしまっていた”等の実験参加者の内省報告からは、課題遂行時間が短か過ぎたために認知レベルでの変容が課題遂行量として顕在化する余地がなかった、という実験手続きの問題である可能性も考えられる。課題遂行量にSSE変容の影響がはっきりと現われないことについて、それがSSEの性質によるものであるのか、あるいは、実験手続きの影響によるものであるのかを明らかにするために、課題遂行時間を調整して、再度、課題遂行量への影響を検討する必要があるだろう。

第2節 特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容を介して課題遂行に及ぼす影響の検討（研究2）

1. 目的

研究1では、ネガティブフィードバック条件において、特性的自己効力感高群は低群よりもSSE-Aが高いことが示された。このようなSSE-Aの変容は課題遂行量に影響を及ぼすと考えられるが、研究1では明瞭な結果が得られなかった。その原因が本質的なものか手続き上のものかを明らかにするため、研究2では、SSE-Aの変容傾向に違いがみられたネガティブフィードバック条件において、SSE-Aの変容が課題遂行量に及ぼす影響を、課題遂行時間を延長して再度検討した。すなわち研究2では、ネガティブフィードバック条件とフィードバックなし条件の2条件のみを設けた。また、その際、課題遂行量への努力の効果を認知していない参加者と課題の重要性を著しく低く認知している参加者は、課題に対する態度が不適切と考えられるので分析対象から除き、データの質の向上を図った。

ところで、SSEの変容により、課題遂行量における変化のような、行動レベルの変容が生じる前段階として、感情的な変化が生じるのではないかと推測される。そこで、課題遂行量に影響すると考えられる諸感情が、SSEの変容に伴ってどのように変容するかを調べることにより、課題遂行量の変容が生じるメカニズムについても検討を加えることとした。

2. 方法

参加者 研究1と同じ方法で、研究1と同じ大学の教職科目の受

講学生約450名（4クラス）を対象に，特性的自己効力感尺度を集団で実施し，実験参加者を募った．質問紙は，研究1で使用したものと同じ物を使用した（巻末の資料A参照）．ただし，研究1での実験に参加していない者を対象に実験参加者を募集した．実験への参加の了承が得られた64名を，回答に不備の無かった全調査参加者（375名）の尺度得点の平均値（71.10）に基づき，特性的自己効力感高群（30名）と低群（34名）に分けた．さらに各群をそれぞれ約半数ずつ，ネガティブフィードバック条件とフィードバックなし条件の2つのフィードバック条件にわりあてた．その際，なるべく性別が偏らないように配慮した．この64名を対象に，後述の手続きによって実験を行なったが，このうち，実験目的や実験操作に気づいた参加者，データに不備のあった参加者，課題の印象評定において後述するような問題点のあった参加者（計14名）は分析対象から除き，最終的に分析可能なデータが得られたのは50名（男性20名，女性30名，年齢は19-23歳，平均年齢は20.7歳）であった．

手続き 次の4点を除き，研究1の実験手続きと同様の手続きを用いた（図2.2.1参照）．(1)フィードバック条件をネガティブフィードバック条件とフィードバックなし条件の2条件にした点，(2)課題遂行時間を2分間に延長した点（練習試行も遂行時間を2分間に延長），(3)プレSSE測定の直後に，感情の測定と課題印象の測定を行なった点，(4)4回目のSSE測定の直後に，感情の測定を行なった点（感情の測定は，プレSSE測定直後の測定をプレ測定，4回目のSSE測定直後の測定をポスト測定と呼ぶ）．実験終了後，記入済みの冊子を回収した後，参加者に真の実験目的について説明を行なった．また，ネガティブフィードバック条件に割り当てられた参加者に対し

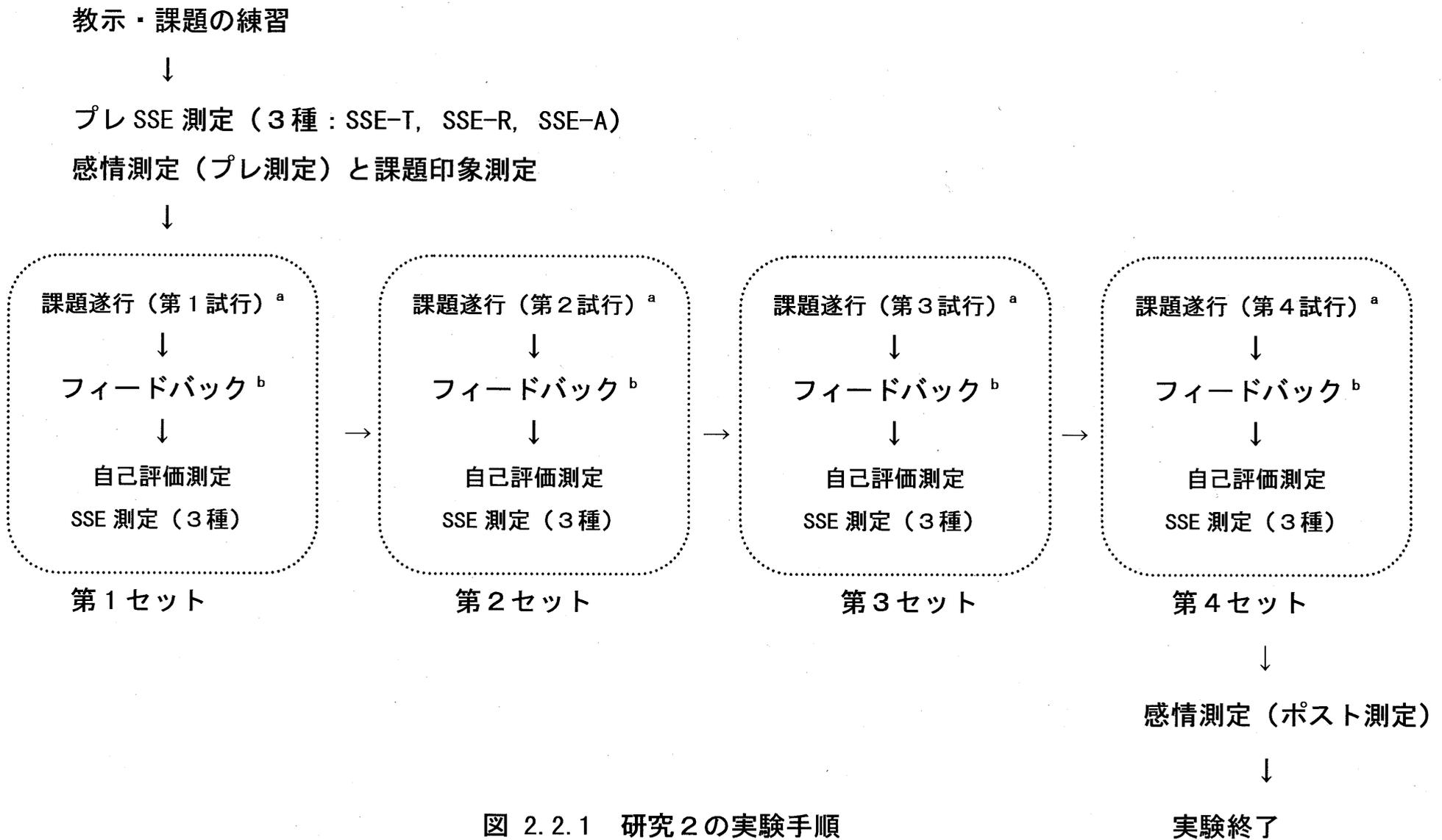


図 2.2.1 研究2の実験手順

^a 課題遂行時間は2分間であった。 ^b ネガティブフィードバック条件, フィードバックなし条件の2条件を設けた。

ては、フィードバック情報の操作についても説明を行ない、了承を求めた。すなわち、フィードバック情報として与えられた情報の中の社会的比較情報は、参加者の実際の課題成績とは関連を持たないことを説明して、参加者の理解を求めた。また、その他の点も含めて、実験全般に関して疑問な点がないかどうかを尋ね、疑問点のあった場合にはそれに答えて、実験全般についての了承を得た。さらに、実験目的やフィードバックの操作に気づいていたかどうかを尋ねた。参加者1人当たりの所用時間は、20分から25分であった。

課題 課題遂行時間を延長したため、研究1と同様の方法で追加のパラグラフを作成し、研究1で使用したパラグラフにそれを加えて用いた。使用した課題を巻末に資料B.として添付している。

感情と課題印象の測定 感情のプレ測定時には、感情の測定項目と課題印象の測定項目を1枚の質問紙にまとめて提示した。使用した質問紙を、巻末に資料E.として添付している。感情の測定項目として、深田(1986)を参考に、楽しさ(「どのくらい楽しいと感じますか」)、満足感(「課題のできにどのくらい満足していますか」)、やる気(「どのくらいやる気を感じますか」)の3項目を作成し、各々7段階で評定を求めた。評定値が大きいほどその感情を強く感じたことを表す(楽しさであれば、「7.非常に楽しい」から「1.全然楽しくない」)。

また、課題印象の測定には次の2項目を用いた。1つ目は、課題に及ぼす努力の効果の認識について知るための項目である、「この課題のできは努力しただけで変わると思いませんか」であり、これに対して「7.非常にそう思う」から「1.全然そう思わない」の7段階で評定を求めた。2つ目は、課題の重要性についての認識を知るため

の項目である、「このような課題はあなたにとってどの程度重要だと思いますか」であり、これに対して「7.非常に重要である」から「1.全然重要でない」の7段階で評定を求めた。いずれも評定値が大きいほど強くそう感じていることを示す。なお、努力についての項目で3以下に評定した参加者2名、重要性についての項目で2以下に評定した参加者7名は分析対象から除外した（ともに、前述の14名中に含まれる）。分析対象者の努力の効果と重要性の評定値の平均値（標準偏差）は、順に、5.7（1.0）、4.5（0.9）であった。

遂行成績のフィードバックの操作 ネガティブフィードバック条件、フィードバックなし条件の2条件を設定した。両条件とも、研究1と同じ方法でフィードバック情報の操作を行なった。

自己評価の測定 研究1と同じ質問紙と測定方法により、測定を行なった（巻末の資料C.参照）。

SSEの測定 研究1で使用した3項目を、研究2の実験事態に整合するよう、一部書き換えて使用した。表2.2.1 に測定項目と評定方法を示す（巻末の資料D.参照）。

3. 結果

(1) フィードバックの操作が SSE の変容に与える影響における特性的自己効力感の効果

群構成 50名の分析可能なデータから、特性的自己効力感尺度得点が平均値付近の参加者を除外するため、各フィードバック条件群より、特性的自己効力感尺度得点の両極の者から10名ずつを抽出し、特性的自己効力感群（2）× フィードバック条件（2）の4群を構成した（1群10名）。特性的自己効力感高群の尺度得点の平均値

表 2.2.1 課題固有の自己効力感測定項目と評定方法（研究2）

SSE-T : 「次の問題は、どの程度うまくできると思いますか。」
評定方法 : 「10.非常にうまくできる」から「0.全然うまくできない」のうち最も当てはまる数字に○をつける。
SSE-R : 「広島大学の学生を対象とした、前回の実験の成績と比較したとき、次の課題における、あなたの相対的な位置はどのあたりだと思いますか。偏差値で評定してください。」
評定方法 : 「70以上」から「30以下」のうち最も当てはまる数字に○をつける。 70……65……60……55……50……45……40……35……30 以上 程度 程度 程度 程度 程度 程度 程度 以下
SSE-A : 「次の問題では、前回と同じ時間内に、いくつの誤表記を見つけることができると思いますか。」
評定方法 : 「1.1 0個以下」, 「2.1 1個~1 3個」, 「3.1 4個~1 6個」, 以下, 同じ間隔で, 「12.4 1個以上」までの12段階の選択肢を提示し, その中から1つを選択する。

注. SSE-T, SSE-R の測定項目は研究1と同じものを使用し, SSE-A の測定項目は, 研究1の測定項目の選択肢を, 研究2の実験事態に合うように修正を加えて用いた。

(標準偏差) はネガティブフィードバック条件, フィードバックなし群の順に, 81.7 (5.4), 85.7 (5.7) であり, 低群では同様に62.2 (5.8), 58.9 (5.6) であった. 尺度得点について特性的自己効力感群 (2) × フィードバック条件 (2) の分散分析を行った結果, 特性的自己効力感群の主効果のみが有意で ($F(1, 36) = 151.83, p < .001$), フィードバックの主効果, 交互作用は有意ではなく (順に, $F(1, 36) = 0.04, ns$; $F(1, 36) = 3.77, p < .10$), 群構成はほぼ適切であったと考えられる.

フィードバックの操作の有効性の確認 フィードバックの操作の有効性を確認するために, 自己評価の評定値について, フィードバック条件 (2) × 測定回 (4) の分散分析を行なった. その結果, フィードバックの主効果 ($F(1, 114) = 28.38, p < .001$) が有意で, ネガティブフィードバック条件 ($M = 3.9, SD = 1.9$) ではフィードバックなし条件 ($M = 6.3, SD = 1.4$) よりも自己評価は低くなっていた. これよりフィードバックの操作は有効であったと考えられる.

フィードバックの操作がSSEの変容に与える影響における特性的自己効力感の効果 SSE-T, SSE-R, SSE-Aのそれぞれのプレ測定値と1回目から4回目の評定値について, 各群の平均値と標準偏差を求めた (表2.2.2). 研究1と同様にSSE-T, SSE-R, SSE-AそれぞれについてプレSSE測定値を共変量とする特性的自己効力感群 (2) × フィードバック条件 (2) × 測定回 (4) の3要因共分散分析を行なった. SSE-T, SSE-R, SSE-Aの1回目から4回目の評定値について, 共変量による調整済み平均値の変化を図示すると, 順に, 図2.2.2, 図2.2.4, 図2.2.6のようになる.

SSE-TとSSE-Rについての共分散分析では, いずれもフィードバ

表 2.2.2 条件群別, 測定回別にみた SSE-T, SSE-R, SSE-A の平均値(()内は標準偏差, 各群10名)(研究2)

		特性的自己効力感 高群		特性的自己効力感 低群	
		フィードバックなし	ネガティブ フィードバック	フィードバックなし	ネガティブ フィードバック
SSE-T	プレ測定	7.2 (1.5)	7.0 (1.3)	6.4 (1.1)	5.9 (1.5)
	第1回測定	7.5 (0.9)	5.7 (1.5)	6.0 (1.2)	4.7 (1.6)
	第2回測定	6.8 (1.3)	5.4 (0.9)	6.4 (1.4)	4.3 (1.9)
	第3回測定	7.2 (1.2)	5.4 (1.2)	6.3 (1.3)	4.1 (1.8)
	第4回測定	7.0 (1.3)	5.2 (1.7)	5.8 (1.3)	4.0 (2.0)
	第1～第4回の平均	7.1	5.4	6.1	4.3
SSE-R	プレ測定	4.9 (1.5)	5.7 (1.1)	4.8 (0.6)	3.8 (1.0)
	第1回測定	5.6 (1.1)	4.5 (0.8)	5.1 (0.7)	3.5 (1.2)
	第2回測定	5.2 (1.1)	4.3 (1.0)	5.3 (0.9)	3.5 (1.2)
	第3回測定	5.5 (1.4)	4.2 (0.6)	5.2 (0.8)	3.3 (1.2)
	第4回測定	5.3 (1.4)	4.2 (0.8)	5.0 (0.8)	3.2 (1.1)
	第1～第4回の平均	5.4	4.3	5.2	3.4
SSE-A	プレ測定	4.1 (1.6)	3.5 (1.3)	4.2 (1.9)	3.4 (1.5)
	第1回測定	4.5 (1.6)	5.0 (1.3)	5.1 (1.5)	4.1 (1.3)
	第2回測定	4.0 (1.8)	5.4 (1.2)	5.3 (1.8)	4.7 (0.6)
	第3回測定	4.4 (1.6)	6.5 (2.0)	5.4 (1.9)	4.7 (0.9)
	第4回測定	4.3 (1.5)	7.0 (1.6)	5.0 (1.9)	5.2 (1.0)
	第1～第4回の平均	4.3	6.0	5.2	4.7

注. SSE-Tの得点範囲: 0点から10点, SSE-Rの得点範囲: 1点から9点, SSE-Aの得点範囲: 1点から12点.

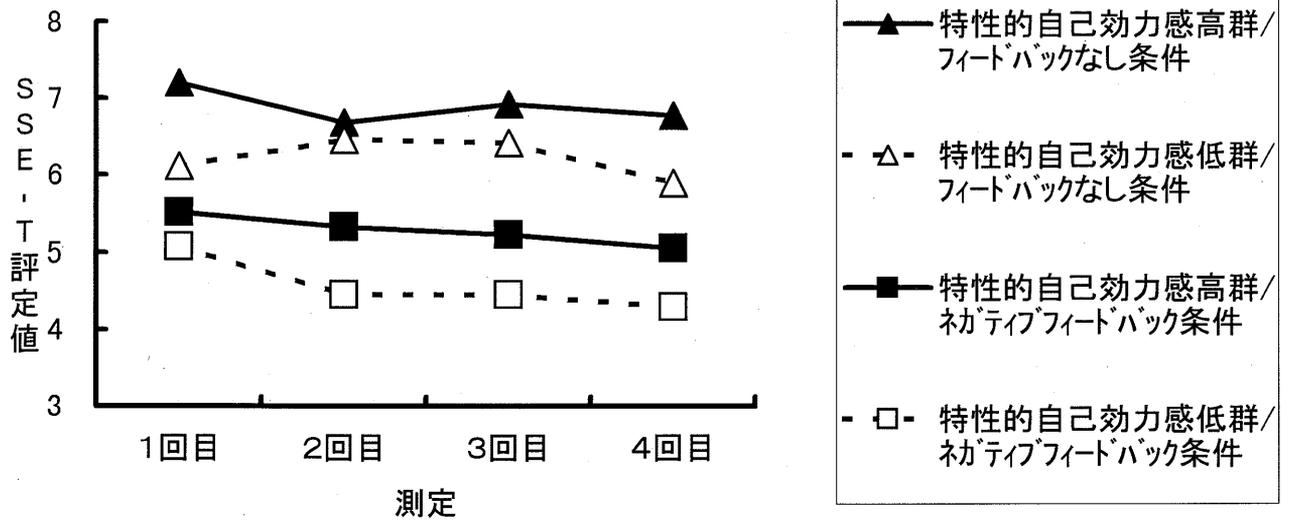


図 2.2.2 SSE-Tの変化 (研究2)
 (プレSSE-Tによる調整済み値. なお,
 プレSSE-Tの平均値は6.6である.)

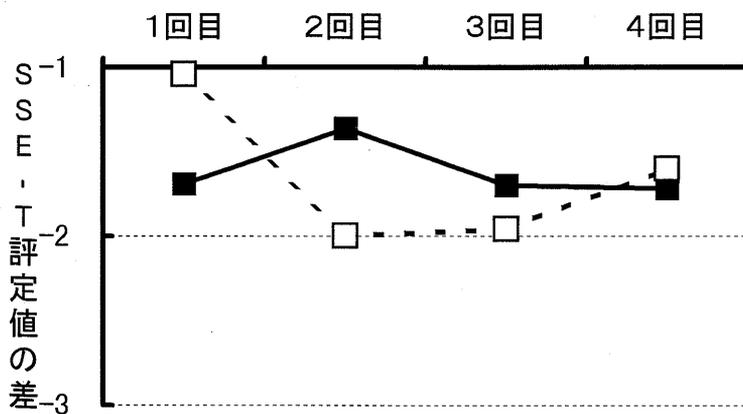


図 2.2.3 フィードバックなし条件との
 差の変化(SSE-T)

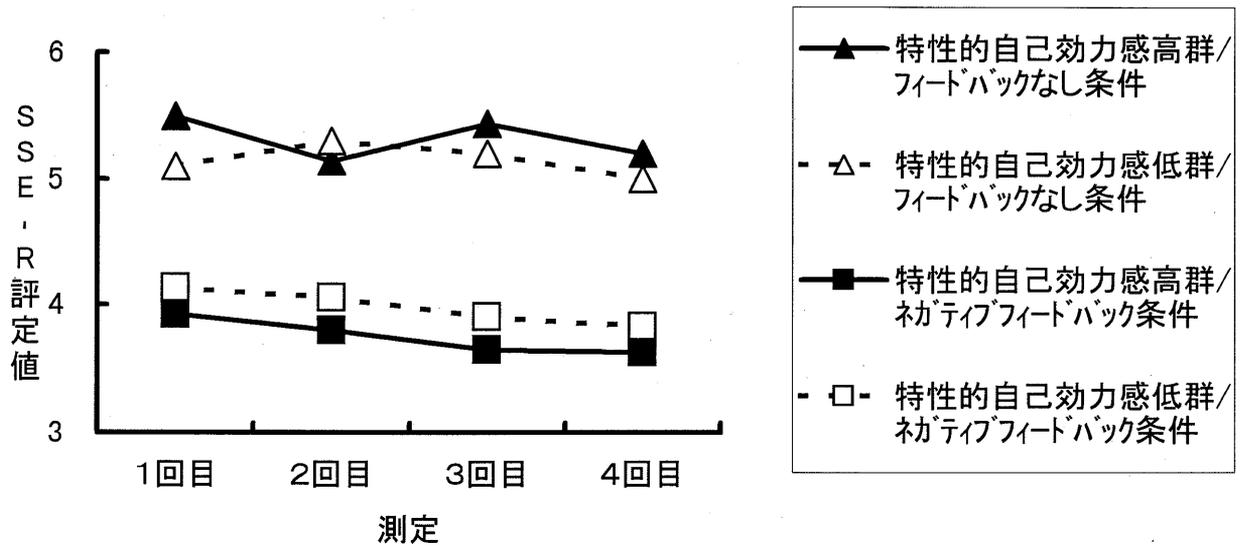


図 2.2.4 SSE-Rの変化 (研究2)
 (プレSSE-Rによる調整済み値. なお,
 プレSSE-Rの平均値は4.8である.)

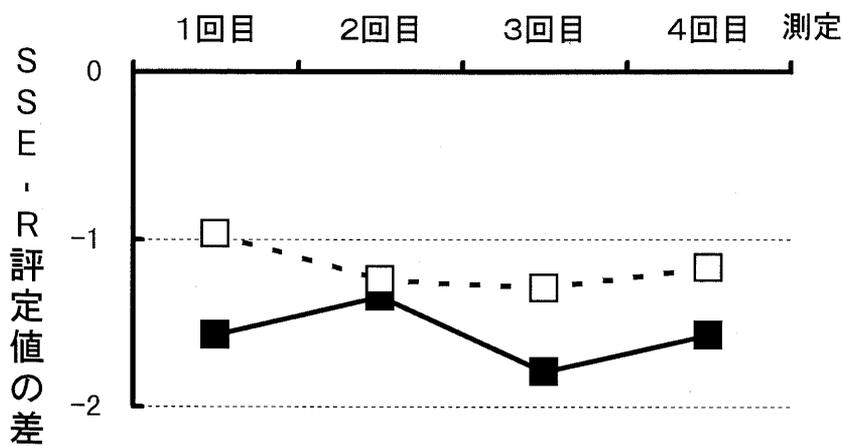


図 2.2.5 フィードバックなし条件との
 差の変化(SSE-R)

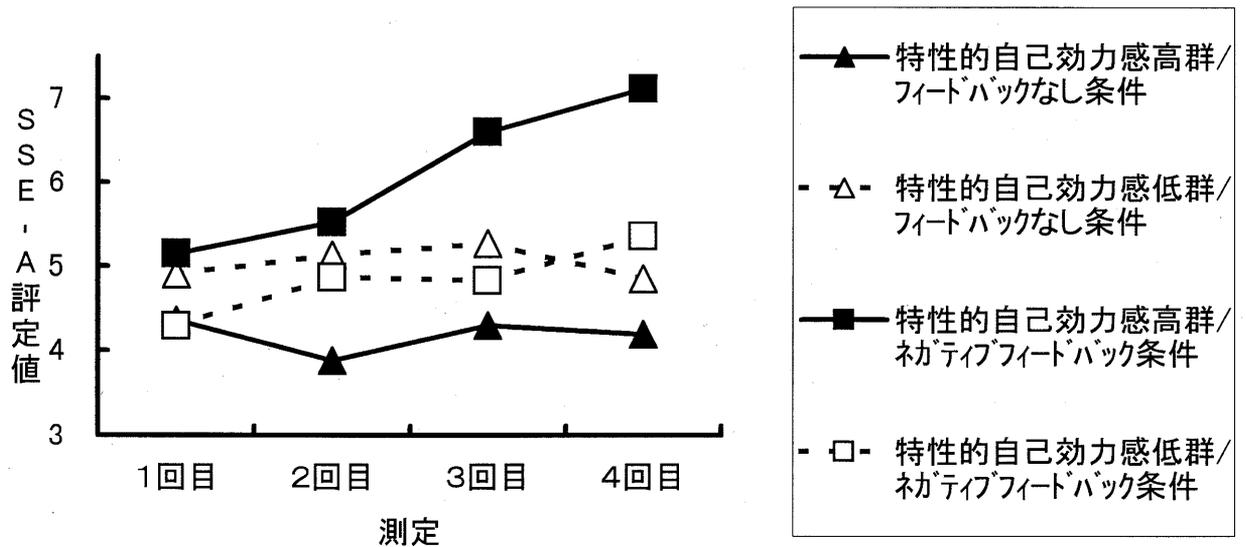


図 2.2.6 SSE-Aの変化 (研究2)
 (プレSSE-Aによる調整済み値. なお,
 プレSSE-Aの平均値は3.8である.)

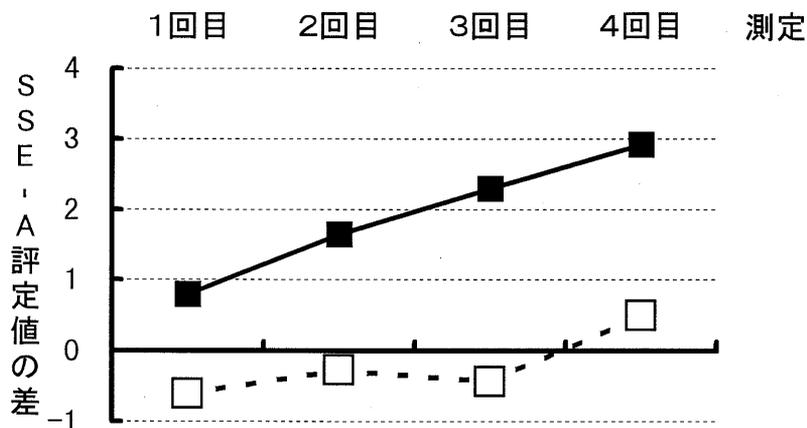


図 2.2.7 フィードバックなし条件との
 差の変化(SSE-A)

ック条件の主効果のみが有意であった (SSE-T: $F(1, 35) = 18.42, p < .001$; SSE-R: $F(1, 35) = 36.79, p < .001$). すなわち、まず、SSEの変容を解釈する際のベースラインとなる、フィードバックなし条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向については、両群とも測定回による変容はほとんどなく、群間差もみられなかった。次に、ネガティブフィードバック条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向をみると、特性的自己効力感の高さにかかわらずフィードバックなし条件よりも低かった (上記の結果をより視覚的に明らかにするため、特性的自己効力感群別に、ネガティブフィードバック条件とフィードバックなし条件との間の差を算出したものを、図2.2.3と図2.2.5に示す)。研究1の結果と比較すると、測定ごとにBF条件間の差が広まっていくことを示す、フィードバック条件×測定回の交互作用がみられない点が異なっている。すなわち、研究2では1回目の測定から一貫してネガティブフィードバック条件のほうが値が低くなっている。しかし、いずれにしてもフィードバック条件の効果は、研究1の結果と大差ない。

SSE-Aについての共分散分析の結果、フィードバックの主効果 ($F(1, 35) = 4.15, p < .05$)、測定回的主効果 ($F(3, 105) = 7.97, p < .001$)、特性的自己効力感群×フィードバック条件の交互作用 ($F(1, 35) = 6.58, p < .05$)、フィードバック条件×測定回の交互作用 ($F(3, 105) = 7.96, p < .001$) が有意であった。

特性的自己効力感群×フィードバック条件の交互作用についての下位検定の結果、特性的自己効力感高群においてフィードバック条件の主効果が有意であった ($F(1, 36) = 11.05, p < .01$)。すなわち、まず、SSEの変容を解釈する際のベースラインとなる、フィー

ドバックなし条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向について述べると、両群とも測定回による変容はほとんどなく、群間差もみられなかった。次に、ネガティブフィードバック条件における特性的自己効力感の高群と低群の変容傾向をみると、特性的自己効力感の主効果が有意であり ($F(1, 36) = 4.79, p < .05$)、高群は低群よりも有意に高かった (特性的自己効力感群別の、ネガティブフィードバック条件とフィードバックなし条件との差をとったものを、図2.2.7に示す)。また、特性的自己効力感群別にフィードバック条件×測定の単純交互作用を検定したところ、ネガティブフィードバック条件は、フィードバックなし条件よりも有意に高かった ($F(1, 36) = 4.79, p < .05$)。これらの結果は研究1と同様である。研究1でネガティブフィードバック条件においてみられた特性的自己効力感高群と低群の間の変容傾向の違い (特性的自己効力感高群では上昇傾向がみられ、低群では低いままほとんど変化しない) は有意ではなかったが、ネガティブフィードバック条件において特性的自己効力感の高群は低群よりSSE-Aの値が高くなることは再度確認された。

(2)課題遂行量の変化

各群の課題遂行量の平均値と標準偏差を表2.2.3に示す。研究1と同様に、第2から第4試行の課題遂行量について、第1試行の課題遂行量を共変量とする、特性的自己効力感群 (2) × フィードバック条件 (2) × 試行回 (3) の3要因共分散分析を行なった。第2から第4試行の課題遂行量について、共変量による調整済み平均値の変化を図示すると、図2.2.8のようになる。また、特性的自

表 2.2.3 条件群別, 測定回別にみた 課題遂行量 の平均値(()内は標準偏差, 各群10名)(研究2)

	特性的自己効力感 高群		特性的自己効力感 低群		
	フィードバック なし	ネガティブ フィードバック	フィードバック なし	ネガティブ フィードバック	
課題遂行量	第1試行	20.9 (4.6)	19.4 (2.6)	23.1 (4.5)	19.7 (3.4)
	第2試行	23.1 (2.7)	21.3 (2.9)	24.1 (4.3)	19.1 (2.6)
	第3試行	25.7 (5.9)	26.6 (3.7)	25.9 (2.9)	22.2 (4.7)
	第4試行	26.0 (5.0)	26.7 (3.8)	26.5 (3.8)	23.5 (3.3)
第2～第4試行の平均		24.9	24.9	25.5	21.6

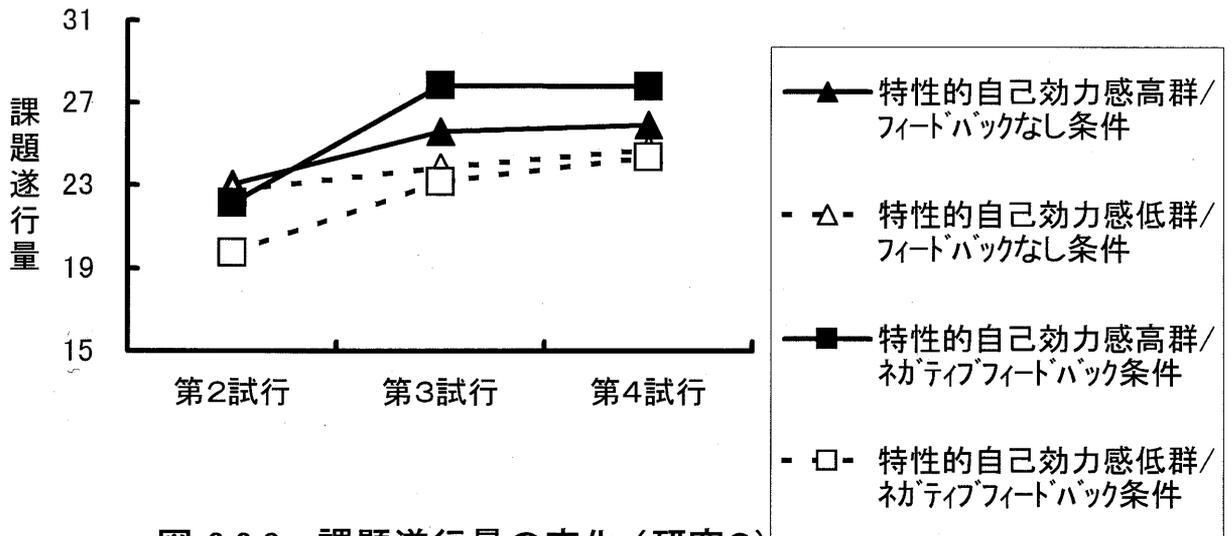


図 2.2.8 課題遂行量の変化 (研究2)
 (第1試行の課題遂行量による調整済み値。
 なお、第1試行の平均値は20.8である)

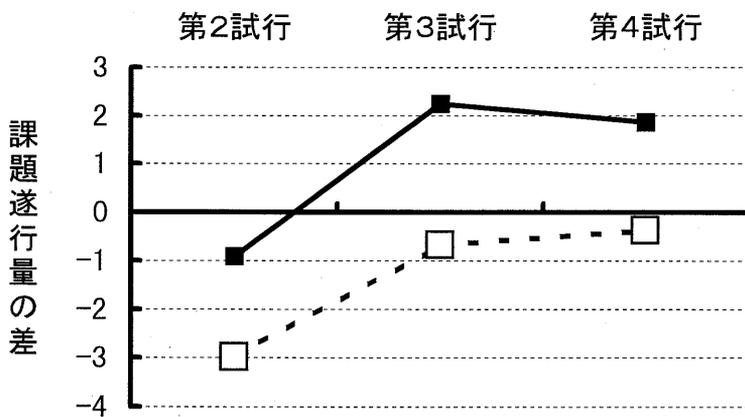


図 2.2.9 フィードバックなし条件との
 差の変化(課題遂行量)

己効力感群別に，ネガティブフィードバック条件とフィードバックなし条件の差をとると，図2.2.9のようになる．分析の結果，特性的自己効力感群の主効果 ($F(1, 35) = 10.92, p < .01$)，試行回の主効果 ($F(2, 70) = 40.24, p < .001$)，フィードバック条件×試行回の交互作用 ($F(2, 70) = 5.48, p < .01$) が有意であった．すなわち，特性的自己効力感高群の方が低群よりも課題遂行量が多い．また，フィードバック条件×試行の交互作用の下位検定の結果，試行回の主効果は両フィードバック条件において有意であり（ネガティブフィードバック条件: $F(2, 72) = 39.51, p < .001$; フィードバックなし条件: $F(2, 72) = 8.02, p < .001$)，両群とも研究1と同様に，試行を重ねるにつれて課題遂行量は上昇していた．フィードバック条件の主効果は第2試行で有意で ($F(1, 108) = 5.17, p < .05$)，ネガティブフィードバック条件の遂行量はフィードバックなし条件よりも少なかった．このフィードバック条件の主効果は，SSE-T, SSE-Rの変容傾向と対応しており，第2試行の課題遂行量にSSE-TやSSE-Rの影響が及んでいることを示しているといえよう．

さらに，有意水準には達していなかったが，特性的自己効力感群×フィードバック条件の交互作用傾向 ($F(1, 35) = 2.96, p < .10$) がみられたので，これについても下位検定を行ったところ，ネガティブフィードバック条件で，高群（調整済み平均値は25.9 ($n = 10$))の方が低群（調整済み平均値は22.4 ($n = 10$))よりも課題遂行量が多くなる傾向がみられた．この差の傾向は，SSE-Aにおける群間差に対応している．すなわち，ネガティブフィードバック条件においては，特性的自己効力感高群の方が低群よりもSSE-Aが有意に高い（SSE-TとSSE-Rには有意な群間差はない）．このことは，SSE-A

の変容が課題遂行量に影響を及ぼしている可能性を示すものといえよう。

この点について明らかにするために、フィードバック情報を与えた後の SSE-A の変化量と課題遂行量の変化量との相関関係を検討した。すなわち、SSE-A の第 1 回測定から第 3 回測定の間の変化量と、第 2 試行から第 4 試行の間の課題遂行量の変化量とのピアソンの積率相関係数を、特性的自己効力感群×フィードバック条件の 4 つの条件群別に算出した（ともに、後の測定および試行の値から、先の測定および試行の値を引き、増加している場合は正の数、減少している場合は負の数となるように算出した。各条件群とも、 $n = 10$ ）。その結果、ネガティブフィードバック条件での特性的自己効力感高群は、図 2.2.10 のプロット図からわかるように、SSE-A の増加量が大きいほど課題遂行量の増加量も大きくなる傾向がみられた。両者間の相関係数値は、全体では有意ではなかったが ($r = .325$, $p > .10$, $n = 10$)、課題遂行量の増加が大きいにもかかわらず SSE-A に変化のみられなかった 1 名のデータを除いて相関係数値を算出すると、高い正の相関が示された ($r = .732$, $p < .05$, $n = 9$)。これより、ネガティブフィードバック条件での特性的自己効力感高群の、SSE-A と課題遂行量との間の対応関係は明らかであり、SSE-A の変容が課題遂行量に影響を及ぼしている可能性を裏付ける結果が得られたといえよう。その他の 3 つの条件群においては、両者間にこのようなはっきりした対応関係はみられず、相関係数も有意ではなかった（特性的自己効力感高群・フィードバックなし条件: $r = .52$, ns , $n = 10$; 特性的自己効力感低群・フィードバックなし条件: $r = -.13$, ns , $n = 10$; 特性的自己効力感低群・ネガティブフィードバック

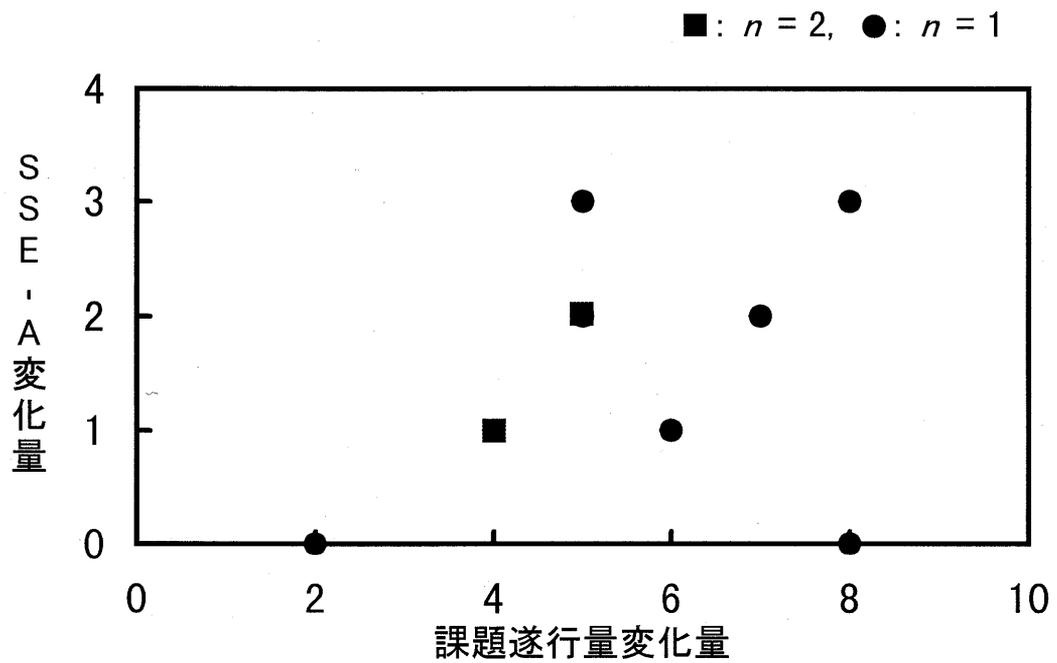


図 2.2.10 特性的自己効力感高群のネガティブフィードバック条件下での, SSE-A変化量と課題遂行量変化量とのプロット ($n=10$. SSE-Aの変化量は, 第1測定から第3測定の間, 課題遂行量の変化量は, 第2試行から第4試行の間の変化量である.)

ク条件: $r = -.17, ns, n = 10$).

(3)感情評定値の変化

各群の感情評定値の平均値と標準偏差を表2.2.4に示す. これらの達成行動に関わりの深い感情が, SSE変容や課題遂行量の変容にどのように関連するかを検討するため, 以下の分析を行った. まず, 各感情評定項目のプレ評定値について, 特性的自己効力感尺度得点との間のピアソンの積率相関係数を算出した ($N = 50$). その結果, 特性的自己効力感尺度得点と満足感の間に有意な相関係数がみられ ($r = .42, p < .01$), 特性的自己効力感の高い者の方が満足感が高くなる傾向があった. また, 特性的自己効力感群間での各項目のプレ評定値の平均値の差の検定では, 特性的自己効力感高群 ($M = 4.6, SD = 1.0, n = 20$) の方が低群 ($M = 3.0, SD = 0.9, n = 20$) よりも満足感が高かった ($t = 5.14, df = 38, p < .001$). 楽しさ, やる気については, それらと特性的自己効力感尺度得点との間には, 有意な関連は見出されなかった.

次にSSEの変容に伴う感情の変容について検討するため, 各項目のポスト評定値について, プレ評定値を共変量とする, 特性的自己効力感群 (2) × フィードバック条件 (2) の2要因共分散分析を行った. その結果, 満足感においてフィードバック条件の主効果が有意であり ($F(1, 35) = 4.12, p = .05$), ポスト評定値において, ネガティブフィードバック条件の方がフィードバックなし群より満足感が低く, 満足感の低下がフィードバックなし群より大きいことが示された (満足感のポスト評定値について, 共変量による調整済み値を, 図2.2.11に示す). ネガティブフィードバック条件とフィー

表 2.2.4 条件群別, 測定回別にみた感情評定値の平均値(()内は標準偏差, 各群10名)(研究2)

		特性的自己効力感 高群				特性的自己効力感 低群			
		フィードバックなし		ネガティブフィードバック		フィードバックなし		ネガティブフィードバック	
楽しさ	プレ評定値	4.5	(1.2)	5.4	(1.1)	4.3	(0.7)	4.5	(1.1)
	ポスト評定値	4.8	(0.9)	4.1	(1.9)	4.4	(0.5)	4.1	(0.7)
満足感	プレ評定値	4.4	(1.1)	4.8	(1.0)	3.1	(1.0)	2.9	(0.9)
	ポスト評定値	3.7	(1.1)	3.2	(1.4)	3.5	(1.0)	2.7	(1.3)
やる気	プレ評定値	5.1	(1.2)	5.5	(1.5)	4.6	(0.7)	5.1	(0.7)
	ポスト評定値	5.1	(1.5)	5.1	(1.5)	4.6	(0.7)	4.5	(0.9)

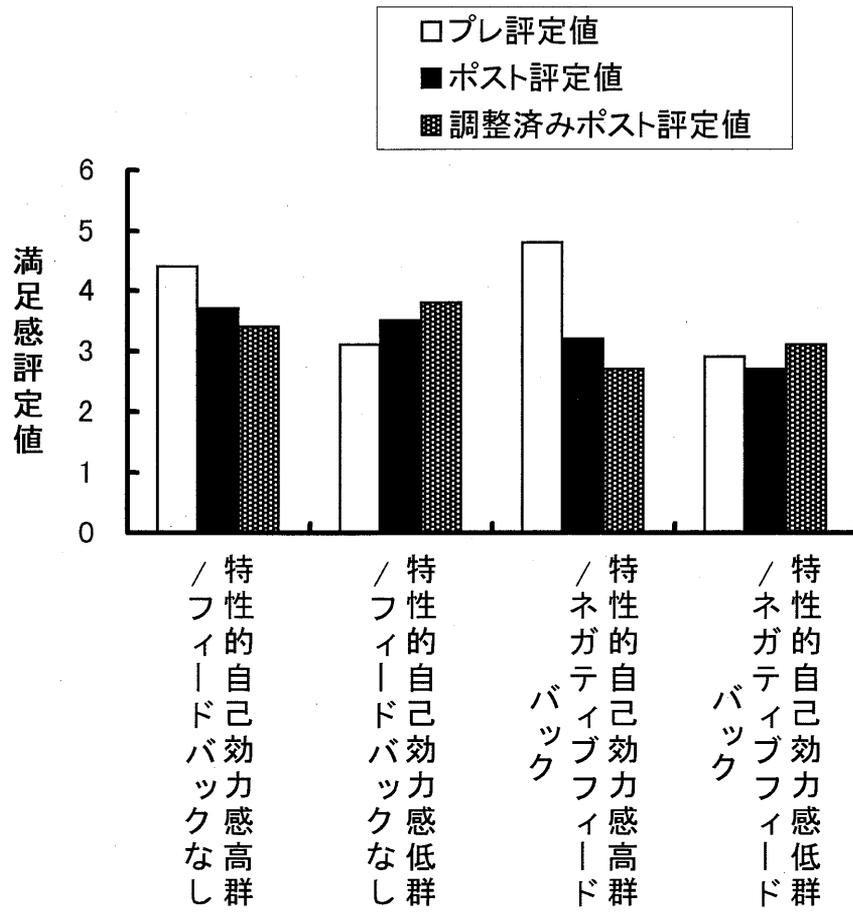


図 2.2.11 満足感評定値の変化 (研究2)

ドバックなし群の共変量による調整済み平均値はそれぞれ、2.9, 3.6であった。特性的自己効力感の主効果、および交互作用は有意でなかった。また、楽しさ、やる気については有意な効果はなかった。

4. 考察

SSE-T, SSE-R, SSE-Aに関しては、研究1とほぼ同様の結果が得られ、ネガティブフィードバック条件下でSSE-Aに特性的自己効力感の群間差が現われることが確認された。

また、課題遂行量に関しては、ネガティブフィードバック条件で、高群の方が低群よりも課題遂行量が多くなる傾向がみられた。この差の傾向は、SSE-Aにおける群間差に対応している。すなわち、ネガティブフィードバック条件において、特性的自己効力感高群の方が低群よりもSSE-Aが有意に高い（SSE-TとSSE-Rには有意な群間差はない）。このことは、SSE-Aの変容が課題遂行量に影響を及ぼしている可能性を示すものといえよう。この点は、SSE-Aの変化量と課題遂行量の変化量との間の相関関係からも裏付けられた。さらに、SSE-T, SSE-R, SSE-Aの3つのSSEの測度の変容傾向と課題遂行量の変容傾向との対応から、SSE-TとSSE-Rについては、第2試行、つまり、第1回目のフィードバックの操作の後に、一時的な課題遂行量への影響が推測されるのに対し、SSE-Aについては、試行を通じて、課題遂行量に影響を与えていたと考えられる。

そして、このような課題遂行量の変容には、満足感の低さ（低下）がSSEを媒介して影響していることが推測される。すなわち、SSE-Aの高い特性的自己効力感高群では、ネガティブフィードバック条件での満足感の低下が動機づけとなって、努力量を通じて課題

遂行量を増加させたのに対し，特性的自己効力感低群は，満足感は低いもののSSE-Aも低いために満足感の低さが動機づけ要因となりにくく，課題遂行量の増加も少なかったと考えられる．すなわち，Bandura（1982 / 1985）が述べているように，不満感が動機づけとなるか否かの規定因の1つに自己効力感があり，自己効力感が高ければある程度不満感は，動機づけとして機能するようである．

第3節 特性的自己効力感とネガティブな結果に対する原因帰属の関連の検討（研究3）

1. 目的

研究1，研究2により，課題の遂行成績のフィードバックとしてネガティブな社会的比較情報を与えられた場合のSSE-Aの変容傾向には，特性的自己効力感の高・低による違いがみられること，および，特性的自己効力感高群は低群よりも高いSSE-Aを示すことが明らかとなった．つまり，特性的自己効力感はSSEの変容を規定する1つの要因であり，特性的自己効力感高群は低群よりもネガティブな社会的比較情報によるダメージを受けにくいといえる．

ところで，課題の遂行成績のフィードバック情報（遂行結果についての情報）がSSEの変容に及ぼす影響は，遂行結果がどのように原因帰属されるかによってある程度規定されることが知られている（Bandura, 1986; Silver et al., 1995）．たとえば，研究1や研究2の実験状況のように，課題の遂行成績についてネガティブなフィードバック情報を与えられた場合にも，その結果を自分の力で統制で

きる要因（内的かつ統制可能な要因）に帰属した場合は、自分次第でその結果を変容させることができると認知されるため、SSEにはネガティブなフィードバック情報の悪影響は生じにくい。逆に、自分の力では統制できない要因に帰属した場合は、SSEにネガティブなフィードバックの悪影響が現われやすい (Silver et al., 1995)。

自分の力で結果を変容させることができると認知していること、すなわち、内的で統制可能な要因への原因の帰属が、その後の達成期待と強く関係する (Forsyth & McMillan, 1981) など、原因帰属の統制可能性次元が将来の達成期待に強い影響を及ぼすことを示す知見が得られている。これより、研究1、研究2において、特性的自己効力感高群は、低群と比較して、内的で統制可能な要因により強く帰属していたのではないかと推測される。

特性的自己効力感と原因帰属との関連について示唆を与える研究として、locus of control (Rotter, 1966) の内的統制型 (internal locus of control) と外的統制型 (external locus of control) とを測定する尺度である、Internal-Externalスケールと特性的自己効力感尺度との相関を検討した、藤田・笹川 (1991) やSherer et al. (1982) が挙げられる。彼らの研究では両者の間に有意な相関がみられ、特性的自己効力感が高い者ほど内的統制型であることが示されている。内的統制型の者は外的統制型の者に比べ、行動によって引き起こされた結果を自分自身に随伴しているにとらえ、周囲の環境に対して統制可能感をいだいているという (藤田・笹川, 1991)。これより、研究1、研究2のネガティブフィードバック条件下でも、特性的自己効力感高群は、低群よりも内的で統制可能な原因へ帰属していたと想定される。

ところで、ネガティブなフィードバックの影響を受けにくい原因帰属のパターンとして、上記以外にも、ネガティブな結果を自己の外部あるいは外的かつ不安定なものに帰属するパターンが考えられる。これは、上述した、内的で統制可能な要因への原因帰属が努力量の増加へと繋がりやすい、いわば適応的なものであるのに比べ、ネガティブな結果を自己に帰属しないことによって次回に対する期待の水準が下がるのを食い止める自己保護的 (self-protecting) な帰属パターンである。この自己保護的な帰属パターンは、当該課題に対するSSEの高い者がネガティブなフィードバックを受けた場合に顕著にみられるという (Silver et al., 1995)。しかし、特性的自己効力感と原因帰属との関連を検討したWatt & Martin (1994) では、特性的自己効力感の高・低に関わらず、自分に都合のよいバイアス (self-serving bias; 成功を自己に帰属する自己高揚バイアスと、失敗に対する自己の責任を否定する自己保護バイアスからなる) が顕著になるとの結果を得た。すなわち、Watt & Martinの結果からすれば、特性的自己効力感の高さによる原因帰属の違いはみられないということになるが、この点について検討した研究は少なく、再度検討してみる余地があると思われる。

以上の知見をまとめると、ネガティブな社会的比較情報を含むフィードバックを与えられる状況下で、特性的自己効力感高群は、低群と比較して、内的で統制可能な要因への原因帰属が顕著な帰属パターン (適応的な原因帰属パターン) か、または、自己外の要因への原因帰属が顕著な帰属パターン (自己保護的な原因帰属パターン) のいずれかを強く示すと予想される。そして、このような帰属傾向の違いに伴い、ネガティブな出来事への対処行動も異なると考えら

れる。すなわち、特性的自己効力感高群がより適応的な帰属パターンを持っているのであれば、自己の統制可能性を強く認知しているため、低群よりも能動的で積極的な対処行動をとるであろう。一方、特性的自己効力感高群がより自己保護的な帰属パターンを持っているのであれば、特性的自己効力感高群と低群との間の対処行動の違いはさほど顕著にはならないと考えられる。そこで、積極的対処行動、消極的対処行動の2カテゴリーの対処行動を取り上げ、これらにおける特性的自己効力感群間差も検討する。

研究3では、研究1、研究2でみられた、特性的自己効力感群間のSSEの差が生じるメカニズムを検討するため、社会的比較情報を含むネガティブな出来事に対する原因帰属と対処行動における特性的自己効力感の群間差を、上記のような観点から検討する。

なお、調査方法については、実際に経験したネガティブな出来事を回想してもらう方法や、場面想定法により架空の出来事を想定して答えてもらう方法が考えられるが、実際に経験したネガティブな出来事を回想してもらう方法は、出来事に対する認知が後付け的に解釈し直される可能性があるため、認知傾向における群間差を検討するには不向きであろうと考えられる。そこで、そのような影響を除いて検討するため、場面想定法を用いた。

2. 方法

調査参加者 研究1、研究2と同じ大学の教職科目の受講学生約270名（2クラス）を対象に調査を実施し、238名（男性87名、女性151名）の有効データを得た。この中には、研究1、研究2に参加した者は含まれていない。

手続き 無記名式の質問紙による調査を集団で実施した。質問紙の構成は以下に示す。

質問紙の構成 質問紙は、ネガティブな場면을説明する文章とその場面についての評定項目とのセットが2つと、特性的自己効力感尺度項目（成田他，1995）から構成されていた。

ネガティブな場面として、大学生が日常生活で遭遇しやすい出来事であると考えられる、「講義の単位を落としてしまう場面（試験場面）」と「重要なレポートに低い評価をつけられてしまう場面（レポート場面）」の2つの場面を用いた（表2.3.1の上部に示す）。2つの場面を用いたのは、結果の一般性、安定性を増すためである。両場面とも文章中には、参加者が劣位であることを示す社会的比較情報が含まれていた。

質問紙には、ネガティブ場面の提示順序が異なる2タイプがあり（タイプ1：試験場面→レポート場面；タイプ2：レポート場面→試験場面）、調査参加者に約半数ずつ使用した。タイプ1、タイプ2の質問紙を巻末に資料Fとして添付している。

各ネガティブ場面は、次のような構成になっていた。すなわち，“場면을説明する文章をそれぞれの場面に自分自身が直面していることを想定しながら読み、後の質問に答えるように”という内容の教示文と、場면을説明する文章、そして、4種の評定項目（原因帰属の評定項目、対処行動の評定項目、SSEの評定項目、場面の重要性の評定項目）であった。

2つのネガティブ場面についての評定の後、質問紙の最後の部分に、特性的自己効力感尺度の評定項目を配置した。

次に4種の評定項目の各々についてその内容を説明する。

表 2.3.1 場面を説明する文章, および原因帰属と対処行動の評定項目 (研究3)

試験場面	レポート場面
<p>《場面を説明する文章》 「期末試験ができていれば単位は取れる」と聞いていた講義の期末試験を受けたが、単位を落としてしまった。周囲の人たちに聞いてみたところ、ほとんどの人が単位を取れており、単位が取れなかったのは少人数のようであった。</p>	<p>《場面を説明する文章》 必修の授業の成績に影響する重要なレポートが返却された。自分のレポートの評価は低く“C”であった。まわりの友達は、ほとんど“A”であり、彼らの評価と比べてみても、自分のレポートの評価は、かなり低かった。</p>
<p>《原因帰属の評定項目》^a</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 努力が足りなかった。(内的・統制可能) ・ 試験勉強のし方が悪かった。(内的・統制可能) ・ 能力が足りなかった。(内的・統制不可能) ・ 自分にとっては、期末試験の問題が難しかった。(外的) ・ たまたま運が悪かった。(外的) ・ 担当教官が悪かった。(外的) 	<p>《原因帰属の評定項目》^a</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 努力が足りなかった。(内的・統制可能) ・ レポートへの取り組み方が悪かった。(内的・統制可能) ・ 能力が足りなかった。(内的・統制不可能) ・ 自分にとっては、レポートの課題が難しかった。(外的) ・ たまたま運が悪かった。(外的) ・ 担当教官が悪かった。(外的)
<p>《対処行動の評定項目》^b</p> <p><積極的対処行動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これからは、講義の単位を取るために、今までよりもっと努力する。 ・ 他の講義についても、単位を落とさないためにはどう取り組めばよいか、対策をよく考える。 ・ 単位を落とした理由をはっきりさせようとする。 <p><消極的対処行動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なにか、気晴らしになることをする。 ・ 単位を取るのが難しそうな講義は、なるべく選択しないようにする。 ・ 嫌なことなのであまり深く考えないようにする。 	<p>《対処行動の評定項目》^b</p> <p><積極的対処行動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 次回のレポートが課されたら、レポートをしあげるのに、今回よりもっと努力することにする。 ・ 次回のレポートにはどう取り組んだらいいか、対策をよく考える。 ・ 評価が低かった理由をはっきりさせようとする。 <p><消極的対処行動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なにか、気晴らしになることをする。 ・ 今後、このようなレポートが課される講義はなるべく選択しないようにする。 ・ 嫌なことなのであまり深く考えないようにする。

^a 実際の質問紙には () 内は記入していない。

^b 評定項目の順番は内容が偏らないように変えてある。

原因帰属の評定項目 中学生を対象に場面想定法を用いて試験の失敗に対する原因帰属を測定している、Hayamizu (1997) で使用された7項目のうち、大学生では考えにくい1項目（「parent's poor educational guidance」）を除き、残り6項目を本研究で使用した場面に適合するよう書き換え、表2.3.1に示す6つの項目を作成した。

「努力が足りなかった」、「試験勉強の仕方（レポートへの取り組み方）が悪かった」、「能力が足りなかった」が内的な帰属因について問う項目である。内的な帰属因のうち、前者2つが統制可能な帰属因について問う項目であり、最後の1つが統制不可能な帰属因について問う項目である。残りの3つの「自分にとってはレポートの課題が難しかった」、「たまたま運が悪かった」、「担当教官が悪かった」は外的な帰属因について問う項目である。これら6つの項目について、各場面の出来事にそれらがどの程度影響していると思うかを、「非常に影響している(5)」から「全く影響していない(1)」までの5段階で評定を求めた。

対処行動の評定項目 対処行動の評定項目も、Hayamizu (1997) を参考に作成した。Hayamizuは、9つの対処行動についてどの程度それらを行なうかを評定させ、評定値を因子分析して「active coping behaviors」、「passive coping behaviors」、「maladaptive coping behaviors」の3因子を抽出している。本研究では、そのうちの「active coping behaviors」と「passive coping behaviors」を対処行動カテゴリとして採用し、両因子に負荷の高い項目を参考に、本研究で使用した場面、および、調査対象とする大学生に適合するように、表2.3.1の最下欄に示す、積極的対処行動に関する3項目と消極的対処行動に関する3項目を作成した。これら6つの項目に

ついて、どの程度そう思うか、を、「非常にそう思う(5)」から「全くそう思う(1)」までの5段階で評定を求めた。

SSEの評定項目 各場面について、SSEを測定するために、次の項目を用意した。「今後は、期末試験で単位を落とさないようにすることができると思えますか」(試験場面)、「次回また、同じようなレポートが課されたら、あなたはうまくやれると思えますか」(レポート場面)である。次回またそのような出来事に遭遇した際のSSEを、「非常にそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」までの5段階で評定させた。

場面の重要性の評定項目 各場面のような状況について、「どの程度深刻であると思えますか」との項目に、「非常にそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」までの5段階で評定を求めた。

特性的自己効力感尺度 研究1、研究2と同様に、成田他(1995)の特性的自己効力感尺度(23項目)を使用し、特性的自己効力感尺度得点を求めた。

3. 結果

(1)分析対象者の選定

原因帰属や対処行動の選定には、場面の重要性の認知の程度が影響すると考えられるので、ある程度、各場面を重要であると認知している者のみを分析対象者とすることにした。そこで、場面について重要性の評定値が3以上であった調査参加者を選抜した。試験場面は166名(男性59名、女性107名)、レポート場面は166名(男性61名、女性105名)であった。このうち、両場面ともに分析対象と

なったのは、145名（男性51名，女性94名）であった（試験場面の分析対象者の87%，レポート場面の分析対象者の87%が，両場面で重複している）。

なお，以下の分析では，原因帰属評定項目，対処行動評定項目，SSE評定項目，重要性評定項目の各評定値，および，特性的自己効力感尺度得点を便宜的に間隔尺度上の得点とみなして処理した。

評定値の平均値や評定値間の相関には，以下に述べるような性差があり（性別の各尺度項目得点の平均値と標準偏差は表2.3.2に示す），また，評価的な（ポジティブ，あるいはネガティブな）結果に対する原因帰属には，性差が存在することを示す先行研究（Beyer, 1998-1999）もあることから，分析は男女別に行なった。

(2) 特性的自己効力感によるSSEの違い

場面ごとに分析対象者の特性的自己効力感の平均値を境いに特性的自己効力感高群と低群に分けた。各群の特性的自己効力感の尺度得点の平均値と標準偏差，および群間差の検定結果を，表2.3.3および表2.3.4の最上欄に示す。男女とも，両場面において，特性的自己効力感の尺度得点の群間差は有意である。

まず，特性的自己効力感の高・低によりSSEに差がみられるという，研究1，研究2と同様の結果が得られているかどうかを確認する。特性的自己効力感高群，低群別にSSEの平均値を算出し，平均値の差の検定（ t 検定）を行なった。結果は，表2.3.3と表2.3.4に示す。両場面において男女とも，特性的自己効力感高群のSSEの評定値は低群よりも高く，その差は，試験場面の男性のデータを除き，有意であった。また，場面別に特性的自己効力感とSSEとのピアソ

表 2.3.2 性別の各場面における原因帰属, 対処行動, SSEの評定値の平均値 (研究3)
 (() 内は標準偏差)

	試験場面			レポート場面		
	男性 n=59	女性 n=107	性差 (t 値)	男性 n=61	女性 n=105	性差 (t 値)
SSE	3.4 (1.1)	3.3 (0.9)	0.90	3.6 (1.0)	3.2 (1.0)	2.51*
原因帰属						
努力	3.9 (1.1)	3.9 (1.0)	0.21	4.1 (1.0)	3.8 (1.0)	2.03*
取り組み方	3.6 (1.0)	3.7 (0.9)	0.41	3.8 (0.9)	3.7 (1.0)	0.62
能力	2.9 (1.3)	3.2 (1.0)	1.52	3.1 (1.1)	3.3 (1.0)	1.40
課題	3.0 (1.0)	3.1 (1.0)	0.36	2.7 (1.1)	3.0 (0.9)	1.77 ⁺
運	2.9 (1.1)	2.8 (1.0)	0.67	2.4 (1.1)	2.4 (1.0)	0.12
担当教官	2.9 (1.4)	2.4 (1.0)	2.35*	2.6 (1.2)	2.4 (1.0)	1.34
対処行動						
積極的対処行動	9.4 (2.6)	9.6 (2.3)	0.28	9.9 (2.7)	9.8 (2.7)	0.17
消極的対処行動	9.0 (2.8)	9.7 (2.2)	1.68 ⁺	7.7 (2.2)	8.4 (2.1)	2.06*

* $p < .05$, ⁺ $p < .10$

表 2.3.3 男性の特性的自己効力感群別の SSE, 原因帰属, 対処行動 の評定値の平均値(研究3)
 (() 内は標準偏差)

特性的自己効力感	試験場面			レポート場面		
	高群 n=28	低群 n=31	群間差 (t 値)	高群 n=30	低群 n=31	群間差 (t 値)
	84.4 (8.1)	65.5 (6.6)	9.94***	85.1 (7.5)	65.3 (6.7)	10.90***
SSE	3.5 (1.2)	3.3 (1.1)	0.73	4.0 (1.0)	3.2 (0.9)	3.59***
原因帰属						
努力	4.1 (1.0)	3.7 (1.1)	1.34	4.3 (0.9)	3.8 (1.0)	2.08*
取り組み方	3.7 (1.0)	3.6 (1.0)	0.25	4.0 (1.0)	3.6 (0.9)	1.76 ⁺
能力	3.2 (1.4)	2.6 (1.0)	1.90 ⁺	3.3 (1.1)	2.9 (1.1)	1.28
課題	2.9 (1.0)	3.1 (1.1)	0.74	2.5 (1.0)	3.0 (1.0)	1.90 ⁺
運	2.7 (1.1)	3.1 (1.2)	1.54	2.1 (1.1)	2.6 (1.2)	1.79 ⁺
担当教官	2.3 (1.3)	3.4 (1.3)	3.40**	2.3 (1.1)	2.9 (1.2)	1.99 ⁺
対処行動						
積極的対処行動	10.8 (2.5)	8.2 (1.9)	4.38***	11.6 (2.2)	9.1 (2.3)	4.29***
消極的対処行動	7.9 (3.1)	9.9 (2.2)	2.83**	6.7 (2.5)	8.2 (2.0)	2.68**

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

表 2.3.4 女性の 特性的自己効力感群別の SSE, 原因帰属, 対処行動 の評定値の平均値(研究3)
 (() 内は標準偏差)

	試験場面			レポート場面		
	高群 n=53	低群 n=54	群間差 (t 値)	高群 n=53	低群 n=54	群間差 (t 値)
特性的自己効力感	81.7 (7.0)	62.9 (8.2)	12.97***	82.9 (6.6)	64.4 (8.6)	12.36***
SSE	3.5 (1.0)	3.1 (0.8)	2.42*	3.4 (0.9)	3.0 (1.0)	2.52*
原因帰属						
努力	3.7 (1.0)	4.1 (0.9)	1.72 ⁺	3.5 (1.0)	4.0 (0.9)	2.33*
取り組み方	3.6 (1.0)	3.8 (0.9)	0.89	3.6 (1.0)	3.8 (1.0)	1.01
能力	3.0 (1.0)	3.4 (1.0)	1.94 ⁺	3.1 (1.0)	3.5 (0.9)	2.32*
課題	3.1 (0.9)	3.1 (1.1)	0.39	2.8 (0.9)	3.2 (1.0)	2.36*
運	2.9 (1.0)	2.7 (1.1)	0.73	2.5 (1.0)	2.3 (1.1)	0.80
担当教官	2.5 (1.1)	2.3 (0.9)	1.41	2.4 (1.2)	2.4 (0.9)	0.16
対処行動						
積極的対処行動	10.0 (2.3)	9.1 (2.3)	2.09*	10.4 (2.6)	9.8 (2.6)	1.18
消極的対処行動	9.3 (2.0)	10.0 (2.3)	1.60	8.0 (1.9)	8.3 (1.9)	0.71

*** $p < .001$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

ンの積率相関係数を求めると、試験場面では、男性で $r = .16$ (ns), 女性で $r = .40$ ($p < .001$), レポート場面では、男性で $r = .38$ ($p < .01$), 女性で $r = .46$ ($p < .001$)であった。これより、特性的自己効力感が高い者ほど、ネガティブなフィードバック情報を受けた後でも次回に対するSSEは高いことが、本研究でも確認された。ただし、男性の試験場面においては、高群・低群間の平均値の差も、特性的自己効力感とSSEとの間の相関係数も有意なほどではなかった。本研究では、SSEにおいて特性的自己効力感の群間差がみられることが前提条件であるので、群間差の有意なものとはそうでないものは別に分析する必要がある。そこで以下の分析は場面別に行なうこととする。

(3) 特性的自己効力感による原因帰属と対処行動の違い

表2.3.3, 表2.3.4には、SSEの他に、特性的自己効力感群別の原因帰属と対処行動の評定値の平均値と標準偏差、および平均値の差の検定 (t 検定) 結果を示している。なお、対処行動の評定値については、性別、場面別に因子分析 (初期解を主成分解とし、バリマックス回転を使用) を行なった。その結果、固有値の値とその推移の仕方から2因子解が適当であると解釈され (各場面の2因子による累積寄与率は、56.9から59.4%), 「嫌なことなのであまり深く考えないようにする」項目が両因子に負荷する傾向はみられたものの、積極的対処行動に関する3項目 (積極的対処行動因子) と、消極的対処行動に関する3項目 (消極的対処行動因子) に分かれてまとまる傾向がみられた。そこで、各3項目の評定値の和を、それぞれ、積極的対処行動と消極的対処行動の評定値として使用した。

表2.3.3と表2.3.4, および, 図2.3.1から図2.3.4に, 男性の試験場面の結果(特性的自己効力感群別に, 評定値の平均値を表2.3.3に, それを試験場面の分析対象者全体の平均値と標準偏差により標準化した値を図2.3.1に示す), 男性のレポート場面の結果(同様に, 評定値の平均値を表2.3.3に, それを試験場面の分析対象者全体の平均値と標準偏差により標準化した値を図2.3.2に示す), 女性の試験場面の結果(各群の評定値の平均値を表2.3.4に, それを試験場面の分析対象者全体の平均値と標準偏差により標準化した値を図2.3.3に示す), 女性のレポート場面の結果(各群の評定値の平均値を表2.3.4に, それを試験場面の分析対象者全体の平均値と標準偏差により標準化した値を図2.3.4に示す)を示す. 検定の結果から, 特性的自己効力感の高さによる原因帰属と対処行動の違いに関して, 以下のことが示された.

男性の試験場面 全体的に特性的自己効力感高群は内的な要因により強く帰属し, 低群は外的な要因により強く帰属する傾向がみられた. このうち, 群間差が有意であったのは, 「担当教官」であり, 特性的自己効力感低群の方が「担当教官」へ強く帰属していた. また, 「能力」には特性的自己効力感高群の方が強く帰属する傾向がみられた. 一般に, ネガティブな結果を内的で統制不可能な要因である「能力」へ帰属することは次回に対するSSEを低めると予想されるが, この場合, 能力における群間差は, 特性的自己効力感低群の自己保護的な帰属傾向(ネガティブな結果を, 自己内の要因には帰属しようとする傾向)のために生じたものと考えられる. すなわち, 特性的自己効力感低群が, 「担当教官」への帰属が極端に高く, 「能力」への帰属が極端に低い, 自

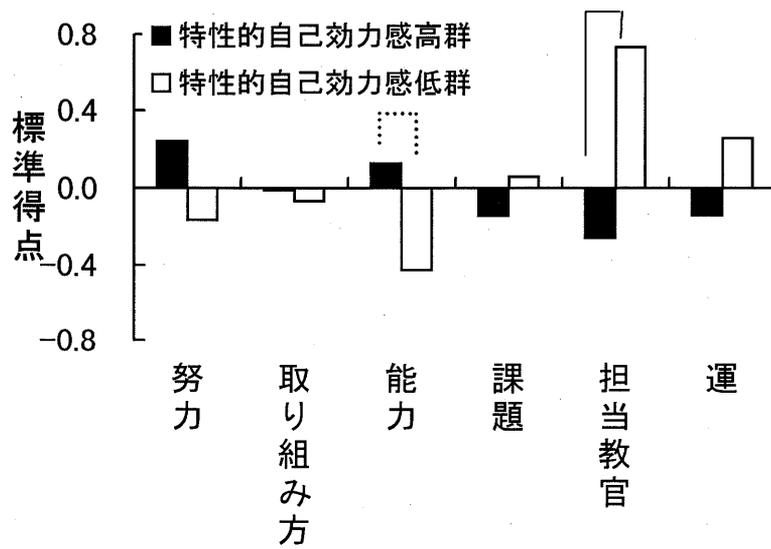


図 2.3.1 標準得点化した原因帰属評定値
 (男性, 試験場面) (研究3)
 (実線: $p < .05$, 破線: $p < .10$)

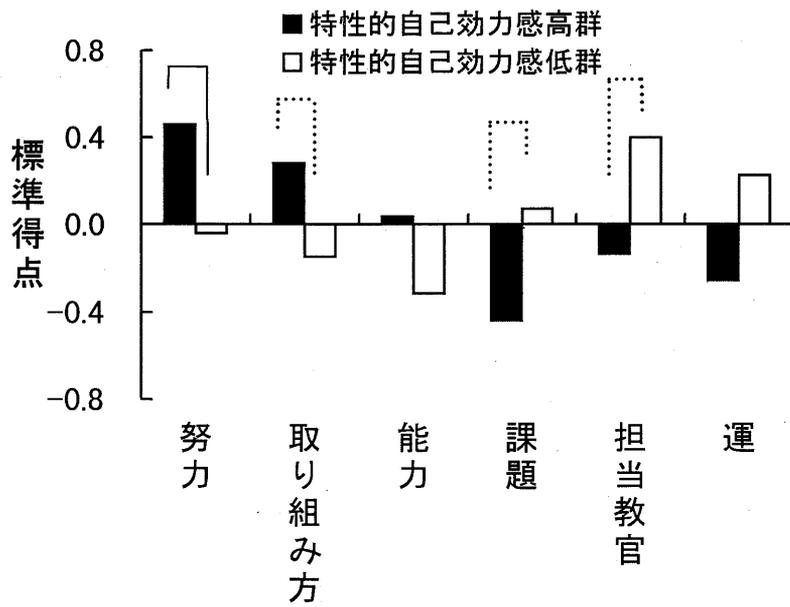


図 2.3.2 標準得点化した原因帰属評定値
 (男性, レポート場面) (研究3)
 (実線: $p < .05$, 破線: $p < .10$)

己保護的な帰属バイアス傾向を強く持っていた、と解釈するのが妥当であろう。

また、特性的自己効力感尺度得点と原因帰属の各項目間のピアソンの積率相関係数を算出したところ、特性的自己効力感と「担当教官」、「能力」との間に、それぞれ、 $r = -.49$ ($p < .001$), $r = .32$ ($p < .05$) の相関係数がみられた。SSE評定値との間には、有意な相関を示す原因帰属の項目はなかった。この場面では、特性的自己効力感の高・低によるSSEの差は有意ではなく、特性的自己効力感群間の帰属パターンの差もさほど明確に現われているとは言い難い。

対処行動の評定値には、積極的対処行動においては特性的自己効力感高群の評定値が有意に高く、消極的対処行動においては低群の評定値が有意に高いという明確な群間差がみられており、高群は積極的対処行動を、低群は消極的対処行動をとる傾向が強いことが示された。

男性のレポート場面 男性のレポート場面においても、特性的自己効力感高群の方が内的な要因に、特性的自己効力感低群の方が外的な要因により強く帰属する傾向がみられ、この傾向は試験場面よりも顕著であった。このうち群間差が有意であったのは、「努力」であり、特性的自己効力感高群の方が「努力」へより強く帰属していた。また、「取り組み方」には、高群の方が強く帰属する傾向がみられ、「課題」、「運」、「担当教官」には、低群の方が強く帰属する傾向がみられた。

特性的自己効力感尺度得点と原因帰属の各項目とのピアソンの積率相関係数は、「努力」との間の相関係数 ($r = .30$, $p < .05$) は有意で、「運」、「担当教官」との間の相関係数 (それぞれ、 $r = -.25$, p

< .10; $r = -.24, p < .10$) も有意となる傾向がみられた。一方, SSE 評定値と原因帰属の各項目との間の相関については, 「課題」との間の相関係数 ($r = -.34, p < .01$) が有意であった。

対処行動の評定値にも試験場面と同様の明確な特性的自己効力感群間差がみられ, 積極的対処行動においては特性的自己効力感高群の評定値が有意に高く, 消極的対処行動においては低群の評定値が有意に高い。この場面では, 予想通り, 特性的自己効力感高群は低群と比較して, 内的で統制可能な要因である「努力」や「取り組み」への帰属が強く, 積極的対処行動をとる傾向も強い, というパターンが示された。加えて, 消極的対処行動をとる傾向は低群よりも低いことも示された。

女性の試験場面 次に, 女性の試験場面においては, 「課題」への帰属を除き, 特性的自己効力感高群は外的な要因に, 低群は内的な要因に比較的強く帰属する傾向がみられた。群間差は有意なほどではなかったが, 「能力」と「努力」に低群の方がより強く帰属する傾向がみられた。

また, 特性的自己効力感尺度得点と原因帰属の各項目との相関を見ると, 「運」との間のピアソンの積率相関係数 ($r = .22, p < .05$) は有意で, 「努力」との間の相関係数 ($r = -.19, p < .10$) も有意となる傾向がみられた。特性的自己効力感が高いほど「運」への帰属は強く, 「努力」への帰属は弱い傾向がある。また, SSE評定値と「運」との間の相関係数 ($r = .27, p < .01$) が有意で, 「運」へ強く帰属するほどSSEが高くなる傾向がみられていた。

対処行動については, 男性の試験場面およびレポート場面と同様に, 積極的対処行動の評定値は特性的自己効力感高群の方が有意に

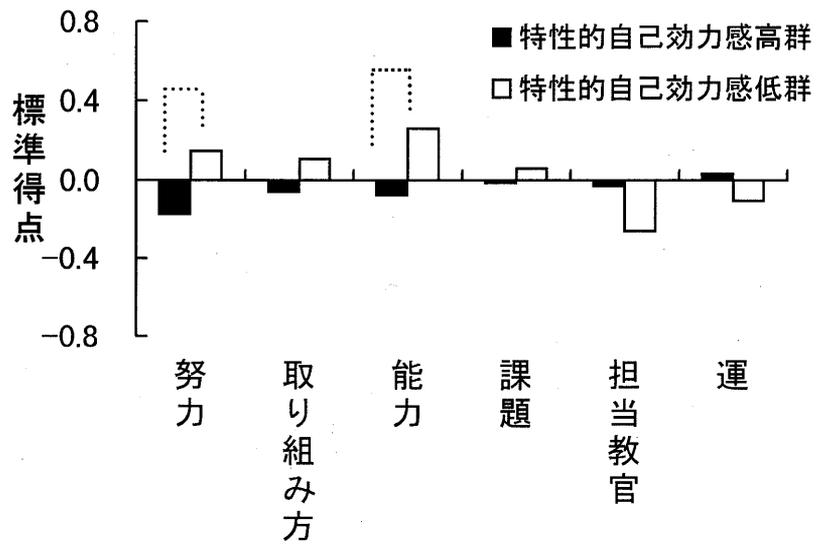


図 2.3.3 標準得点化した原因帰属評定値
 (女性, 試験場面) (研究3)
 (破線: $p < .10$)

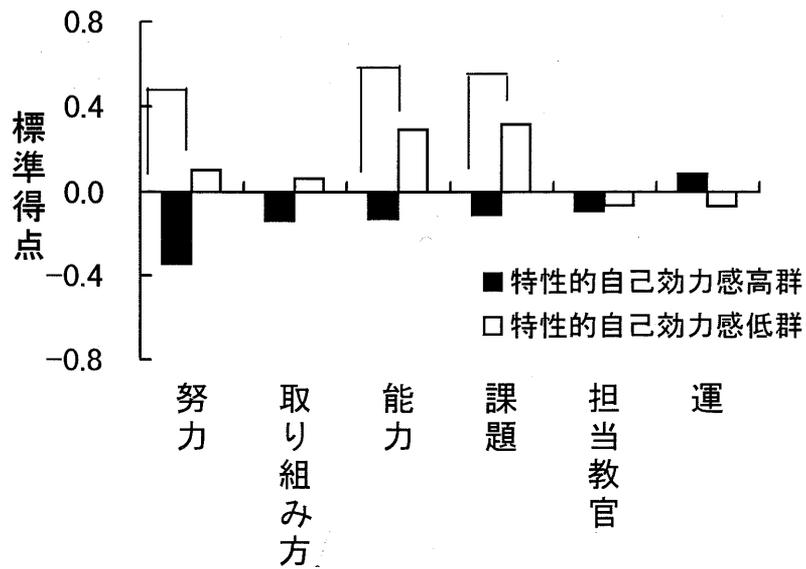


図 2.3.4 標準得点化した原因帰属評定値
 (女性, レポート場面) (研究3)
 (実線: $p < .05$)

高かった。一方、消極的対処行動の評定値は、特性的自己効力感低群の方が数値は高いが、群間差は有意ではなかった。

女性のレポート場面 女性のレポート場面においては、「運」を除くすべての帰属因について、低群の評定値が高くなっていた。このうち群間差が有意であったのは、「努力」、「能力」、「課題」であった。

特性的自己効力感尺度得点と原因帰属の各項目との間のピアソンの積率相関係数を見ると、「能力」、「運」との間の相関係数が有意で、それぞれ、 $r = -.26$ ($p < .01$), $r = .20$ ($p < .05$) であり、特性的自己効力感が高いほど「能力」への帰属が弱く、「運」への帰属が強い。また、SSE評定値と原因帰属の各項目との間の相関係数は、「取り組み方」において有意で ($r = .21, p < .05$)、「取り組み方」に強く帰属するほどSSEは高くなっていた。また「運」との間の相関係数 ($r = .17, p < .10$) も有意となる傾向がみられた。

対処行動の評定値は、特性的自己効力感高群の方が積極的対処行動において高くなり、低群の方が消極的対処行動において高くなる傾向があるものの、群間に大きな差はみられていない。

ところで、「積極的対処行動」と「消極的対処行動」との間には、試験場面では、男性において $r = -.43$ ($p < .001$)、女性において $r = -.23$ ($p < .01$)、また、レポート場面では、男性において $r = -.25$ ($p < .10$)、女性において $r = -.10$ (*ns*) の相関がみられた。これより、両者の間には一方が高いと他方が低くなる傾向はあるものの、必ずしも両者が二者択一的な関係にあるわけではないことがわかる。

4. 考察

以上の結果から、男性の場合、SSEにおける特性的自己効力感の

群間差は、特性的自己効力感高群の適応的な帰属傾向（内的で統制可能な要因への原因帰属）により生じていると考えられる。一方、女性の場合は、特性的自己効力感低群の不適応的な帰属傾向（あるいは特性的自己効力感高群の自己保護的な帰属傾向）の結果として生じたものであると考えられる。

すなわち、男性においては、概して、ネガティブな出来事を、内的で統制可能な要因である「努力」と「取り組み方」へより強く帰属している特性的自己効力感高群は、外的な帰属因である「課題」、「運」、「担当教官」へより強く帰属する傾向のある特性的自己効力感低群に対し、明らかに適応的な帰属傾向を示しており、この帰属傾向の差が特性的自己効力感高群と低群との間のSSEの差をもたらしたと推測される。それに対して女性では、特性的自己効力感高群がネガティブな結果を自己外の要因に、低群がネガティブな結果を自己内の要因（「努力」と「能力」）に、より強く帰属したことが、特性的自己効力感高群と低群の間のSSEの群間差に影響していたと推測される。内的で統制可能な要因である「努力」への帰属は、一見、努力量の増加をもたらす適応的な帰属傾向のようであるが、この場合は同時に「能力」の評定値も高く、統制不可能な要因である「能力」の不足とセットになった「努力」への帰属は、努力しても能力がないためどうにもならないという絶望的な状態であるとも解釈できる。また、ネガティブな出来事を自己内の統制不可能な原因である「能力」により強く帰属する特性的自己効力感低群の帰属傾向は、事態への能動的・積極的な対処にはつながりにくいという意味で、不適応的な帰属傾向といえよう。

また、対処行動については、男性の特性的自己効力感高群におい

では適応的な帰属傾向がSSEの高さや積極的な対処行動につながっていると推測されるのに対し、女性においては特性的自己効力感高群が低群ほど不適応的な帰属傾向をもたないこと、すなわち、相対的に自己保護的な帰属傾向をもっていることが、特性的自己効力感群間のSSEや対処行動の差につながっていると考えられる。ネガティブな出来事を自己に帰属しない特性的自己効力感高群の帰属傾向は、相対的に、積極的な対処行動をとろうとする意欲を喪失しにくいのであろう。さらに、男性の特性的自己効力感高群における、対処行動およびSSEの評定値と、女性の特性的自己効力感高群のそれらを見比べると、男性のほうが積極的な対処行動とSSEの評定値が高く、女性のほうは消極的な対処行動の評定値が高めである。これには男女間の原因帰属傾向の違いが関連している可能性が推測される。すなわち、SSEにおける特性的自己効力感群間差が特性的自己効力感低群の不適応的な帰属傾向（あるいは、特性的自己効力感高群の自己保護的な帰属傾向）によるものである女性の場合には、特性的自己効力感高群の適応的な帰属傾向により群間差の生じる男性に比べ、SSEや積極的な対処行動は低くなるのであろう。

すなわち、SSEにおける特性的自己効力感の群間差は、男性の場合、特性的自己効力感高群の適応的な帰属傾向（内的で統制可能な要因への原因帰属）によるものであり、女性の場合、特性的自己効力感低群の不適応的な帰属傾向（あるいは特性的自己効力感高群の自己保護的な帰属傾向）の結果として生じたと考えられる。つまり、特性的自己効力感高群に対して予想された、2タイプの帰属傾向（内的で統制可能な要因へより強く帰属する傾向と、より自己保護的な帰属傾向）の両方が見出されたのである。

また、本研究の結果からは、それらの2タイプの帰属傾向が性差と関わることが示唆されるが、その背景として達成動機や成功回避動機におけるジェンダー差が考えられる。すなわち、成功や失敗に対する原因帰属には性役割意識に基づく性差がみられ、試験の失敗のようなネガティブな結果に対し、概して、男性が次回の期待を高める（低めない）ような不安定で統制可能な要因へ原因を帰属するのに対し、女性は能力や課題の難しさといった次回の期待を低めるような要因への帰属を行なう傾向が知られている（Beyer, 1998-1999）。本研究でみられた、男性および女性の帰属傾向の特性的自己効力感の群間差には、ジェンダー差に関する研究で見出された男性の帰属傾向、女性の帰属傾向との対応がみられ、そのような文化的な背景の影響が示唆される。ただし、本研究ではこれらについて積極的に検討してはいないのでジェンダーによる差であるといえるかどうかの検討も含め、今後の研究にゆだねられる。

最後に、今回使用した試験場面では、男性のSSEには有意な特性的自己効力感群間差が見出されなかった。これは、試験場面が行動と結果の随伴を感じにくい場面であり、場面に対する統制可能性の認知に、特性的自己効力感の高・低の効果が生じにくかったためと考えられる。すなわち、両場面で重要性を3以上に評定した者（男性51名、女性94名）を対象に、性別に、各帰属評定項目について、場面間での評定値の平均値の比較（対応のある t 検定）を行なった結果、男性では課題（ $t=2.70$, $df=50$, $p<.01$ ）と運（ $t=3.96$, $df=50$, $p<.001$ ）において、女性では運（ $t=4.78$, $df=93$, $p<.001$ ）において、場面間の差が有意で、レポート場面より試験場面のほうが課題の困難さや運の悪さが強く影響していると感じていることが

示された。運の悪さの影響が強く認知されていることから、試験場面はレポート場面に比べ、遂行とその結果の間の必然的な結びつきが感じられにくい場面であったことが示唆される。このことが、統制可能性の認知の程度により生じていると考えられる、男性のSSEにおける、特性的自己効力感群間差を生じにくくしたのであろう。今後は、結果に影響を及ぼす可能性のある、場面の性質にも十分留意して検討を進める必要がある。

第3章 総合考察

本章では、第2章における実証的研究で得られた知見を整理し考察を加えた上で、実践に寄与する知見を得るための、自己効力感研究の今後の方向性について述べる。

第1節 総合考察

まず、特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に及ぼす影響について、研究1および研究2から得られた知見をまとめる。本研究は、特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容を規定する効果について検討するため、課題遂行成績についてのフィードバックが課題固有の自己効力感を変容させる過程において、個人の特性的自己効力感のレベルが、課題固有の自己効力感の変容にどのように影響を与えるかを調べることを主目的としていた。この点については、ネガティブに操作されたフィードバック情報を与えられる条件下で、課題固有の自己効力感の3つの指標（SSE-T, SSE-R, SSE-A）のうち、課題遂行量に基づく絶対的な指標である SSE-A において、特性的自己効力感の高群と低群の間に差が現われることが明らかになった。すなわち、特性的自己効力感の高い群では、ネガティブな社会的比較情報がフィードバックされても、何のフィードバック情報もない場合と比較して、SSE-A は高い水準に保たれる。また、その高さは、社会的比較情報がポジティブである場合とほぼ同様の高さであった。それに対し、特性的自己効力感の低い群では、

ネガティブな社会的比較情報がフィードバックされると、SSE-A の高さは、何のフィードバック情報もない場合と同等であり、ポジティブな社会的比較情報を与えられる場合と比較して、低い水準にあった。これより、特性的自己効力感の高さは、課題事態において、ネガティブな社会的比較情報が課題固有の自己効力感に阻害的に働くのを妨げる効果を持つと考えられる。SSE-A にのみ特性的自己効力感の影響がみられたのは、SSE 評定の際に主に何を参照するかの違いによると考えられる。項目内容からして、評定の際に主に偏差値情報が参照されたと考えられる SSE-R と、結果的にそれに連動していた SSE-T では、偏差値情報がその情報源として比較的大きなウェイトを占めており、特性的自己効力感のような個人的特性が影響する余地は少なかったようである。また、ネガティブフィードバック条件でのみ特性的自己効力感の影響がみられたのであるが、本研究でのネガティブフィードバック条件においては、偏差値情報は一貫してネガティブな情報であるのに対して、フィードバック情報のうちの、課題遂行量情報は、試行につれ課題遂行量が上昇しているため、結果的にポジティブなものであった。このことが、課題遂行量の予測に基づく測度である SSE-A と、その他の測度との間の変容傾向の違いをもたらした可能性がある。さらに、自己効力感の高さは、特に困難場面への反応を決定するにあたり、クリティカルな役割を果たすことが知られているが (e.g., Podsakoff & Farh, 1989), 特性的自己効力感の影響もそれと同様に、本実験でのネガティブフィードバック条件のような、「かなり偏差値が低い」という脅威的なフィードバックを受ける一種の困難場面で、顕著に表れたと考えられる。

次に、特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容を介して課題遂行に及ぼす影響についての結果をまとめる。課題固有の自己効力感の高さは、努力量を通じて課題遂行量に反映されると考えられる。よって、ネガティブなフィードバック情報を与えられる条件下で、SSE-Aにおいて、特性的自己効力感の高群と低群との間に生じた差と同様のものが課題遂行量にも生じると考えられる。この点については、研究1においては明確な結果が得られなかった。しかし、課題遂行時間の調整と、実験参加者の課題に対する態度（努力の効果の認知、重要性の認知）の統制を行なって、再度、課題遂行量への影響を検討した研究2では、課題固有の自己効力感の高さが、努力量を通じて課題遂行量に影響していることを示唆する結果が得られた。すなわち、SSE-Aにおける群間差と対応する群間差の傾向が、課題遂行量に生じていることがみいだされ、また、SSE-Aの変化量と課題遂行量の変化量との間の相関関係の分析において、両者の間に正の相関が確認された。これらのことから、課題固有の自己効力感の高さが、課題遂行量に影響していることが強く示唆される。よって、ネガティブな社会的比較情報を与えられる状況下においては、特性的自己効力感の高さは、課題固有の自己効力感における社会的比較情報の阻害的な影響を緩和することによって、より高い課題遂行をもたらすと解釈される。

また、研究2では、このような課題遂行量における差をもたらす認知的なメカニズムについて、不満感も関与していることが示唆された。すなわち、不満感が動機づけとなるか否かを自己効力感（SSE）の高さが規定しており、自己効力感が高ければある程度不満は動機づけにつながる（Bandura, 1982 / 1985）ことが指摘されているように、

SSE-Aが高く、かつ、不満感の強い、ネガティブフィードバック条件下の特性的自己効力感高群において課題遂行量の増加が大きかったものと解釈される。

このように、研究1および研究2で、特性的自己効力感は SSE-A の変容を規定しており、特性的自己効力感高群は、低群と比較して、ネガティブな社会的比較情報によるダメージを受けにくいことが示された。これについて、ネガティブな社会的比較情報が SSE の変容に及ぼす影響は、遂行結果がどのように原因帰属されるかによってもある程度規定されることが知られている。このことから、特性的自己効力感高群と低群の間に帰属傾向の違いが存在すると想定される。そこで、課題固有の自己効力感の変容メカニズムをより明確にするため、研究3では、特性的自己効力感と原因帰属傾向との関連を検討した。

その結果、特性的自己効力感高群は低群と比較して、(1)ネガティブな結果を、統制可能な要因（努力、方略）により強く帰属する傾向、あるいは、(2)ネガティブな結果を、自己内の要因（能力、努力）には帰属しにくい傾向を持っていることが示された。これらのうち、(1)の傾向は男性において示され、(2)の傾向は女性において示された。このように、男性と女性とでは、特性的自己効力感の高群と低群との間の帰属傾向の違い方のパターンが異なっていたが、ともに、自己効力感高群は低群と比較して、自己効力感の低下しにくい原因帰属傾向を有していることが明らかになった。

以上の結果をまとめて図示すると、図 3.1.1、図 3.1.2、図 3.1.3 のようになる。まず、変容傾向を解釈する上でベースラインとなる、フィードバックなし条件においては（図 3.1.1 参照）、特性的自己効

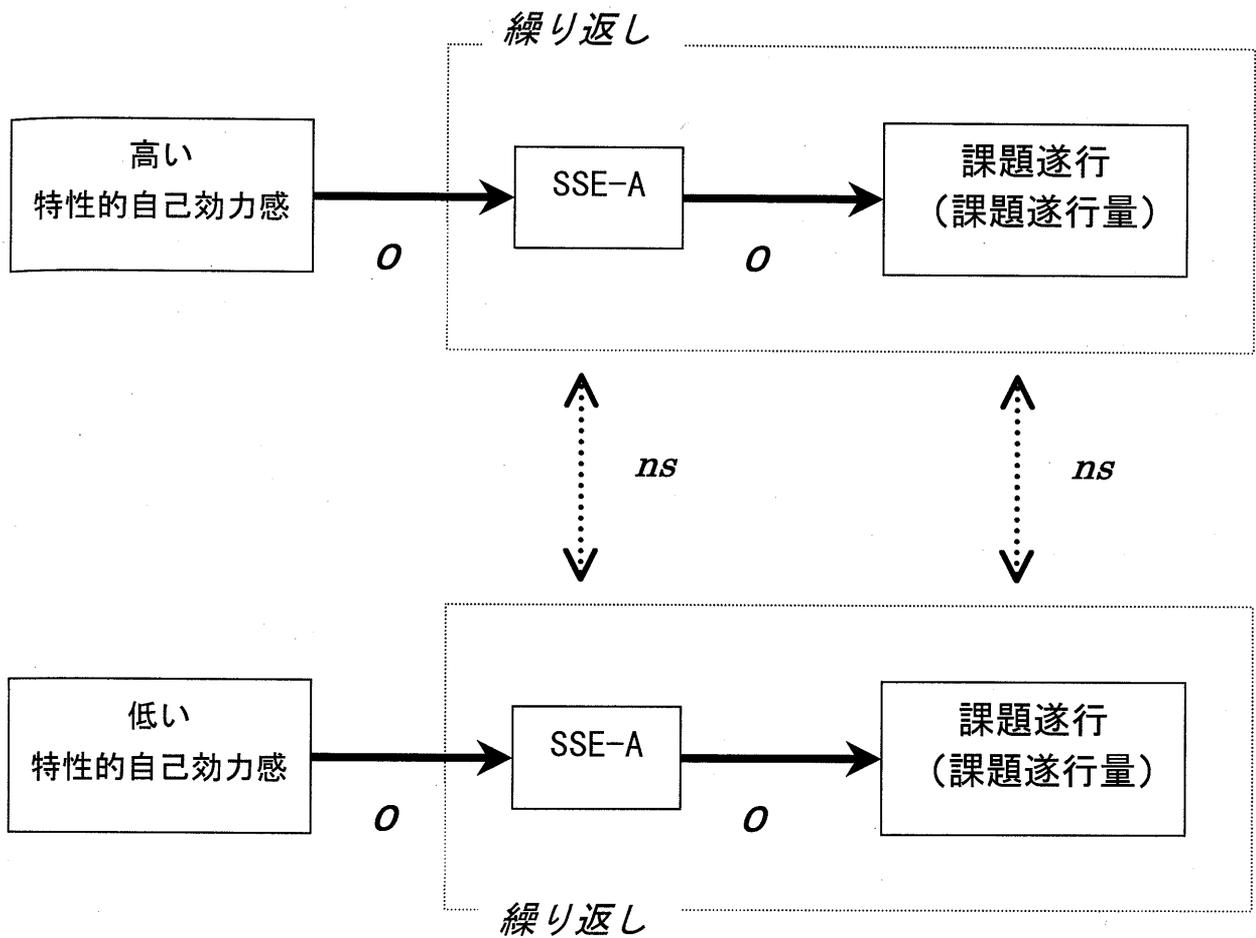


図 3.1.1 フィードバックなし条件における、
 特性的自己効力感群別の SSE-A と課題遂行量の変容過程
 (上図： 特性的自己効力感高群； 下図： 特性的自己効力感低群)

フィードバックなし条件においては、特性的自己効力感群間に SSE-A および課題遂行量の変容傾向の違いはみられず (*ns*)、SSE-A および課題遂行量の変容傾向に、特性的自己効力感の高さによる影響はない (0)。

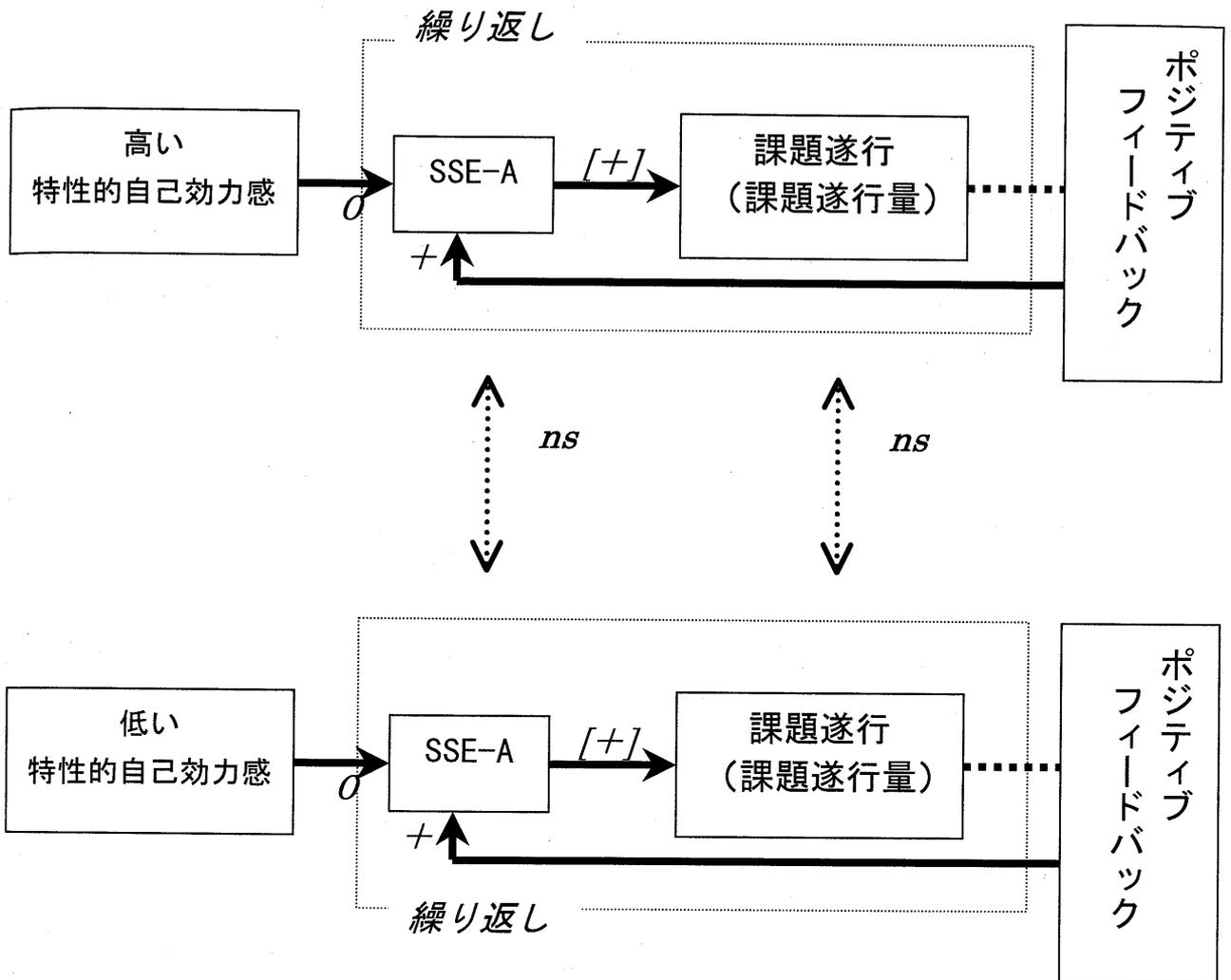


図 3.1.2 ポジティブフィードバック条件における、
 特性的自己効力感群別の SSE-A と課題遂行量の変容過程
 (上図： 特性的自己効力感高群； 下図： 特性的自己効力感低群)

ポジティブフィードバック条件においては、特性的自己効力感群間に SSE-A および課題遂行量の変容傾向の違いはみられない (*ns*)。両群とも同様に、相対的・絶対的にポジティブなフィードバックによる SSE-A の上昇 (+) にともなう課題遂行量の上昇が想定される ([+])。

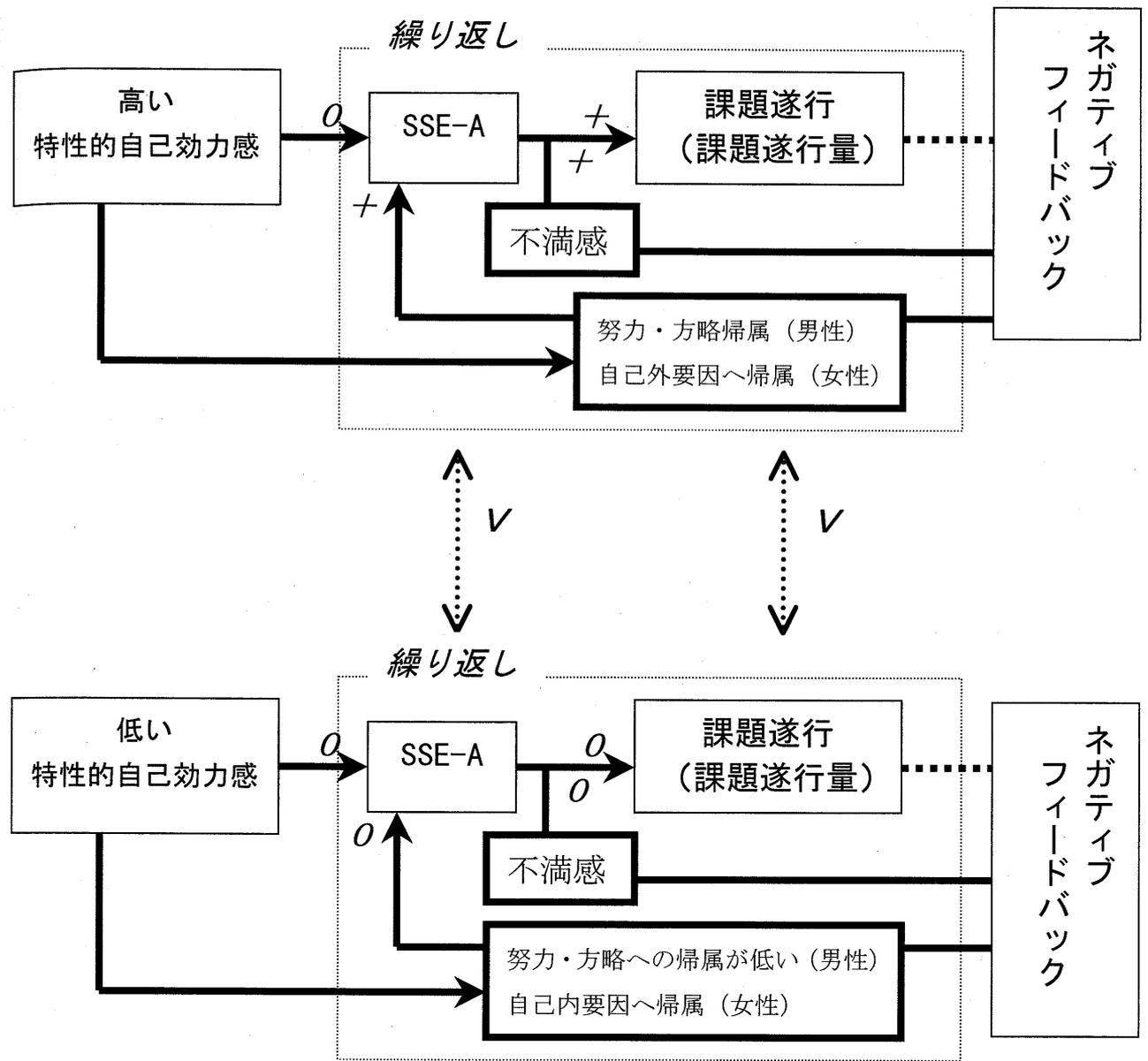


図 3.1.3 ネガティブフィードバック条件における、
 特性的自己効力感群別の SSE-A と課題遂行量の変容過程
 (上図： 特性的自己効力感高群； 下図： 特性的自己効力感低群)

ネガティブフィードバック条件においては、特性的自己効力感高群は低群よりも SSE-A および課題遂行量が高い (V)。相対的にネガティブなフィードバックに対し、特性的自己効力感高群では、努力・方略帰属や (男性)、自己外の要因への帰属 (女性) を行なう。これにより、SSE-A の低下は阻止され、遂行量情報 (絶対的) による上昇が生じ (+)、不満感が動機づけとして機能する (+)。低群では、努力・方略帰属の低さ (男性) や自己内要因に帰属する (女性) ため、SSE-A は上昇せず (0)、不満感は動機づけとして機能しにくい (0)。その結果が SSE-A と課題遂行量の差としてあらわれる (V)。

力感高群と低群との間に、SSE-Aおよび課題遂行量の変容傾向の違いはみられなかった。フィードバック情報を与えられない状況下では、SSE-Aおよび課題遂行量の変容傾向に、特性的自己効力感の高さによる違いは生じない。

次に、ポジティブフィードバック条件においても（図 3.1.2 参照）、特性的自己効力感高群と低群との間に、SSE-A および課題遂行量の変容傾向の違いはみられない。ポジティブなフィードバック情報は、成績が相対的にすぐれていることを示す情報である。また同時に、このポジティブフィードバック条件を設けた研究 1 においては、どの条件群も試行回につれて課題遂行量が上昇していたため、課題遂行量情報（絶対的）も“だんだんと多くできるようになっていっている”ことを示すポジティブなものであった。研究 1 では、課題遂行時間が短か過ぎたという手続き的な問題が影響して、SSE-A と課題遂行量の間には、対応するような群間差はみいだされなかったが、もし研究 2 と同じ手続きをとって検討すれば、恐らく、ポジティブフィードバック条件下では、特性的自己効力感の高群、低群とも、ポジティブなフィードバックによる SSE-A の上昇にともなう課題遂行量の上昇が生じたと予想される。

最後に、ネガティブフィードバック条件においては（図 3.1.3）、特性的自己効力感高群は低群よりも SSE-A および課題遂行量が高かった。ネガティブフィードバック情報とは、成績が相対的に劣っていることを示す情報である。しかし同時に、研究 1、研究 2 において、程度の差はあるものの、両群とも試行回につれて課題遂行量が上昇していたため、課題遂行量情報（絶対的）はポジティブなものであったといえる。このように、相対的な意味でネガティブなフ

フィードバックに対し、特性的自己効力感高群では、低群に比べ、努力帰属・方略帰属や（男性）、自己外の要因への帰属（女性）を強く行なう傾向がある（研究3）。こういった帰属傾向により、SSE-Aの低下は阻止され、また、ポジティブな課題遂行量情報にも敏感に反応して、SSE-Aの値が低群に比べ高くなるものと考えられる。SSE-Aが高ければ、不満感は動機づけ要因として機能すると考えられる。一方、低群では、努力帰属・方略帰属の低さや自己内要因への帰属により、相対的な意味でネガティブなフィードバックにとらわれてしまうため、SSE-Aは上昇せず、不満感は動機づけとして機能しにくいと考えられる。こうして、結果的に、高群の方がSSE-Aと課題遂行量の増加がより大きくなっている。

本研究により得られた、以上の知見から、課題固有の自己効力感や課題遂行を予測する上で、個人特性である特性的自己効力感の影響を考慮する必要性が明らかになった。すなわち具体的には、特性的自己効力感の高い者はネガティブな意味をもつフィードバック情報が与えられても、課題固有の自己効力感、特に、Taylor（1989）のいう *personal self-efficacy* にあたる部分（本研究でのSSE-A）や課題遂行量が抑制される可能性は、特性的自己効力感の低い者よりも少なく、ネガティブな社会的比較情報を伴うフィードバック情報であっても、フィードバック情報がない場合よりもある場合のほうが、不満感などの感情反応がバネとなり、課題の遂行量は上昇する可能性がある。他方、特性的自己効力感が低い者については、フィードバック情報にネガティブな社会的比較情報が付随する場合には、その取り扱いに特に十分な配慮が必要である。このような個人特性と外的処

遇との交互作用の存在は、個人要因を考慮することで、より効果的な介入方策の開発や、より正確な行動の予測が可能になることを示唆しており、これまでの自己効力感研究であまり取り上げられてこなかった個人要因に目を向ける必要性を明確にするものである。

第2節 今後の課題

本研究は、個人要因の考慮が、課題固有の自己効力感の変容の理解に役立つことを実証的に示すことを目的とした、探索的な研究であった。結果として、特性的自己効力感の高さを考慮することが、課題固有の自己効力感や課題遂行の変容傾向の予測に寄与する可能性を示す知見を得たが、実践への寄与を考えると、この点について結論を下すには、より多面的な検討が必要である。すなわち、例えば、本研究で扱った課題遂行結果のフィードバックに関していえば、フィードバック情報の種類や、フィードバックの影響を規定する状況的要因についても考慮していく必要がある。状況要因の重要性を示す例としては、遂行結果のフィードバックの影響は、遂行量情報そのものの高さだけでなく、それが社会的にどのように意味付けされるかによって異なるという現象が指摘されている。伊藤（1994）によれば、自分がどれだけ進歩したかについて、他者から与えられる社会的な評価の枠組みも、自己効力感に強く影響するという。すなわち、フィードバックを行う際に、“これだけできた”とフィードバックされるか、“これしかできない”とフィードバックされるかの違いにより、自己効力感の変容の

仕方に差がみられるのである。Jourden (1992) は、基準の80%が達成されたとき、すでにできた部分に注目させる達成フィードバック群と、まだできていない20%の方に注目させる欠如フィードバック群を設け、両群間の比較をおこなった。その結果、達成フィードバック群の被験者は、欠如フィードバック群に比べ、高い自己効力感を維持し、満足度が高く、次第に難しい目標に挑戦するようになり、分析的な方略を用い、高い生産性をあげたという。このように、フィードバックが自己効力感の変容に与える影響は、さまざまな状況要因、認知的要因と関連を持っており、それらを無視してフィードバックの効果を論じることはできない。

また、本研究では、特性的自己効力感と原因帰属との関連の検討は、場面想定法を用いて行なったが、実際に課題固有の自己効力感の変容する過程を捉えられる実験的な方法で、両者間の関連をより明確にすることが必要であろう。原因帰属と特性的自己効力感との関わりが明らかになれば、特性的自己効力感の低い者への援助の一環として、原因帰属への介入が役立つ可能性がでてくる。

具体的な課題としては、上述したような課題に着手することが挙げられる。一方、将来的な課題、あるいは研究の方向性としては、個人差要因を組み込んだ、実践に寄与するモデルの構築が求められる。それに向けての当面の具体的な課題として、特性的自己効力感から課題固有の自己効力感への影響過程、課題固有の自己効力感から課題遂行への影響過程に対する、より詳細な検討が必要になろう。

引用文献

- Baldwin, T. T., & Ford, J. K. 1988 Transfer of training: A review and directions for future research. *Personnel Psychology*, 41, 63-105.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bandura, A. 1986 *Social foundations of thought and action: A social cognitive Theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bandura A. 1982 / 1985 重久 剛(訳) 自己効力 (セルフ・エフィカシー) の探究 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木 豊(編) 社会的学習理論の新展開 金子書房 Pp.103-141.
(1982年の六本木国際文化会館におけるBanduraによる講演を、重久が邦訳したもの。1985年に出版された「社会的学習理論の新展開」の中に収録されている。)
- Bandura, A. 1995 *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press.
- Bandura, A., & Adams, N. E. 1977 Analysis of self-efficacy

- theory of behavioral change. *Cognitive Therapy and Research*, 1, 287-310.
- Bandura, A., & Jourden, F. J., 1991 Self-regulatory mechanisms governing the impact of social comparison on complex decision making. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 941-951.
- Bandura, A., & Shunk, D. H. 1981 Cultivating competence, self-efficacy, and intrinsic interest through proximal self-motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 586-598.
- Bandura, A., Adams, N. E., & Beyer, J. 1977 Cognitive processes mediating behavioral change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 125-139.
- Bandura, A., Reese, L., & Adams, N. E. 1982 Microanalysis of action and fear arousal as a function of differential levels of perceived self-efficacy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 5-21.
- Bandura, A., Taylor, C. B., Williams, S. L., Mefford, I. N., & Barchas, J. D., 1985 Catecholamine secretion as a function of perceived coping self-efficacy. *Journal of*

Consulting and Clinical Psychology, 53, 406-414.

Barling, J., & Abel, M. 1983 Self-efficacy beliefs and tennis performance. *Cognitive Therapy and Research*, 7, 265-272.

Betz, N. E., & Hackett, G. 1981 The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 399-410.

Betz, N. E., & Hackett, G. 1983 The relationship of mathematics self-efficacy expectations to the selection of science-based college majors. *Journal of Vocational Behavior*, 23, 329-345.

Beyer, S. 1998-1999, Winter Gender differences in causal attributions by college students of performance on course examinations. *Current Psychology: Developmental Learning Personality Social*, 17, 346-358.

カーソン R. 上遠恵子 (訳) 1987 海辺—生命のふるさと—
平河出版社

(Carson, R. 1955 *The edge of the sea*. Boston: Houghton Mifflin Company.)

- Condiotte, M. M., & Lichtenstein, E. 1981 Self-efficacy and relapse in smoking cessation programs. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 648-658.
- Craske, M. G., & Craig, K. D. 1984 Musical performance anxiety: The three-systems model and self-efficacy theory. *Behavior Research and Therapy*, 22, 267-280.
- DiClemente, C. C. 1981 Self-efficacy and smoking cessation maintenance: A preliminary report. *Cognitive Therapy and Research*, 5, 175-187.
- Ferrari, J. R., & Parker, J. T. 1992 High school achievement, self-efficacy and locus of causality as predictors of freshman academic performance. *Psychological Reports*, 71, 515-518.
- Forsyth, D. R., & McMillan, J. H. 1981 Attribution, affect and expectations: A test of Weiner's three-dimensional model. *Journal of Educational Psychology*, 73, 393-403.
- Fretz, B. R., Kluge, N. A., Ossana, S. M., Jones, S. M., & Merikangas, M. W. 1989 Intervention targets for reducing preretirement anxiety and depression. *Journal*

of Counseling Psychology, 36, 301-307.

藤田 正・笹川宏樹 1991 女子学生における一般性 self-efficacy と locus of control の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, 27, 115-121.

深田昭三 1986 自我関与的フィードバックが自己効力感と遂行に及ぼす影響 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 606-607.

深田昭三 1987 達成行動に及ぼす自己効力感の影響 昭和61年度広島大学大学院教育学研究科修士論文抄, 36-39.

Hackett, G., & Betz, N. E. 1981 A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, 18, 326-339.

Hayamizu, T. 1997 Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization. *Japanese Psychological Research*, 39, 98-108.

廣瀬英子 1998 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, 46, 343-355.

伊藤秀子 1994 自己の能力を信じる—バンデューラの自己効力論 梶田叡一（編） 自己意識心理学への招待 有斐閣 Pp.195-206.

Johnson, D. S., Perlow, R., & Pieper, K. F. 1993 Differences in task performance as a function of type of feedback: Learning-oriented versus performance-oriented feedback. *Journal of Applied Social Psychology*, 23, 303-320.

Johnson, D. S., Turban, D. B., Pieper, K. F., & Ng, Y. M. 1996 Exploring the role of normative- and performance-based feedback in motivational processes. *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 973-992.

Jourden, F. J. 1992 The influence of feedback framing on self-regulatory mechanisms: A glass half full or half empty? Manuscript submitted for publication.

鎌原雅彦・山地弘起・奈須正裕・村上裕恵・鹿毛雅治 1987 学習への動機づけの認知的規定因に関する考察 東京大学教育学部紀要, 27, 117-142.

Karl, K. A., O'leary-Kelly, A. M., & Martocchio, J. J. 1993 The impact of feedback and self-efficacy on performance in training. *Journal of Organizational Behavior*, 14, 379-

- Lane, T. W., & Borkovec, T. D. 1984 The influence of therapeutic expectancy/demand on self-efficacy ratings. *Cognitive Therapy and Research*, 8, 95-106.
- Lee, C. 1982 Self-efficacy as a predictor of performance in competitive gymnastics. *Journal of Sport Psychology*, 4, 405-409.
- Maddux, J. E., Norton, L. W., & Stoltenberg, C. D. 1986 Self-efficacy expectancy, outcome expectancy, and outcome value: relative effects on behavioral intentions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 4, 783-789.
- Maddux, J. E., Sherer, M., & Rogers, R. W. 1982 Self-efficacy expectancy and outcome expectancy: Their relationship and their effects on behavioral intentions. *Cognitive Therapy and Research*, 6, 207-211.
- Manning, M. M., & Wright, T. L. 1983 Self-efficacy expectancies, outcome expectancies, and the persistence of pain control in childbirth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 421-431.

Mitchell, C., & Stuart, B. R. 1984 Effect of self-efficacy on dropout from obesity treatment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 52, 1100-1101.

Moe, K. O., & Zeiss, A. M. 1982 Measuring self-efficacy expectations for social skills: A methodological inquiry. *Cognitive Therapy and Research*, 6, 191-205.

Mueller, L. M. 1992 The effect of general and task-specific self-efficacy on the performance of a fine motor task. *Journal of Sport Behavior*, 15, 130-140.

中澤 潤・大野木裕明・伊藤秀子・坂野雄二・鎌原雅彦 1988 社会的学習理論から社会的認知理論へ—Bandura理論の新展開をめぐる最近の動向— 心理学評論, 31, 229-251.

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, 43, 306-314.

Norwich, B. 1986 Assessing perceived self efficacy in relation to mathematics tasks: A study of the reliability and validity of assessment. *British Journal of Educational Psychology*, 56, 180-189.

Pentz, M. A., & Kazdin, A. E. 1982 Assertion modeling and stimuli effects on assertive behavior and self-efficacy in adolescents. *Behavior Research and Therapy*, 20, 365-371.

Podsakoff, P. M., & Farh, J. L., 1989 Effects of feedback sign and credibility on goal setting and task performance. *Organizational Behavior and Human Decision Process*, 44, 45-67.

Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs: General and Applied*, 80, 1-28.

坂野雄二 1989 一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討 早稲田大学人間科学研究, 2, 91-98.

坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, 12, 73-82.

坂野雄二・東條光彦 1993 セルフ・エフィカシー尺度 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 Pp.478-489.

- Schunk D. H., 1982 Effects of effort attributional feedback on children's perceived self-efficacy and achievement. *Journal of Educational Psychology*, 74, 548-556.
- Schunk, D. H. 1983a Ability versus effort attributional feedback: Differential effects on self-efficacy and achievement. *Journal of Educational Psychology*, 75, 848-856.
- Schunk, D. H. 1983b Developing children's self-efficacy and skills: The roles of social comparative information and goal setting. *Contemporary Educational Psychology*, 8, 76-86.
- Schunk, D. H. 1983c Reward contingencies and the development of children's skills and self-efficacy. *Journal of Educational Psychology*, 75, 511-518.
- Schunk, D. H. 1984 Sequential attributional feedback and children's achievement behaviors. *Journal of Educational Psychology*, 76, 1159-1169.
- Schunk, D. H. 1989 Self-efficacy and achievement behaviors *Educational Psychology Review*, 1, 173-208.

- Schunk, D. H., & Cox, P. D. 1986 Strategy training and attributional feedback with learning disabled students. *Journal of Educational Psychology*, 78, 201-209.
- Schunk, D. H., & Rice, J. M. 1986 Extended attributional feedback: Sequence effects during remedial reading instruction. *Journal of Early Adolescence*, 6, 55-66.
- Seligman, M. E. P. 1975 *Helplessness: On depression, development, and death*. San Francisco: W. H. Freeman and company.
- Shelton, S. H. 1989 *General self-efficacy inventory: A construct validity study*. Unpublished Ph.D dissertation, Graduate School of Psychology, Fuller Theological Seminary, CA.
- Shelton, S. H. 1990 Developing the construct of general self-efficacy. *Psychological Reports*, 66, 987-994.
- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. 1982 The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663-671.

Silver, W. S., Mitchell, T. R., & Gist, M. E. 1995 Responses to successful and unsuccessful performance: The moderating effect of self-efficacy on the relationship between performance and attributions. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 62, 286-299.

竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 1988 自己効力に関する研究の動向と問題 教育心理学研究, 36, 172-184.

Tannenbaum, S. I., Mathieu, J. E., Salas, E., & Cannon-Bowers, J. A. 1991 Meeting trainees' expectations: The influence of training fulfillment on the development of commitment, self-efficacy, and motivation. *Journal of Applied Psychology*, 76, 759-769.

Taylor, J. 1989 The effects of personal and competitive self-efficacy and differential outcome feedback on subsequent self-efficacy and performance. *Cognitive Therapy and Research*, 13, 67-79.

Tipton, R. M., & Worthington, E. L., Jr. 1984 The measurement of generalized self-efficacy: A study of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, 48, 545-548.

- Tuckman, B. W., & Sexton, T. L. 1992 The effects of informational feedback and self-beliefs on the motivation to perform a self-regulated task. *Journal of Research in Personality*, 26, 121-127.
- Watt, S. E., & Martin, P. R. 1994 Effect of general self-efficacy expectancies on performance attributions. *Psychological Reports*, 75, 951-961.
- Wexley, K. N. 1984 Personnel training. *Annual Review of Psychology*, 35, 519-551.
- Wheeler, K. G. 1983 Comparisons of self-efficacy and expectancy models of occupational preferences for college males and females. *Journal of Occupational Psychology*, 56, 73-78.
- Williams, S. L., Turner, S. M., & Peer, D. F. 1985 Guided mastery and performance desensitization treatments for severe acrophobia. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 237-247.

資料目次

研究1, 研究2に関連する資料

資料 A.	特性的自己効力感質問紙(研究1, 研究2 共通).....	126
資料 B.	課題 ※各試行の1枚目から6枚目を研究1で使用し, 1枚目から12枚目を研究2で使用した.	
	・第1試行	129
	・第2試行	142
	・第3試行	155
	・第4試行	168
資料 C.	課題遂行についての自己評価測定のための 質問紙(研究1, 研究2 共通).....	181
資料 D.	課題固有の自己効力感測定のための質問紙	
	・ SSE-T測定のための質問紙 (研究1, 研究2 共通)	183
	・ SSE-R測定のための質問紙 (研究1, 研究2 共通)	185
	・ SSE-A測定のための質問紙 (研究1)	187
	・ SSE-A測定項目のための質問紙 (研究2)	189

資料 E. 感情・課題印象の測定のための質問紙

- ・感情の測定（プレ測定）と課題印象の測定のための質問紙(研究2)..... 191
- ・感情の測定（ポスト測定）のための質問紙
（研究2）..... 193

研究3に関連する資料

資料 F. 質問紙

- ・質問紙(タイプ1)..... 195
- ・質問紙(タイプ2)..... 214

資料 A.

特性的自己効力感質問紙（研究1，研究2共通）

（A4版．縮小率88%）

日常の生活意識に関するアンケート

このアンケートは、日常生活についてお尋ねするものです。講義の成績などとはいっさい関係がありませんので、日頃のあなた自身の生活について感じたままをお答えください。また、このアンケートの結果は厳密に保管され、統計的に処理されます。よって、個人的な情報が外部に知られることは絶対にありませんので、思った通りを答えてください。

広島大学教育学研究科発達心理学研究室 三宅 幹子

A. まず、性別と年齢をお尋ねします。

性別(男・女) 年齢()歳

*性別は、あてはまるほうに○をつけてください

B. 以下の質問項目について、日頃のあなた自身にあてはまると思えますか。

1から5のうち、該当する番号に○をつけてください。

	そ う 難 う	ま あ そ う 難 う	ど ち い ら と も い え	あ ま り は 思 わ な い	そ う は 思 わ な い
1 自分が立てた計画は、うまくできる自信がある.....	5	4	3	2	1
2 しなければならないことがあっても、なかなか取りかからない.....	5	4	3	2	1
3 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける.....	5	4	3	2	1
4 新しい友達を作るのが苦手だ.....	5	4	3	2	1
5 重要な目標を決めても、めったに成功しない.....	5	4	3	2	1
6 何かを終える前にあきらめてしまう.....	5	4	3	2	1
7 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないで その人の所へ行く.....	5	4	3	2	1
8 困難に出会うのを避ける.....	5	4	3	2	1
9 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない.....	5	4	3	2	1
10 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならば すぐに止めてしまう.....	5	4	3	2	1
11 面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる.....	5	4	3	2	1
12 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる.....	5	4	3	2	1
13 新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくと すぐにあきらめてしまう.....	5	4	3	2	1
14 最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで 友達になろうとする.....	5	4	3	2	1
15 思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない.....	5	4	3	2	1
16 難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない.....	5	4	3	2	1
17 失敗すると、一生懸命やろうと思う.....	5	4	3	2	1
18 人の集まりの中では、うまく振る舞えない.....	5	4	3	2	1
19 何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる.....	5	4	3	2	1
20 人に頼らない方だ.....	5	4	3	2	1
21 私は自分から友達を作るのがうまい.....	5	4	3	2	1
22 すぐにあきらめてしまう.....	5	4	3	2	1
23 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない.....	5	4	3	2	1

記入漏れがないかどうかをもう一度確認してください。ご協力ありがとうございました。
この用紙と一緒に綴じてあります、「実験へのご協力のお願い」への回答もよろしくお願ひします。

実験へのご協力をお願い

ワープロ、コンピュータの普及にともない、正しい文字表記の能力が落ちてきているという指摘があります。しかし、文字表記の正誤に対する感覚は日常生活になくってはならない重要な能力です。

私は、この、誤表記検出能力(表記の間違いに気付く能力、表記の間違いを見つけだせる能力)についての簡単な実験を行なっていますが、この能力は、特に、将来、教員・公務員などの教育、研究、事務関係の職業に携わる人にとって、特に重要な能力です。そこで、将来こういった職業に携わる可能性の高い教育学部、および教職志望の皆さんに実験へのご協力をお願いしたいと考えています。つきましては、氏名、連絡先(電話番号)、および連絡できる時間帯をお書きいただけませんか。どうぞよろしくお願いします。(どうしても協力できないという方は、空白にしておいて下さい)

しめい

♣氏名 ()

♣連絡先(電話番号):(- -)

♣連絡できる時間帯: 【記入例】 月～金曜日 午後7:00～10:00

()

実験への協力をお願いすることになった方には、11月の初め頃までに、お書きくださった連絡先へ連絡致します。実験は、11月～12月の都合の良い時間に、実験時間30分以内を目安に行なう予定です。

資料 B. 課題

第 1 試行

各試行の課題は，研究 1 では，1枚目から6枚目までを使用し，研究 2 では，1枚目から12枚目までを使用した．研究 1，研究 2 ともに，各試行の課題の後に，「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」，「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し，全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した．

はてしなく続く拾い砂浜にたたずむと、そこにはニューイングランドのような若い岩礁海岸では管じられない太鼓の息づかいがある。

その感覚は、無幻の時を費やしてゆっくりと歩む地球の歴史そのものともいえるだろう。そこでは海と陸が何百万年もかけて気付きあげてきた関係が、そのままの姿で残されている。長い地質学的時間の中で、海は大西洋岸の平原に侵入と退却をくり返してきた。そして侵入のたびに、海は広く平らな土地に体積物をつもらせ、海の生物の化石を残していった。今より何百メートルも高くあるいは低く海はこれからもゆっくりと全身と後退をキラキラ光る砂浜の上で繰り帰していこう。

砂浜を校正する物質は、どれもがそれぞれの古くからの歴史を抱いている。砂は美しく神秘的で、常に変化している。その一粒一粒は生命の機嫌や地球の誕生にまでさかのぼる、遠い昔の自然の営みの結晶なのである。砂浜の太量の砂は、岩が風化し、削られて、もとの場所から雨や皮の流れによって海へとはこばれてきたものだ。ゆっくりと削られ、海へ運ばれる途中の、泊まったり動いたりという仮定において、鉱物はいろいろな運命にさらされる。あるものは脱
落し、またあるものはすり減って消えていく。

岩は山中で削られ、あるものは水に説け、また、あるいは川底との
激しい摩擦によって消えていく。さらに、あるものは、洪水のため
川底の土手の外にまで溢れ出て何百年何千年と建つうちに平野の
たいせき岩の中に綴じ込められ、さらに何百万年もへたのち、海
水の佐用によって海の中へ戻っていく。こうして岩は、雨や風や
霜などの耐え間ない働きによって、ついには海へたどりついて旅
を終える。しかしひとたび海に出ると、新たな餞別と移動が始め
られる。雲母のような軽い鉱物はすぐに遠くまで運ばれるが、チ
タン鉄鉱の黒い粒のように重いものは、嵐の荒波によって開眼の
上部に打ちあげられる。

食物を探し、外適からかくれ、餌をとらえ、そして子孫を残すとい
う静物の生と死の営みは、砂の表面だけをながめて、そこに生き物
は何もないと思う人の芽には触れることがない。ある朝、海岸の
潮がひいたばかりの塗れた砂に不思議なもようがついていた。一
つ一つがまとまったもようで、どれも真ん中から、まるで細い棒で
不規則に筋をつけたように、細い線が、報謝状にのびていた。はじ
めは、生物のいる毛配は感じられず、どんな生物がこのもようをつ
けたのかを知る手係は何もなかった。しかし、調べていくうちに、
もようの中芯点の下にヒトデがかくれているのが見つかった。もよ
うは、ヒトデの足が伸びているあとだったのだ。

海はかなりの進捗があるが、多数の島とのこぎりの葉のような海岸が一つの大きな潮間地帯をつくり出し、豊かな沿岸動物を生み出している。ここは、岬の南側の暖かい水には耐えられない主類の生物がたくさんすんでいる寒冷地帯なのである。適度に低温であること、海岸が岩石質であることのために、回藻がびっしりと生え、干潮時の岩は色とりどりの毛布をかけたようになっている。巻き貝の群れはかいそうを食べ、岩のこちら側は無数のフジツボで真っ黒になっているかと思えば、あちら側は無数のイガイで黒ずんでいる。

北大西洋をはさむ東と西の二つの海岸の動植物の間に比常に強い

供給点があるという事実は、この海を横断する事が比較的容易であ

ることを示唆している。メキシコ湾流は、たくさんの移動性生物を

アメリカの沿岸から運び差す。しかし、対岸への距離が長いのに対

し、大多数の生物の幼生期は短く、しかも成熟期にはいると身近に

浅瀬がなければならないということから、状況は複雑化している。

北大西洋には、海嶼の隆起や浅瀬、島などによって中間の駅が順備

されており生物たちは移動を中断して楽な駅にとまることができる。

約五億年前のカンブリア時代の岩石には、生物の記六がふたたび刻
まれ始める。無せきつい胴物の大部分のものが、種としての完全な
形をとどめたまま、突如として現われてくる。カイメン、クラゲ、
あらゆる種類のゴカイ類、巻貝に似た単純な軟体動物などである。
藻類も抱負であるが、高騰動物はまだ現われていない。現在の海辺
に生息している動植物の大部分の種は、少なくともこのカン
ブリア時代にすでに出限している。そして確かな証拠から、五億年
前に波に洗われていた遅滞の状況は、長い地球の歴史を経た現在の
潮間帯のようすにかなりよく似ていたと考えられる。

泥の干潟には、あざやかな式彩の軟態動物や、ニッコウガイの貝殻が、ピンクのばらの花びらのように一面に散らばっていた。かれらはその近くの泥に埋まって生きていたにちがいない。最初に目に映るものといえば、肺色の羽毛におおわれた一羽の小さいサギだけで、サギの修正である、こそこそとしたためらいがちな動差で、干潟を横切っていった。また、干潟には陸地にすむ生き物もいた。マングローブの根の間を出たり入ったりしている、一筋の新しい足跡は、アライグマの通った跡であった。やがて私は海鳥の、おそらくシギの一首と思われる足跡を見つけ、少したどっていったが、足跡は水のほうへ無機を変え、消えていた。あたかも、何もなかったかのようすべて潮がかき消してしまっていたのである。

そして、岩棚のふちに砕ける大波に揺られて、こんぶ墨の黒い葉は、
あたかも、なめし革のように滑らかに輝いていた。このつき出た岩
棚は、洞穴とその潮溜まりへの小道であったのだ。ときおり、ひと
きわ高い波が岩棚のふちをのり乞えて、壁にぶつかって泡立ってい
た。しかし、その大波がやってくる感隔には、岩棚におりて、まれ
にしか姿を現さない潮溜まりをかいま見るだけの予裕があった。そ
こで私は、濡れたツノマタの上にひざをつき、浅い潮溜りのある暗
い洞穴をのぞき込んだ。洞穴の天上とゆかの間はわずか数センチほ
どで、鏡のように静かな水面には、洞穴にはえている全てのものが
移っていた。

古生物学の記録は、大陸が形を変えつつあることや、潮流が変化し
つつあることの証拠を示している。なぜならば、古大の地球の様相
は現代の多くの植物や動物の分布とは異なることを示しているから
である。例えば、かつて大西洋の西インド諸島海域は、はるかかな
たの太平洋やインド洋と海流により、直説つながっていた。その後、
赤道海流は東に向かい、海の生物が分散しないように壁がつけられ
た。しかし、今日生存している生物の種類を通して、過去の生物の
分布上況を知ることができる。私は、カロライナ州の階岸で、ゴカ
イが分泌する石灰質によってつくられた、岩石のように硬い、管状
のかたまりを見つけた事があるが、それは、大西洋では見られない
もので、インド洋に同種のものが存在している。

海の動物の大部分は、水温に対するはっきりした好みがあるので、北アメリカの東部沿岸水域をいくつかの生物区域に分けることができる。これらの区域内の水温は、南から北へ向かって、ある程度の返歌はあるが、潮流によって強い影響を受けている。そこでは、メキシコ湾流によって北へ運ばれる暖かい熱帯の水の強い流れと、それと閉口して陸地側を北から静かに流れ下る詰めたラブラドル海流とは、すれちがいながら、暖かい水と冷たい水とが複雑にまざりあっている。

海辺は付思議に満ちた美しいところである。地球の長い歴史を通して、海辺は絶えず片化している不案定な地域であった。波は陸地に激しくあたってくだけ、潮は、大地の上まで押し寄せては引いていく。海願線の形は、一日として同じではなかった。潮がその永遠のリズムを刻みながら満ちそして引いていくだけでなく、海面そのものが決して一定したものではない。氷河の成長と消滅、増え続けるたいせき物の重さによる深い大洋の底の変化、また大陸鉛岸の地殻の変動に応じて、海綿は上下するのだ。今日は海がひたひたと陸地に押し寄せてくるかと思えば、明日はその逆になる。海と陸の接点は常にとらえがたく、はっきりとした境解線を引くことはできない。

資料 B. 課題

第 2 試行

各試行の課題は，研究 1 では，1枚目から6枚目までを使用し，研究 2 では，1枚目から12枚目までを使用した．研究 1，研究 2 ともに，各試行の課題の後に，「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」，「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し，全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した．

セキエイは、どんな酒類の岩にもふくまれているために、多くの砂浜はその大部分をセキエイが閉めている。しかし、セキエイの砂の仲には他の鉱物もたくさん存在しており、ほんの少しの砂にも10種以上の鉱物が見られる。黒ずんだ重い鉱物は風邪や水の重力の作用を受けて、白っぽいセキエイの砂の上に模様を描いていく。それはあるときはほとんど純粋なざくろ石からなる紫色の影となり、かげによって位地を変え、暗色の波紋をえがく。また、カイリョク石が暗緑色のもようを作ることもある。この石は、生物と無生物の相互作用と海水の作用によってつくられた鉱物で、カリウムの多いケイ酸鉄からできており、あらゆる地質年代のたいせき物に服まれている。

ハワイの多くの海岸では、黒いゲンブ岩の容岩からできたカンラン石の砂があり、また、スコットランドの砂浜は、沖遭いの海中に育つサンゴ類のかけらでつくられている。またアイルランドの海岸では、砂丘の砂は、海を富裕していたユウコウ虫の小さな穴の飽いた殻と、炭酸カルシウムの粒とでできている。動物が死んでしまうと殻は改訂まで漂っていき、そこに積もってたいせき岩となる。時が流れ、たいせき岩は隆来してがけになり、削られて、また海に戻る。

フロリダ軟部の砂の中にもユウコウ虫の殻はふくまれており、サンゴのかけらや貝殻とともに、波に砕かれ、たいせきし、磨かれている。

アメリカの海岸ではそれぞれ別の起元をもった声質の異なる砂が見られる。何全年も昔に氷河によって北から運ばれてきた岩のかけらからできあがった砂には、長くはらんに満ちた歴史が刻まれているのだ。岩は、氷によって管かれ、押しつぶされ、氷と友に運ばれ、最後には波によって砂粒になる。そしてまた岩は、氷が動きだすよりはるか昔に、地底の熱によってどろどろになり、誰も見ることのない放法で、深い避け目を通して暗黒の地球の内部から日光の下へと上がってきたのである。歴史の現自転においては岩は海辺に砂として存材し、潮の流れによって移動し、常に変わらぬ終わりのない波の働きをうけて、たいせきし、漂っていく。

大昔の砂粒を見ると、その表面に施されたエッチングのような線が
過ぎ去った時代の気孔を知る手がかりを与えてくれる。古い時代の
砂からできているたいせき岩には、氷河期の氷の上を拭き渡ってき
た強風がつくった霜ふりもようが刻み混まれている。岩は、私たち
にとって泳続性の像徴のようなものだが、どんなに硬い岩でも雨や
波に打たれて粉々になっていく。しかし、砂粒はほとんど壊れるこ
とがない。塗れた小さな砂粒は、互いのわずかなすき間に入りこみ、
そのまわりは毛細管現象によって水のまくができる。このまくが、
クッションとなって砂粒がこすれあうのを防いでおり、大波がきて
きても、たがいにぶつかり遭うことはない。

潮の動きが激しく、満ち引きの大きい海岸にたたずんでいると、潮の満ち引きのありさまが、日々、刻々、認識される。反服する満ち潮は、陸地に向かってその敷居を押し上げつつ全進する、海の劇的な演出であり、それに対し引き潮は、見なれない世界をさらけ出す訳割を果たしている。広々とした泥の干潟の、奇妙な穴や、土の漏り上がりや足跡などから、水にぬれた海藻が一面に横たわり、多くの動物をかばって保護していることもあるだろう。より直切的には、潮の満ち干はみずからの言葉で語りかけてくる。海原のうねりから遠ざかった海岸は、満ちてくる潮の音がはっきりと効き取れる。

海水に溶け込んでいる酸素で行き来している海岸の動物は、かわるがわる海になったり陸になったりする場所では、常にぬれている方法を見つけなければならない。陸地からおりてきて満潮線を肥えてしまった陸生動物は、満潮時に溺れないように酸素を時給することによって、自分の生命を守らなければならない。潮が引いている間、潮干帯にすむ動物の大部分は、全くと言っていいほど食物にありつくことができない。命を意地するための本質的な講堂は、水が海辺を覆っている間に営まれなければならないのだ。このように、潮のリズムは、活動と静止を交互にくり返す生物のリズムのなかに反映されている。

海辺にすむ動物は、温暖な海岸の季切的变化には耐えられるが、ある朱のものは冬の厳しい寒さを避ける必要にせまられる。スナガニやハマトビムシは、砂の中に深い穴を掘ってその中で冬民すると考えられている。一年の大半を磯波の中で繰らすスナガニは、冬になると沖合の海底にもぐっている。外見は花の咲いた植物のようなヒドロ虫の多くは、冬には体の宙心に向かって収縮し、すべての生活組織を、基部である茎の中にひっこめてしまう。他の海辺の動物は、一年生植物のように夏の終わりには死んでしまう。夏の間、海辺でよく見かけるミズクラゲは、秋の終わりの木枯らしが吹く頃になると全部死んでしまうが、次の世台は小さな植物のような形になって、海面の下の岩にぴったりとくっついて生き残る。

フジツボの円すい形の殻は、波の力をそらすので、水は、渦を巻きながら、素通りして行く。しかも、円すい体の底面全体が、非常に強い天然のセメントで岩に付着し、はがすには、よく切れるナイフが必要である。洗い流される事と、粒される事という、海岸での二つの棄権は、フジツボの場合、問題にならない。しかし、このような場所に生存するということは、軌跡的である。つまり、フジツボが、岩場に足がかりを得たのは、幼い磁器であり、体は波に順応できるほど成長してなかったはずである。大波が荒れ狂う中で、ひ弱な幼生は波が打ちつける岩の上に定着し、体の組織がおとなに返信するまでの厳しい時をやり過ごさなければならなかった。

大潮の引き潮時，このような魔法の国を訪れるたび，私はなぎさの住人達の中で，最も繊細な美しさを持つものを探し求める。それは植物ではなく動物であって，やや深い海の入り口に済んでいる。ようせいの洞穴は私の機待にそむかなかった。壁面からは、アネモネの花のようにきゃしゃな淡いピンク色のクダウミヒドラがぶら下がっていた。ここには，この世のものとも思われぬほど先練された装いの生き物が生息していて，彼らは本当に美しく，腕づくの世界では生きていけないほど危うかった。しかし，彼らの体のどの部分も機能的に働き，茎のような部分も，花びらのような触手も現実の生活に適合している。潮が引いている間，彼らは海が帰ってくるのをひたすら待ちわびていることを私は知っていた。

海辺は、潮の動きしだいで、あるときは陸となり、また、あるときは海になるという二つの性各をもっている。干潮時のなぎさは、寒さや暑さ、風、雨、照りつける太陽にされられ、陸の世界の過酷な極元状態が現れる。そして漫潮時、なぎさはいちめん水の世界になり、海に安定が戻ってくる。変化の多い場所には、最もたくましく、かつ適応的な生物しか生き残れないのだが、その厳しさにもかかわらず、潮の干満のあいだに位置するこれらの場所には、様々な植物や動物がいるのである。

基本的な地域分類は、アメリカの沿岸地態を区分する上で、十分な根拠を持っている。しかし、この区分が、南からここを通貨しようとする温水の生物に対して、絶耐的な障害ではないということが、明らかになった。多くの生物が南から水の冷たい地域に侵入し、さらにメイン州からカナダにまで分布して器妙な変化が起っている。

このような新しい分布は、今世紀の初頭から始まったように見え、今でははっきりと覚認されているが、広範囲の気候の変化と関係があることは言うまでもない。一般的な気温の上昇は、まず北極地帯で起こり、今では北部の各州の温暖地域で注目されている。

海辺には、過去の歴史と、鳥の足跡を海が流し去ったように、以前
に起こった多くの事を消し去っていく絶えざる時の流れとがあった。
時の写り変わりは、木の根や枝などにすんでいる数百の小さな巻き
害であるタマキビの中にも、静かに反映されている。かれらの粗先
は海にすみ、生活のあらゆる過程は、海水というきずなに固くしば
りつけられていた。数千年、数百満年にわたってそのきずなは少し
ずつたち切られ、彼らは水の外の生活に準応していった。そして、
今では海水から何メートルも上にすみ、ほんのたまにしか海に戻ら
ない。そしておそらく、彼らの子損は、それほど遠くない将来、海
を思い出すようなしぐささえもしなくなるだろう。

資料 B. 課題

第3試行

各試行の課題は，研究1では，1枚目から6枚目までを使用し，研究2では，1枚目から12枚目までを使用した．研究1，研究2ともに，各試行の課題の後に，「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」，「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し，全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した．

砂にふくまれる淡酸カルシウムは、バージニア州の南部では約5パーセントにも及ぶ。ノースカロライナまで軟化すると、貝柄からつくられた砂が多くなるが、砂浜の大部分はまだセキエイである。ケイカボクのような得様な鉱物が集まってできている換わった砂もある。フロリダのメキシコ湾岸北部の砂は、ほとんどセキエイでできしており、山岳地帯から運ばれてきたその砂粒は、雪のように白く広がっている。しかし、南に行くにつれ、けっしょう質の砂に貝のかけらがまざるようになり、フロリダの東海岸では、どこを見ても華山性の鉱物はほとんどみうけられず、何千キロも海流に運ばれてきた軽石がわずかに砂に交ざっているだけである。

砂はまの砂粒の微笑な世界は、驚くほど小さな生きものたちの世界でもある。そこにすむ生物は、まるで地表をおおう海の中を泳ぐ魚のように、砂粒をおおう水のまくの中を泳ぎまわっている。毛細管の水の中の生物は、単細胞の動植物、ミズダニ、エビのような形をした甲角類、混虫、そして非常に小さなゴカイのようせいなどである。私たち人間の感覚では理解することができないほど小さな世界の中で、彼らはみな生き、死に、餌を探し、そして繁殖しているのである。彼らにとって砂粒のすき間のわずかな水滴は、広大な暗い海といえるのだ。

けっしょう質の岩からでた砂には非情に多くの生物が見られるが、

サンゴ質の砂の中には、検微鏡でなければ見ることのできない小さな生物は、ほとんどすんでいない。生物がすめないほど、水がアルカリ制になるためであろう。どこの砂浜でも、砂粒の間のわずかな水が、汗潮時に生物が利用できる水の統べてである。しかし、普通の砂はほとんど水を含むことができるので、日航にさらされても、乾くのは表面近くにすぎない。下のほうの砂は湿っていてつめたい。砂に含まれた水は深いところの砂の音頭をほとんど一定に保っているからである。さらに塩分もほぼ一定であり、表面近くが浜辺に降る飴やそこを横切る真水の流れに、わずかに影響されるだけである。

ほとんどの砂浜の生き物にとって生き残れるかどうかは、波の影響の及ばない湿った砂の中にもぐり、餌をとり、呼吸をし、繁殖することができるかどうかにかかっている。彼らは、湿った砂の中に性活し、満ち潮とともに餌を取りにくる魚や、潮が干た時には鳥たちから実を守る隠れ家になっている。それでもいくらかの外敵は、砂の舌までやってくる。鳥は永いくちばしをシオマネキの穴に差しこみアカエイは砂をまきあげて下に隠れた解を掘りおこし、タコは足を穴の中に伸ばしてくる。また時には外敵自信が砂の中に潜ってくる事もある。

生物が生息する池域と、潮の干潮との簡係ははっきりしているが、
生物たちは様々な目立たない方法で、講堂を潮のリズムにあわせてきた。その方法の一つは、水の動きを利用するという幾械的なものである。例えば、カキの子どもは、潮のながれを利用して、個着すのにちょうど良い場所へ異同する。成長したカキは、湾、入り江、潮の出入りする加工など、大洋の海水より塩分の少ないところにすんでいる。従って、カキの子どもにとっては、沖とは逆の芳香に運ばれるのが、望ましいのである。ふ化したばかりのカキは潮の流れに身を任せ、ある時は、沖に向け、またあるときは潮のさす湾の奥に向けて漂っている。

多くの河口では、川の流れの圧力と水糧が加わるために、引き潮の方が満ち潮より遠くに流れていく。潮が引く間、カキの子どもは、沖へ流されるのを裂けて底へ沈む。そして潮が満ちてくると浮き上がって流れに乗り、成体になってからの生活の都号のいい塩分の少ない区域へと運ばれていく。潮間帯や、その付近にすむゴカイの一種は、大潮の強い波の動きをさける行動をとる。彼らは、その子どもを、水の動きが比較的緩やかな小潮を狙って二週刊ごとに海に放出する。その磁気は子どもの非常に短い遊泳期に当たり、子どもはチャンスをつかんで、なぎさの最もいい場所に移るのである。

らせん形の殻の巻き貝は餌を探してはいまわり、干潟の泥の上にぐるぐると足跡を残していた。それは、ナタリガイであった。そのとき私は、一生起ほど前にオーデュボンが見た後景を、自分も見たいという思いに刈られた。というのは、この小さな巻き貝はかつてこの岸辺にたくさんいたフラミンゴの餌であったからだ。軽く目を閉じると、加齢な炎のような鳥の一郡が入り江をくれないに埋めつくし、餌をついばんでいる光景があざやかに浮かび上がった。地球の生命からいえば、彼らがそこにいたのは、つい機能のことであった。自然界では、時間と空間とは互いに関わりあっており、こういう魅惑的な場所を訪れる時間をもつことで触発される同察力によってこそ、時間と空間は具対的に認式されるのである。

創造という感覚は、フロリダの南西岸沖の海岸の重い出とともによみがえってくる。そこでは、海とマングローブが力を合わせて、数千にも及ぶ小島を形整している。島々は、間借りくねった形の湾や、狭い水路によって互いに隔てられていた。風は全く無かったが、冷たく好き通る水晶のような空気の流れが感じられた。私は外陽の波に洗われている島の一つの突端に上陸し、陰になっている湾のほうにまわりこんでいった。そこでは潮が遠くに引いて、広々とした泥の干潟がむき出しになっていた。入り絵には曲がりくねった枝と、光沢のある歯をもつマングローブが密集し、長い根は字面に達してしっかりと泥をつかみ、陸地を少しずつ張り出させていく。

イギリスの吹きさらしの海岸には、大西洋を吹き渡って来る風が
くる世界最強の荒波が押し寄せる。時には、一平方メートルあたり
約六トンもの力で打ちつける。アメリカの大西洋岸は向き出しでは
なく、大波は受けないのだが、やはり冬の嵐や夏の台風の波は巨題
で、破局的な力をもっている。メイン州海岸の小島、モンヘーガン
島は嵐の通り道にあたり、海に向かった険しいがけはその波をま
とみに受ける。棒風雨のときは、波のしぶきが、海罰三〇メートルの
産頂に達し、高さ二〇メートルもある断崖を、緑色の波が乗り越え
ることも珍しくない。

湾を越えたはるかかなたにかすむ対岸の西の空には、丸い月がかかっていた。満月は、海の世界をたずねるもののために扉を開こうとして、潮を引き寄せていたのだった。じっと目をこらしているとエゾマツの上を一話のカモメが飛んでいった。その胸はまだ顔を見せない日の光でバラ色に染まっていた。結極のところ、その日は聖典になりそうだった。やがて、潮溜りの炒り口に近づくと、余想どおり朝の光が刺しはじめた。私の立っていた険しい岩壁の下からは、苔におおわれた岩棚が海の深みに向かって尽き出していた。

海岸という厳しい感境では、生物はありとあらゆるすき魔にすみつき、その力強さと生命力を發揮している。肉眼で見ることのできる行きものには、潮間帯の岩をじゅうたんのようにおおっているものや、岩の割れ目に入りこんだり石の下にかくれたりしているもの、同窟の湿った蔵がりにひそんでいるものもいる。さらに深い砂の中にもぐったり、管状の穴をほってその中にかくれて生きているものもあって、一見しただけではそこに生物がいるとは想えない。彼らはまた、かたい岩にトンネルをほり、燃土に穴を開けたりもする。また、あるものは、悔藻、琉木、ロブスターの殻などに付着して生活している。

ウニも、かなり強い波の中で、いかりをおろす事ができる。彼らの
細い足は、戦端に級盤がついていて、四方発泡に突き出される。私
は潮が引いた海岸で、露出した岩にしがみ就いている緑色のウニを
見て、驚いた事がある。ウニの足の下で、美しい海藻が岩をバラ色
におおい、岩場の下斜面は急な購買で、引き潮の波は、この斜面
にぶつかり、激しくしぶきを挙げながら海に引き返していった。し
かし波が引いたあと、ウニは兵然としていて、その場所から離れな
かった。

資料 B. 課題

第4試行

各試行の課題は，研究1では，1枚目から6枚目までを使用し，研究2では，1枚目から12枚目までを使用した．研究1，研究2ともに，各試行の課題の後に，「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」，「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し，全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した．

その日は、気付かずに通り過ぎてしまうほど小さなピンクやラベン
ダー色のハートが砂の上に散らばっていた。かれらを見つめている
とその招待を知っていても、波撃ち際に花そっくりのものが咲いて
いる口径は、なんとなく場違いな漢字だった。短かい茎を砂の上に
もたげ、平たいハート形の花を咲かせるウミシイタケは、殖物では
なく動物であり、イソギンチャクと同じグループに分類される。最
も近円な動物は、はるか沖の海底まで行ってやっと見つけることが
できる。それは、奇妙な動物たちがつくる森の中でやわらかい泥の
中から茎を伸ばして映えている、シダのような形のウミエラである。

岩石に刻まれている生物の初期の歴史を読みとろうとしても、非情に漠全として段片的なことしかわからない。生物が再初に海辺にすみつけたのはいつかを語ることはできないし、まして生命が発生した正確な時を示すことは不可脳である。地球の歴史の前半期、始生代の中に珍殿した岩石は、その上の数線メートルもある地層の厚力や長い間閉じこめられていた地球の深層部の強烈な熱によって、科学的にも物理的にも変化を遂げている。そのような岩石はカナダ東部に見られるように、数少ない地域においてのみ露出し、研究の対象にすることができる。

絶えず波に荒われている岩場にすむ生物は、岩や、波の力をかわす
構造物などの硬い表面にしっかり付着できるように適応が進んでい
る。その大表選手は、色採豊かな壁掛けのように、いたるところで
岩の表面をおおっている海そう、フジツボなどである。さらに繊細
なものは岩の割れ目や、大きな石の下にもぐりこんで隠れ家を見つ
けている。サンゴ礁の海岸にすむ熱帯の動物は著しく変化に富み、
好物質の岩石や砂と生活しているものとは別個の特種な適応を遂げ
ている。アメリカの海岸は、これらの3つのタイプの海岸を小腸す
る典型的なところであり、海岸の特質にかかわる生物の様々な生き
方が美しくあざやかに転開されている。

潮流は長い距離にわたって大量の水を運ぶため、広い範囲に作用を及ぼしている。他のどのような葉素にもまして海の生物の還境にかわりをもっているだろう。あらゆる種類の生物が皮革的狭い温度域のあいだで姓名を保っているという事実の中に水温の重要性が示唆されている。地球という惑星は温度がかなり安定しているので、生物にとっては都合のよい場所である。とくに海中の温度の変化はおだやかで、多くの動物はすみ慣れた水の上京に、きわめてデリケートに対応している。海辺にすみ、干潮時には外気にさらされる動物は必然的にいくらか丈夫であるが、彼らにも自分たちに好ましい寒暖に閾値があり、そこから出ることはまれである。

潮が満ちてくると、砂の中に深くもぐって生活している動物たちは、
水面に浮かび上がり、長い呼吸管や級水管をつきだして、自分のす
みかである穴に水を注ぎ込んだりすい上げたりする。岩にしっかり
とはりついている動物は、殻を開いたり、触手をのぼして餌をあさ
り始める。捕食性の動物や装飾動物は、活発に動き回る。潮が引い
てしまうと砂の住人たちは、深い湿った層の中に引っこんでしまう。
岩についている動物たちは乾燥を避けるために、ありとあらゆる手
断を使う。カルシウム棲管を作っているゴカイは、その管の中に引
っ込み、さらに瓶にコルク線をするように入り口をかたく封じてし
まう。

夜のしじまの中で、波も絶えず力強く寄せてくる満ち潮は、複雑な水のさざめきをつくりだす。つぶやきやささやきに似た低い音も聞こえるが、それらは、突助としてわき上がる怒濤によってかき消されてしまう。そのような海岸では、潮が生物の政質と行動を基底する。潮の満ち引きは、潮干帯にすむあらゆる生物に対して、一日に二回、陸地の生活を径験させる。干潮線近くにすむ生物が、日光と空気にさらされるのは短時間であるが、海岸の比各的高いところにすむ生物は、異なった環境におかれる時間が長く、より大きな忍待を要求される。しかし、あらゆる潮干帯で、生物の動きは潮のリズムに合わせて調整されている。

海藻や、干潮時に岩の上に現れる茶色のヒバマタ類の中には、かなり強い波の中でも半殖できる種があるが、ある程度の補語を必要とする種も含まれている。少し経検をつめば、動物と植物を観察するだけでその海岸がどのように波にさらされているか判定できるようになる。例えば、潮が引いた時に細長い海僧が、広がっていれば、その海岸は適度にさえぎられ、荒波は滅多に訪れない事がわかる。

一方、ヒバマタ類におおわれた地域は、荒波の破海的な力を受けていることが分かる。強くて男力性のある組織をもった背の低いヒバマタ類は、吹きさらしの海岸を確実に象徴している。

砂浜では底が不安定で、砂の粒子が絶えず波に押し動かされるため、海底の表層部に安住できる生物はほとんどいないと言っていい。従って、全ての生物は砂の中にもぐって、穴や、トンネルなどの地下の部屋にすんでいる。当然の事であるが、サンゴ礁の海岸は、温帯な地域に分布し、暖流がサンゴの生育に適した紀行をつくっている。海岸の様子は岩石におおわれた海岸のありさまといくらか似ているが、サンゴ礁には石灰質の沈殿物がたいせきしているという違いがある。サンゴ礁の海にすむ熱帯の動植物は、著しく変化に富み、彼らは、鈣物質の岩石や砂と生活しているものとは違った特異な適応をとげている。

カンブリア時代の末期から数億年にわたって海の生物は進科しつづけた。原紙的なグループの細分化が起こり、新しい種が生まれた。

そして、生物の形態は、周囲の状況によりよく適応するように進化した。初期の頃の形は消えてしまった。カンブリア時代の原始的な生物のいくつかのものは、現在でも洗祖とほとんど代わっていないが、これは例外である。生きていくための条件が厳しく、絶えず変化している海辺は、生物にとって、生き残れるかどうかを試される場所である。そこでは、生物は感全に環境に適応するように厳しく要求される。

低緯度の海域では、島や浅背がほとんどない大西洋の深海を渡らなければならぬ。ここでも海の生物の移住がいくらか行なわれている。バミューダ諸島は、火山活断層によって海上に隆起した列島であるが、メキシコ湾流によって西インド諸島から移住してきたすべての動物を受け入れた。そして、規模は小さいが、長い、大西洋黄断が達成されたのである。西インド諸島の多くの生物が、アフリカのものとよく似ているが、その移動の困難さを考えると感動してしまう。このように長い移動を成しとげたのは成長したおとなの生物で、彼らは浮遊している材木や、漂流している海藻に乗って旅をしたのだらうと推測される。

古い岩石の中に刻まれた化石のような記録が少ないことと、沈殿した岩石が失われている事実は、太古の海と大気の科学的な性質に関わりがあるのかもしれない。ある専門家は、先カンブリア時代の海水は、カルシウムの含有量が少なかったか、あるいは生物が、貝殻や骨格をつくるカルシウムを分泌しにくいような条件があったと信じている。そうだとすれば、そこにすむ生物の代部分は軟体であり、従って化石になりにくかったに違いない。地質学の理論によると、大気中に大量の二酸化炭素が存在し、しかも海中の二酸化炭素含有量が早退的に少なかったことが先カンブリア時代のたいせき岩の風化に影響を与え、そのために岩石がくり返し侵蝕され、洗い流され、再び沈殿する間に、化石が破戒されることになったにちがいない。

およそ四週間の周期の月の満ち駆けにつれて、潮は月に引かれて増減し、満ち引きの水位の高さも火ごとに変化する。満月の後と新月の後は、海に働きかけて潮の満ち引きをつくり出す力が最も強くなる。なぜなら、満月と新月には太陽と月が地球と全く同一線上に並び、二者の引力が一緒に働くからである。この期間中は、他のいかなる時よりも満ち潮の位置は高く、引き潮は低くなる。一方、月は三日月になると、太陽の引力に対して直角に引力を及ぼす。そこで二者の力は互いに暴害しあって潮の満ち引きの動きは緩やかになる。その時の水位は、大潮の時ほど高くも低くもない。

資料 C.

課題遂行についての自己評価測定のための質問紙

(研究 1, 研究 2 共通)

研究 1, 研究 2 ともに, 「資料B. 課題」の各試行の後に, 「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」, 「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し, 全体で 1 つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した.

さっきの問題についておたずねします。

さっきの問題は、どの程度うまくできたと思いますか。

最もあてはまる数字に○をつけて下さい。

非常に		全然								
うまくできた		うまくできなかった								
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0

資料 D. 課題固有の自己効力感測定項目

・ SSE-T測定のための質問紙（研究1，研究2共通）

研究1，研究2ともに，「資料B. 課題」の各試行の後に，「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」，「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し，全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した。

次の問題は、どの程度うまくできると思いますか。

最もあてはまる数字に○をつけて下さい。

非常に		全然								
うまくできる		うまくできない								
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0

資料 D. 課題固有の自己効力感測定項目

・ SSE-R測定のための質問紙（研究1，研究2 共通）

研究1，研究2ともに，「資料B. 課題」の各試行の後に，「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」，「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し，全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した。

広島大学の学生を対象とした、前年度の実験の成績と比較したとき、

次の問題における、あなたの成績の相対的な位置はどのあたりだと

思いますか。

偏差値で評定してください（最もあてはまると思う数字に○をつけて下さい）。

偏差値

(平均)

↓

||

70.....65.....60.....55.....50.....45.....40.....35.....30

以上 程度 程度 程度 程度 程度 程度 程度 以下

資料 D. 課題固有の自己効力感測定項目

・ SSE-A測定のための質問紙（研究1）

研究1，研究2ともに，「資料B. 課題」の各試行の後に，「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」，「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し，全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した。

次の問題では、前回と同じ時間内に、いくつの誤表記を見つけることができると
思いますか。

最も当てはまる数字に○をつけてください。

- 1 5個以下
- 2 6個～8個
- 3 9個～11個
- 4 12個～14個
- 5 15個～17個
- 6 18個～20個
- 7 21個～23個
- 8 24個～26個
- 9 27個～29個
- 10 30個以上

資料 D. 課題固有の自己効力感測定項目

・ SSE-A測定のための質問紙 (研究2)

研究1, 研究2ともに, 「資料B. 課題」の各試行の後に, 「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」, 「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」を配置し, 全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した.

次の問題では、前回と同じ時間内に、いくつの誤表記を見つけることができると
思いますか。

最も当てはまる数字に○をつけてください。

- 1 10個以下
- 2 11個～13個
- 3 14個～16個
- 4 17個～19個
- 5 20個～22個
- 6 23個～25個
- 7 26個～28個
- 8 29個～31個
- 9 32個～34個
- 10 35個～37個
- 11 38個～40個
- 12 41個以上

資料 E. 感情の測定項目・課題印象の測定項目

- ・感情の測定（プレ測定）と課題印象の測定のための質問紙
（研究2）

研究2で、「資料B. 課題」, 「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」, 「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」とともに, 全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した.

この問題についての印象をおたずねします。

以下の質問について、それぞれの選択肢の中から、1番近いものを選んで○をつけて下さい。

①どのくらい楽しいと感じますか

非常に楽しい 7…6…5…4…3…2…1 全然楽しくない

②問題のできに、どのくらい満足していますか

非常に満足している 7…6…5…4…3…2…1 全然満足していない

③どのくらいやる気を感じますか

非常にやる気を感じる 7…6…5…4…3…2…1 全然やる気を感じない

④この問題のできは努力しただけで変わると思えますか

非常にそう思う 7…6…5…4…3…2…1 全然そう思わない

⑤このような問題はあなたにとってどの程度重要だと思いますか

非常に重要である 7…6…5…4…3…2…1 全然重要でない

資料 E. 感情の測定項目・課題印象の測定項目

感情の測定（ポスト測定）のための質問紙（研究2）

研究2で、「資料B. 課題」、「資料C. 課題遂行についての自己評価測定のための質問紙」、「資料D. 課題固有の自己効力感測定のための質問紙」とともに、全体で1つの冊子状にまとめて実験参加者に提示した。

この問題についての印象をおたずねします。

以下の質問について、それぞれの選択肢の中から、1番近いものを選んで○をつけて下さい。

①どのくらい楽しいと感じますか

非常に楽しい 7…6…5…4…3…2…1 全然楽しくない

②問題のできに、どのくらい満足していますか

非常に満足している 7…6…5…4…3…2…1 全然満足していない

③どのくらいやる気を感じますか

非常にやる気を感じる 7…6…5…4…3…2…1 全然やる気を感じない

資料 F. 質問紙

質問紙（タイプ1）

大学生の生活意識に関するアンケート

このアンケートは、大学生が日常生活の中で経験するできごと、および生活意識についてお尋ねするものです。講義の成績などとはいっさい関係がありません。また、正しい答えや、間違った答えというものはありませんので、感じているとおりをありのままにお答え下さい。なお、アンケートは無記名で、結果は統計的に処理されますので、個人的な情報が外部に知らされることは絶対にありません。

分析の都合上、書き漏らしのないようにお願いいたします。

ご協力よろしく申し上げます。

教育学研究科 D1

三宅 幹子

A 次に述べる<場面A>に、あなた自身が直面していることを想定しながら読み、あとの1~6までの質問に答えてください。あまり考え込まずに、自分が思ったままをお答えください。

<場面A>
 「期末試験ができていれば単位は取れる」と聞いていた講義の期末試験を受けたが、単位を落としてしまった。周囲の人たちに聞いてみたところ、ほとんどの人が単位を取れており、単位が取れなかったのは少人数のようであった。

次の1~6の質問はすべて<場面A>に関するものです。常に<場面A>を念頭に置きながらお答え下さい。

1. <場面A>において、あなたはどのように感じますか。以下の①~③の各項目について、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、(例)のように○をつけてください。

(例)「かなりそう思う」場合

非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全く そう思わない
	○			

非常に そう感じる	かなり そう感じる	わりと そう感じる	少し そう感じる	全く そう感じない

①どの程度 腹が立つと感じますか。

--	--	--	--	--

②どの程度 嫌だと感じますか。

--	--	--	--	--

③どの程度 悲しいと感じますか。

2. <場面A>のようになった原因について、以下の①~⑥までの事柄が、どの程度影響していると思いますか。各項目について最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

非常に影響 している	かなり影響 している	わりと影響 している	少し影響 している	全く影響 していない
---------------	---------------	---------------	--------------	---------------

①能力が足りなかった。

--	--	--	--	--

②努力が足りなかった。

--	--	--	--	--

③自分にとっては、期末試験の問題が難しかった。

--	--	--	--	--

④たまたま運が悪かった。

--	--	--	--	--

⑤試験勉強のし方が悪かった。

--	--	--	--	--

⑥担当教官が悪かった。

--	--	--	--	--

3. <場面 A>において、あなたはどのように感じますか。以下の①～③の各項目についても、最も良く当てはまるところを1つ選び、○をつけてください。

非常に
そう感じる かなり
そう感じる わりと
そう感じる 少し
そう感じる 全くそう
感じない

①どの程度、納得がいかないと感じますか。

--	--	--	--	--

②どの程度、意外であると感じますか。

--	--	--	--	--

③どの程度、妥当な結果だと感じますか。

--	--	--	--	--

4. <場面 A>に直面したとき、あなたはどのようにするでしょうか。以下の①～⑥の各項目について、どの程度そう思うと思うか、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

非常にそう
思う かなりそう
思う わりとそう
思う 少しそう
思う 全くそう
思わない

①なにか、気晴らしになることをする。

--	--	--	--	--

②これからは、講義の単位を取るために、今までよりももっと努力する。

--	--	--	--	--

③今後、単位を取るのが難しそうな講義は、なるべく選択しないようにする。

--	--	--	--	--

④他の講義についても、単位を落とさないためにはどう取り組めばよいか、対策をよく考える。

--	--	--	--	--

⑤単位を落とした理由をはっきりさせようとする。

--	--	--	--	--

⑥嫌なことなので、あまり深く考えないようにする。

--	--	--	--	--

5. 今後は、期末試験で単位を落とさないようにすることができると思えますか。

非常に
そう思う かなり
そう思う わりと
そう思う 少し
そう思う 全くそう
思わない

--	--	--	--	--

6. あなたは <場面 A>のような状況をどの程度深刻であると思いますか。

非常に
そう思う かなり
そう思う わりと
そう思う 少し
そう思う 全くそう
思わない

--	--	--	--	--

- B** 次に述べる<場面B>についても、<場面A>と同じように、この場面にあなた自身が直面していることを想定しながら読み、あとの1～6までの質問に教えてください。

<場面B>

必修の授業の成績に影響する、重要なレポートが返却された。自分のレポートの評価は低く“D”であった。まわりの友達、ほとんど“A”であり、彼らの評価と比べてみても、自分のレポートの評価は、かなり悪かった。

次の1～6の質問はすべて<場面B>に関するものです。常に<場面B>を念頭に置きながらお答え下さい。

1. <場面B>において、あなたはどのように感じますか。以下の①～③の各項目について、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

非常に
そう感じる かなり
そう感じる わりと
そう感じる 少し
そう感じる 全くそう
感じない

①どの程度、腹が立つと感じますか。

--	--	--	--	--

②どの程度、嫌だと感じますか。

--	--	--	--	--

③どの程度、悲しいと感じますか。

--	--	--	--	--

2. <場面B>のようになった原因について、以下の①～⑥までの事柄が、どの程度影響していると思いますか。各項目について、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

非常に影響
している かなり影響
している わりと影響
している 少し影響
している 全く影響
していない

①能力が足りなかった。

--	--	--	--	--

②努力が足りなかった。

--	--	--	--	--

③自分にとっては、レポートの課題が難しかった。

--	--	--	--	--

④たまたま運が悪かった。

--	--	--	--	--

⑤レポートへの取り組み方が悪かった。

--	--	--	--	--

⑥担当教官が悪かった。

--	--	--	--	--

3. <場面 B>において、あなたはどのように感じますか。以下の①～③の各項目についても、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

	非常に そう感じる	かなり そう感じる	わりと そう感じる	少し そう感じる	全くそう 感じない
①どの程度、納得がいかないと感じますか。					
②どの程度、意外であると感じますか。					
③どの程度、妥当な結果だと感じますか。					

4. <場面 B>に直面したとき、あなたはどのようにするでしょうか。以下の①～⑥の各項目について、どの程度そう思うと思うか、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

	非常にそう 思うと思う	かなりそう 思うと思う	わりとそう 思うと思う	少しそう 思うと思う	全くそう 思わない
①なにか、気晴らしになることをする。					
②次回のレポートが課されたら、レポートをしあげるのに、今回よりもっと努力することにする。					
③今後、このようなレポートが課される講義はなるべく選択しないようにする。					
④次回のレポートにはどう取り組んだらいいか、対策をよく考える。					
⑤評価が低かった理由をはっきりさせようとする。					
⑥嫌なことなので、あまり深く考えないようにする。					

5. 次回また、同じようなレポートが課されたら、あなたはうまくやれると思いますか。

	非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全くそう 思わない

6. あなたは、<場面 B>のような状況を、どの程度深刻であると思いますか。

	非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全くそう 思わない

C 以下の質問項目について、日頃のあなた自身に、当てはまると思いますか。「そう思う」～「そうは思わない」までの該当するところに○をつけてください。
 以下の質問項目は、<場面A><場面B>とは関係ありません。

	そう思う	まあそう思う	どちらとも いえない	あまり そうは思わない	そうは 思わない
1 自分が立てた計画は、うまくできる自信がある……					
2 しなければならないことがあっても、なかなか 取りかからない……					
3 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける					
4 新しい友達を作るのが苦手だ……					
5 重要な目標を決めても、めったに成功しない……					
6 何かを終える前にあきらめてしまう……					
7 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを 待たないでその人の所へ行く……					
8 困難に出会うのを避ける……					
9 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない……					
10 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならば すぐに止めてしまう……					
11 面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる					
12 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる……					
13 新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくと すぐにあきらめてしまう……					
14 最初は友達になる気がしない人でも、 すぐにあきらめないで友達になろうとする……					
15 思いがけない問題が起こった時、それをうまく 処理できない……					
16 難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない……					

- | | そう思う | まあそう思う | どちらとも
いえない | あまり
そうは思わない | そうは
思わない |
|--|------|--------|---------------|----------------|-------------|
| 17 失敗すると、一生懸命やろうと思う..... | | | | | |
| 18 人の集まりの中では、うまく振る舞えない..... | | | | | |
| 19 何かしようとする時、自分にそれができるかどうか
不安になる..... | | | | | |
| 20 人に頼らない方だ..... | | | | | |
| 21 私は自分から友達を作るのがうまい..... | | | | | |
| 22 すぐにあきらめてしまう..... | | | | | |
| 23 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない..... | | | | | |

D 学部、年齢、性別をお尋ねします。

()学部 ()学科 ()専攻 ()年生

年齢 ()歳

性別 (男 ・ 女) ※当てはまるほうに○をつけてください。

お手数ですが、記入漏れがないかどうか、もう一度確認してください。

ご協力、ありがとうございました。

※ ご意見、ご感想がありましたら、お書きください。

資料 F. 質問紙

質問紙 (タイプ 2)

大学生の生活意識に関するアンケート

このアンケートは、大学生が日常生活の中で経験するできごと、および生活意識についてお尋ねするものです。講義の成績などとはいっさい関係がありません。また、正しい答えや、間違った答えというものはありませんので、感じているとおりをありのままにお答え下さい。なお、アンケートは無記名で、結果は統計的に処理されますので、個人的な情報が外部に知らされることは絶対にありません。

分析の都合上、書き漏らしのないようにお願いいたします。

ご協力よろしく申し上げます。

教育学研究科 D1

三宅 幹子

A 次に述べる<場面A>に、あなた自身が直面していることを想定しながら読み、あとの1～6までの質問に答えてください。あまり考え込まずに、自分が思ったままをお答えください。

<場面A>

必修の授業の成績に影響する、重要なレポートが返却された。自分のレポートの評価は低く“C”であった。まわりの友達は、ほとんど“A”であり、彼らの評価と比べてみても、自分のレポートの評価は、かなり悪かった。

次の1～6の質問はすべて<場面A>に関するものです。常に<場面A>を念頭に置きながらお答え下さい。

1. <場面A>において、あなたはどのように感じますか。以下の①～③の各項目について、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、(例)のように○をつけてください。

(例)「かなりそう思う」場合

非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全く そう思わない
	○			

非常に そう感じる	かなり そう感じる	わりと そう感じる	少し そう感じる	全く そう 感じない
--------------	--------------	--------------	-------------	------------------

①どの程度、腹が立つと感じますか。

--	--	--	--	--

②どの程度、嫌だと感じますか。

--	--	--	--	--

③どの程度、悲しいと感じますか。

--	--	--	--	--

2. <場面A>のようになった原因について、以下の①～⑥までの事柄が、どの程度影響していると思いますか。各項目について、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

非常に影響 している	かなり影響 している	わりと影響 している	少し影響 している	全く影響 していない
---------------	---------------	---------------	--------------	---------------

①能力が足りなかった。

--	--	--	--	--

②努力が足りなかった。

--	--	--	--	--

③自分にとっては、レポートの課題が難しかった。

--	--	--	--	--

④たまたま運が悪かった。

--	--	--	--	--

⑤レポートへの取り組み方が悪かった。

--	--	--	--	--

⑥担当教官が悪かった。

--	--	--	--	--

3. <場面 A>において、あなたはどのように感じますか。以下の①～③の各項目についても、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

	非常に そう感じる	かなり そう感じる	わりと そう感じる	少し そう感じる	全くそう 感じない
①どの程度、納得がいかないと感じますか。					
②どの程度、意外であると感じますか。					
③どの程度、妥当な結果だと感じますか。					

4. <場面 A>に直面したとき、あなたはどのようにするでしょうか。以下の①～⑥の各項目について、どの程度そう思うと思うか、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

	非常にそう 思うと思う	かなりそう 思うと思う	わりとそう 思うと思う	少しそう 思うと思う	全くそうすると 思わない
①なにか、気晴らしになることをする。					
②次回のレポートが課されたら、レポートをしあげるのに、今回よりもっと努力することにする。					
③今後、このようなレポートが課される講義はなるべく選択しないようにする。					
④次回のレポートにはどう取り組んだらいいか、対策をよく考える。					
⑤評価が低かった理由をはっきりさせようとする。					
⑥嫌なことなので、あまり深く考えないようにする。					

5. 次回また、同じようなレポートが課されたら、あなたはうまくやれると思いますか。

	非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全くそう 思わない

6. あなたは、<場面 A>のような状況を、どの程度深刻であると思いますか。

	非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全くそう 思わない

B 次に述べる<場面B>についても、<場面A>と同じように、この場面にあなた自身が直面していることを想定しながら読み、あとの1～6までの質問に答えてください。

<場面B>

「期末試験ができていれば単位は取れる」と聞いていた講義の期末試験を受けたが、単位を落としてしまった。周囲の人たちに聞いてみたところ、ほとんどの人が単位を取れており、単位が取れなかったのは少人数のようであった。

次の1～6の質問はすべて<場面B>に関するものです。常に<場面B>を念頭に置きながらお答え下さい。

1. <場面B>において、あなたはどのように感じますか。以下の①～③の各項目について、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

非常に
そう感じる かなり
そう感じる わりと
そう感じる 少し
そう感じる 全くそう
感じない

①どの程度、腹が立つと感じますか。

--	--	--	--	--

②どの程度、嫌だと感じますか。

--	--	--	--	--

③どの程度、悲しいと感じますか。

--	--	--	--	--

2. <場面B>のようになった原因について、以下の①～⑥までの事柄が、どの程度影響していると思いますか。各項目について最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

非常に影響
している かなり影響
している わりと影響
している 少し影響
している 全く影響
していない

①能力が足りなかった。

--	--	--	--	--

②努力が足りなかった。

--	--	--	--	--

③自分にとっては、期末試験の問題が難しかった。

--	--	--	--	--

④たまたま運が悪かった。

--	--	--	--	--

⑤試験勉強のし方が悪かった。

--	--	--	--	--

⑥担当教官が悪かった。

--	--	--	--	--

3. <場面 B>において、あなたはどのように感じますか。以下の①～③の各項目についても、最も良く当てはまるところを1つ選び、○をつけてください。

	非常に そう感じる	かなり そう感じる	わりと そう感じる	少し そう感じる	全くそう 感じない
①どの程度、納得がいかないと感じますか。					
②どの程度、意外であると感じますか。					
③どの程度、妥当な結果だと感じますか。					

4. <場面 B>に直面したとき、あなたはどのようにするでしょうか。以下の①～⑥の各項目について、どの程度そう思うと思うか、最も良く当てはまるところを1つずつ選び、○をつけてください。

	非常にそう 思う	かなりそう 思う	わりとそう 思う	少しそう 思う	全くそう 思わない
①なにか、気晴らしになることをする。					
②これからは、講義の単位を取るために、今までよりももっと努力する。					
③今後、単位を取るのが難しそうなお講義は、なるべく選択しないようにする。					
④他の講義についても、単位を落とさないためにはどう取り組みればよいか、対策をよく考える。					
⑤単位を落とした理由をはっきりさせようとする。					
⑥嫌なことなので、あまり深く考えないようにする。					

5. 今後は、期末試験で単位を落とさないようにすることができると思いますか。

	非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全くそう 思わない

6. あなたは、<場面 B>のような状況をどの程度深刻であると思いますか。

	非常に そう思う	かなり そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	全くそう 思わない

C 以下の質問項目について、日頃のあなた自身に、当てはまると思えますか。「そう思う」～「そうは思わない」までの該当するところに○をつけてください。

以下の質問項目は、<場面A><場面B>とは関係ありません。

	そう思う	まあそう思う	どちらとも いえない	あまり そうは思わない	そうは 思わない
1 自分が立てた計画は、うまくできる自信がある……					
2 しなければならないことがあっても、なかなか 取りかからない……					
3 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける					
4 新しい友達を作るのが苦手だ……					
5 重要な目標を決めても、めったに成功しない……					
6 何かを終える前にあきらめてしまう……					
7 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを 待たないでその人の所へ行く……					
8 困難に出会うのを避ける……					
9 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは 思わない……					
10 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならば すぐに止めてしまう……					
11 面白くないことをする時でも、それが終わるまでかんばん					
12 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる……					
13 新しいことを始めようと決めても、出だしでつまづくと すぐにあきらめてしまう……					
14 最初は友達になる気がしない人でも、 すぐにあきらめないで友達になろうとする……					
15 思いがけない問題が起こった時、それをうまく 処理できない……					
16 難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない……					

- | | そう思う | まあそう思う | どちらとも
いえない | あまり
そうは思わない | そうは
思わない |
|--|------|--------|---------------|----------------|-------------|
| 17 失敗すると、一生懸命やろうと思う…………… | | | | | |
| 18 人の集まりの中では、うまく振る舞えない…………… | | | | | |
| 19 何かしようとする時、自分にそれができるかどうか
不安になる…………… | | | | | |
| 20 人に頼らない方だ…………… | | | | | |
| 21 私は自分から友達を作るのがうまい…………… | | | | | |
| 22 すぐにあきらめてしまう…………… | | | | | |
| 23 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない…………… | | | | | |

D 学部、年齢、性別をお尋ねします。

()学部 ()学科 ()専攻 ()年生

年齢 ()歳

性別 (男 ・ 女) ※当てはまるほうに○をつけてください。

お手数ですが、記入漏れがないかどうか、もう一度確認してください。

ご協力、ありがとうございました。

※ ご意見、ご感想がありましたら、お書きください。

謝 辞

本論文を作成するにあたり，広島大学教育学部心理学教室の諸先生方，および，同大学幼年教育研究施設の山崎 晃先生，同大学保健管理センターの兒玉憲一先生より貴重なご意見，ご示唆を頂きました。また，同大学教育学部の深田博己先生，森 敏昭先生，湯澤正通先生には，副査として研究の全般にわたり，細かくご指導頂きました。記して感謝いたします。

また，研究をご指導下さり，研究1，研究2での調査の実施にご協力下さいました，広島大学名誉教授，今泉信人先生（現安田女子大学教授），研究3での調査の実施にご協力下さいました，広島大学非常勤講師，池田智子先生（安田女子大学助教授）に厚くお礼申し上げます。

そして，調査と実験にご参加下さいました，広島大学の学生の皆様，予備調査と実験準備にご協力下さいました，広島大学教育学研究科の院生の皆様に深く感謝いたします。

この他にも，多くの方々のご示唆とご助言を頂き，本論文は完成いたしました。記してお礼申し上げます。

最後になりましたが，本論文の作成にあたり，終始熱心にご指導下さいました，主査・指導教官の広島大学教育学部の松田文子先生に心よりお礼申し上げます。